

通類鑑

大塚田原之助

中不羊
二月号



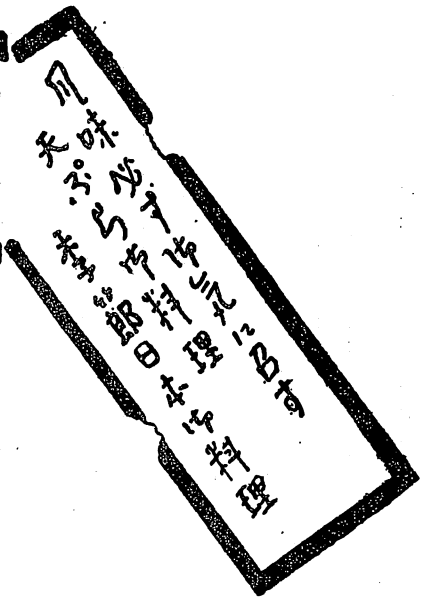
貨百チタコ
 うごそもでんはのものの子
 うろそもでんはのものの子
 橋 繁 心 阪 大
店服呉合十

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



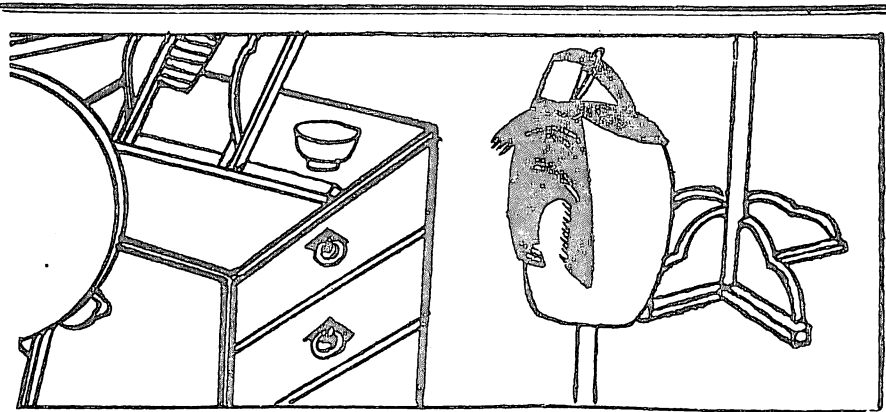
喜又屋會食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀 昭和五年二月號

第五年 第四十一輯

◇表紙 (大星由良之助).....南木芳太郎氏所藏

口

○中座二月の東西合同大歌舞伎◇「假名手本忠臣藏」雁治郎の大星由良之助◇幸四郎の高武藏守師直、勘彌の桃の井若狭之助◇幸四郎の高武藏守師直、福助の鹽谷判官高定◇雁治郎の勘平◇勘彌の斧定九郎◇雁治郎の茶屋場の由良之助、扇雀の四段目の力彌◇一助六由縁江戸櫻◇幸四郎の花川戸助六◇三浦屋店先の舞臺面と助六の型◇幸四郎の助六、福助の三浦屋揚巻◇彦三郎の擗の意休、幸四郎の助六、福助の揚巻◇浪花座二月の大歌舞伎◇「時雨の炬燵」魁車のおさん◇延若の紙屋治兵衛◇「矢の根」三升の曾我五郎「釣女」長三郎の醜女◇京都南座二月興行東京大新派合同劇◇假名屋小梅の一節「箱丁殺し」河合の小梅、小堀の兼吉、喜多村の宇治一重◇「明眸禍」伊井の老僧、水谷の珠子、「裸道中」伊井の清水次郎長梅島の森の石松、大矢の大政藤井の小政花柳の早川佐太郎◇「明眸禍」柳の脩治省三、英の妻みさよ、水谷の珠子、梅島の若き僧恭一◇角座の二月の家庭劇△「煙突」如月の妹お磯、小織の父治兵衛、三樂の魚屋山松、一月下旬邦劇座復活公演△「關八州繫馬」我童の將軍太郎良門、吉五郎の出羽冠者頼平露仙の詠歌の姫及び市原野だんまりの舞臺面◇文樂を見たる木下侍從一行の記念撮影◇文樂座二月興行△「境浦兜軍記」阿古屋の人形、「國性爺合戦」甘藷、錦祥女、和藤内の人形◇神戸松竹劇場△「貝殻一平」、中田の貝殻一平、和歌浦の白濱お千代、富士野のお加代、辻野の澤井轉、伊川の糸川帶刀◇道頓堀正月グラヒック

繪

◇扉(矢)の根.....田中滿彦書

大序(簡潔にして、重大な發展の鍵を握る).....高谷 伸 (二)

三段目(事件の中心點、忠臣藏の常識論).....山上 貞一 (四)

四段目(ハラキリ場、名劇の技巧的發展).....白岡道太郎 (六)

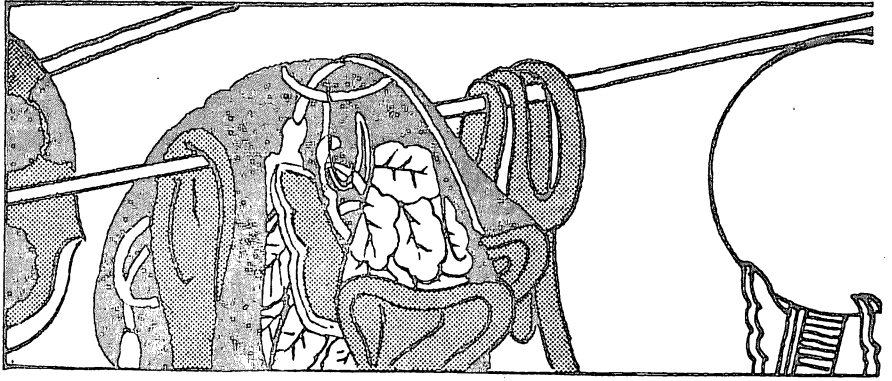
五段目(明快な動き、簡素な道具衣裳).....森 かのほ (七)

六段目(おかる勘平、忠臣藏の三味境).....森 かのほ (九)

七段目(演技伴奏に、演者の苦心が積る).....高谷 伸 (一二)

◆切賣りの忠臣藏.....高安吸江 (一四)

◆「忠臣藏」と「助六」のドグマ.....富田泰彦 (二〇)



◻「助六」の演出に就て……………濱村米藏(三六)
 ◻「助六」註文帳……………倉田啓明(三八)
 ◻「助六」に就て……………楠田敏郎(四〇)
 ◻古劇禮讚……………渡邊虹衣(四二)
 ◻「助六」禮讚……………邦枝完二(四四)

◻私の役々……………中村鴈治郎(一八)
 ◻助六。雜感……………松本幸四郎(三二)
 ◻頃日小感……………守田勘彌(三四)
 ◻國性爺に就て……………竹本津太夫(五六)
 ◻春の雪(忠臣藏聯作)……………入江來布(一五)

◻新舊「國性爺合戦」……………山上貞一(六六)
 ◻「國性爺」の變遷……………仲野武男(六九)

文樂座の印象(諸家)……………(七一)

△助六由縁江戸櫻……………(二四)
 △國性爺合戦甘輝館の場(正本)……………(四六)
 △國性爺合戦(院本)……………(四六)
 △矢の根……………(六〇)
 △時雨の炬燵(紙治内の場)……………(六二)

◻ブレイガイド……………(五八)
 ◻二月の劇壇……………(七六)

△挿繪カット……………田中滿彦
 △編輯後記……………松本泰三(七八)

細紋原旗

三原旗

細紋

三原商店

神戸市

南初西門

番五六一町元 電話



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食欲をそゝる春のお献立が

お待ち申してゐます

園
梅
園

お芝居でのお食堂にて………

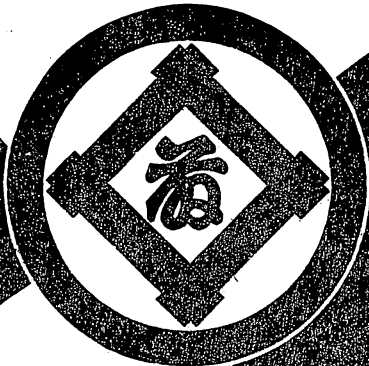
お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを………

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

紀元二五九〇年の

今年の



益々充實せる

實用百貨

一大市場

◆より御便利に……

◆よりよき品を……

◆よりお安く……

松坂屋

大阪

介紹の進新と表發の本脚演上

す集募を本脚りよ般一月毎

舞臺 戲曲

誌雜門專本脚の頁餘百二

を作大作力に劇譯翻に劇新に作新の劇伎舞歌

す介紹篇四至乃篇二號每を品作の人新し表發

來出日十二月前號每

(厘五錢一料送)錢拾五金部一

錢十五圓五年一・錢十八圓二年半

所行發

社曲戲台舞

二四町川米・坂赤・京東

番六八二三七京東座口替振

お芝居の

あいまには

高尙で趣味深い

寫眞のお道樂が

いッちよろしい!

寫眞機は

リリーカメラ

パールカメラ

アイデアカメラ

パーレットカメラ

(カタログ進呈)



大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

電話 南(三九二六)三番

本店

東京

本町二丁目



郎 治 鷹 村 中……………助 之 良 由 星 大



郎四幸本松……………直師守藏武高
彌勸田守……………助之狭若井の桃

行興月二座中
伎舞歌大同合西東

「藏臣忠本手名假」



確實

本邦最優最大の生命
保險會社として基礎
最も確實なり

有利

低廉の保險料を以て
最も豊富なる加入者
配當を實行す

親切

營業機關奉仕設備共
に完備し加入者各位
の賞讃を博す

契約高 八億五千餘萬圓
總資産 二億餘萬圓

日本生命

大坂市東區今橋四丁目

營 業 目 科

劇場照明配線工事設計
 火力水力電氣工事設計
 架空索道工事設計
 鋼索鐵道化工事設計
 地方鐵道電氣化工事設計
 都市電燈配線工事設計
 發電所變電機材料販賣
 電氣鐵道機材

バグナル株式會社

大阪市北區天神橋筋六丁目
 (新京阪ビルヂング)

電話園堀川局 35

自〇二三一
 至〇二三八
 〇四四〇番



(上) 高武藏守師直……………松本幸四郎
 (下) 鹽谷判官高定……………中村福助



行興月二座中
 伎舞歌大同合西東

「藏臣忠本手名假」



大成正駒の家貫が然燦と光る山崎街の勘平さん

綺の財布に五十兩、二つ玉が飛來るも知らぬげに
莞爾と山吹色をかぞへて御座る定九郎の姿は、な
んといつても繪ですね、詩的なシーンですね……



斧定九郎……守田勘彌

中座二月の「假名手本忠臣藏」



(上) 茶屋場の由良之助……………中村 鷹治郎
(下) 四段目の力彌……………中村 扇雀



好評

御化粧用

好評

たし出札賣て立目

スキナ

紙取らぶあ

散歩にいやなあぶら汚
お忘れあるな

各地の化粧品店石鹸
店に於て販賣いたし
て居ります。
荷道頓堀の各座の賣
店にても常備いたし
て居ります。

お買求めの
際はスキナ
と御指定を
乞ふ。

大阪スキナ屋

謹製

宴會的 社交的 家族的

必ずお多楽に召す 大阪唯可

— 日本料理 —

名代割烹 (天王寺公園)

電氣旅館

電話自一三三四番
至一三三七番



江戸の香りもいとなつかしき

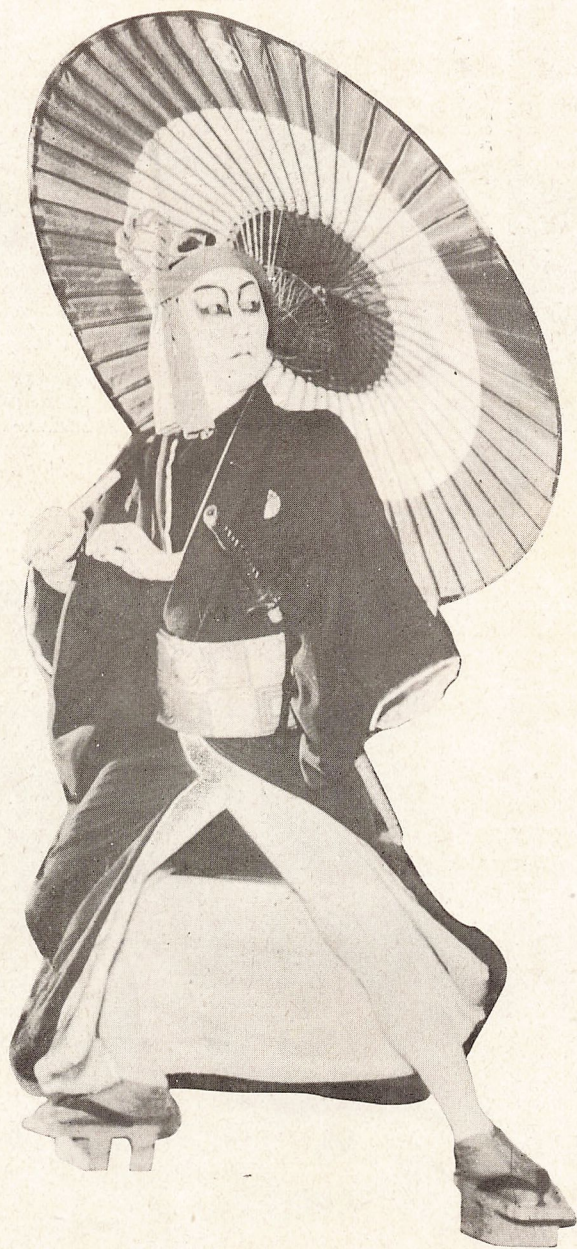
宗家の十八番……………。

河東節連中の節調に

江戸生粹の振も惚惚り……………。

廻る日並の約束に

何んと美しうはありませんか



「櫻戸江縁由六助」歌・舞・伎・月二座中
八十番の内

花川戸六助實は曾我五郎……松本幸四郎

メラツリ變らで
常磐木の……



メ 辻占茶屋にぬれてゐる
雨のみのわのさへかへる



メ おもひそめたる五所
紋日待つ日のよすがさへ



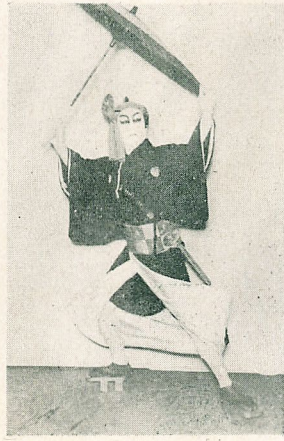
場の先店屋浦三……六助の座中



〽 風情なりける次第なり。
 (河東節最終のキマリの型)



〽 風情なりける
 次第なり……………



〽 富士と筑波を
 かざし草……………



場のみ合出屋浦三町之仲……………六助の座中



中座二月の東西合同大歌舞伎

二番目「助六由縁江戸櫻」

三浦屋店先の場

(上) 花川戸助六……松本幸四郎



(中と下)

三浦屋揚巻……中村福助



大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話 東
特長一五八〇番
特長一五八一番
二六五五番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

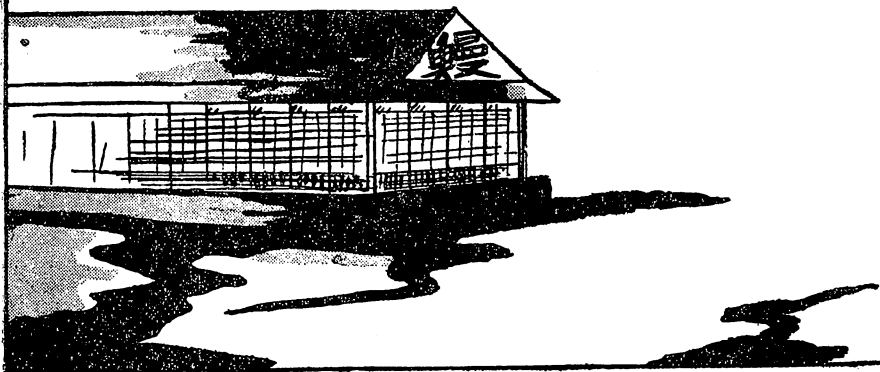
支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

大阪名物
船生州



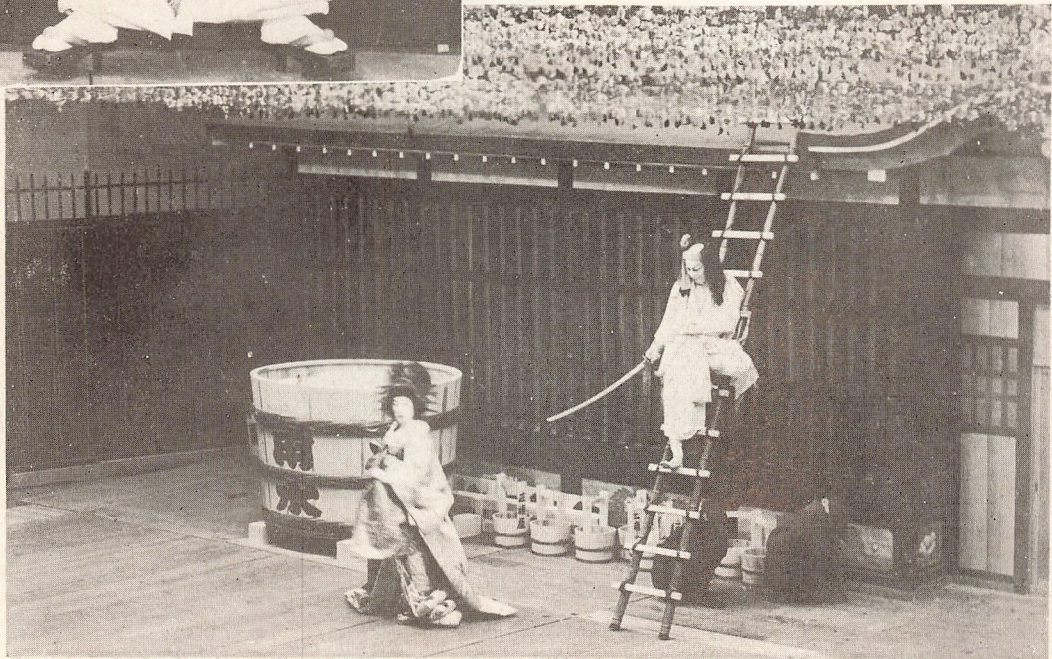
電話南

四八二〇
九五一
四八四



「櫻戸江縁由六助」の月二座中

郎三彦東阪……………休意の髯(上)
郎四幸本松……………六助(下)
助福村中……………巻揚(左)



座花浪の月二

場の内屋紙「燵炬の雨時」

車魁村中……んさお房女

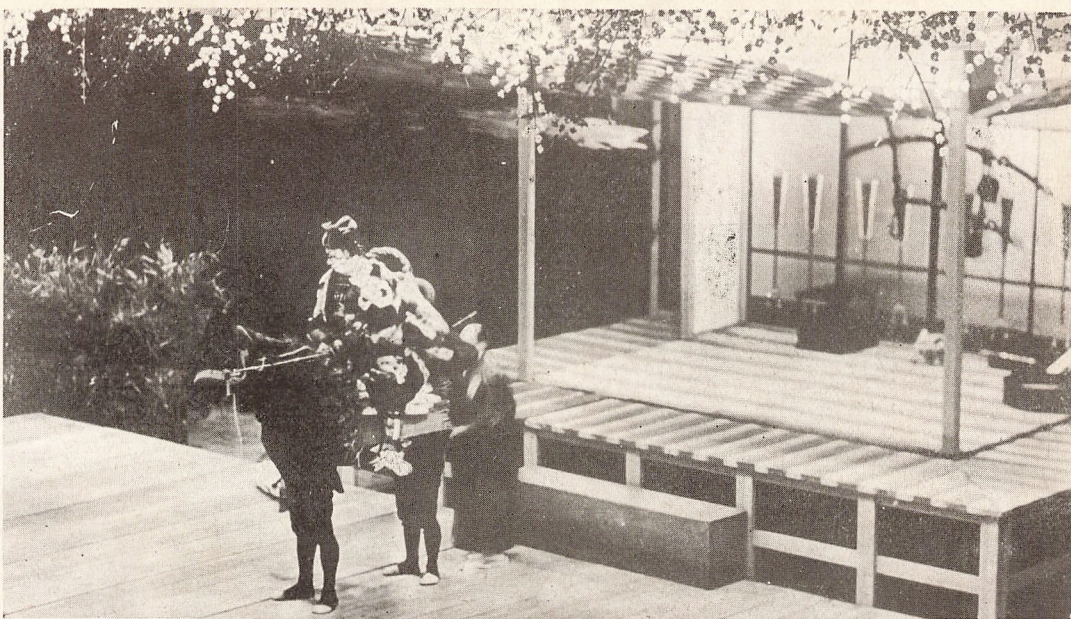




座花浪の月二

紙場の内屋紙「燵炬の雨時」

若延川實……衛兵治屋紙



二月の浪花座

歌舞伎十八番の内「矢の根」

(上中) 曾我五郎時致

市川三升

「釣女」

(下) 醜女……林長三郎



6'S トイワホ 8'S トルベズール 8'S ンモーア



ノ式新最共車兩ハ トルベズール・ンモーマ
 世ハ格價ガスデ車動自ノ比無牢堅テシニ美優デ車箭汽八
 スデ車イ安ノ一界
 牢堅スマリア種二ノ箭氣六及箭氣四ハ 車トイワホ
 アモ車ルア、ツリ走ヲ哩萬余十七今只デー界世ハ車ルナ
 スマリ

店理代總西關 **ンモーマ**
トイワホ
スターモ國帝

目丁五町 修造區東市阪大
 番八八九一局本話電
場エスピーサ
 目丁五町元岡市區港市阪大
 番〇七三二西話電

淨料理



大阪市今橋五丁目

つる家本店

電話本局
三三三
六三五
二六二
番番番

京都南座二月興行

東京大新派合同劇

假名屋小梅の一節

「箱丁殺し」



(上) 小梅……………河合武雄

兼 吉……………小堀 誠

(下) 宇治一重……………喜多村綠郎



「明眸禍」

序曲「櫻の蔭」

老僧……伊井蓉峰
 珠子……水谷八重子

南座二月の新派劇



「裸道中」

(中) 清水次郎長……伊井蓉峰
 森の石松……梅島昇
 大政……大矢市太郎
 小政……藤井六輔
 (下) 早川の佐太郎……花柳章太郎

京都南座
二月の新派劇
「明眸禍」



齋書の沼笹

郎 二 永 柳……………三省 沼 笹
郎 太 英……………よさみ 妻
子 重 八 谷 水……………子 珠



寺山の峨嵋

昇 島 梅……………(一恭)僧 若
子 重 八 谷 水……………子 珠



紅葉の庭

珠
子……………水谷八重子

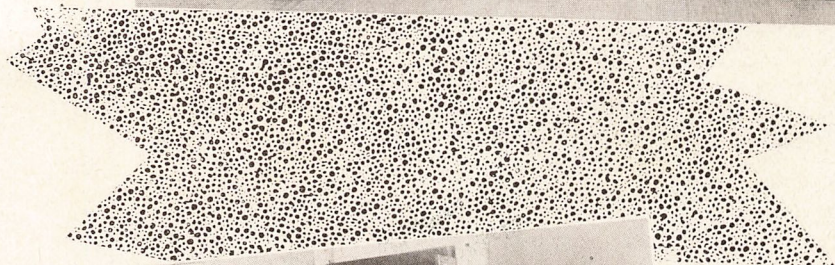
角座二月の家庭劇



小橋梅夜作

「烟 突」

健の妹お磯……………如月武子
 父親治兵衛……………小織桂一郎
 魚屋由松……………三樂



八方園福松作

「人 形 箱」

安江の娘久江……………小
 佐々木市兵衛……………十
 伴 一 郎……………天
 佐々木妻安江……………米

津外吾東

アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキヤラメル

チョコ
レート キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元
株式會社
横山商店

電話東(94)二〇六一番



月形龍之助主演 井上金太郎監督

陽 春 八 大 作 品 佐 倉 義 民 傳

大佛次郎原作 阪東妻三郎主演

林 長二郎主演 竹内俊一監督

か ら す 組 時 勢 は 移 る

栗島すみ子主演 島津保次郎監督

オールスターキヤスト 島津保次郎監督

麗 人 最 後 の 幸 福

市川右太衛門主演 城戸品郎監督

阪東壽之助主演 星 哲 六 監督

原 田 甲 斐 天 草 四 郎

鈴木綱四郎主演 牛原虚彦監督

進 軍 松 竹 キ ネ マ ●



— 演公座劇邦の旬下月一座花浪 —

の郎三吉……「馬繫州八關」(左上) • 門良郎太軍將の童我……「馬繫州八關」(右上)
りまんだ場の野原市……「馬繫州八關」(下) • 姫の歌詠の仙霞と平頼者冠羽出

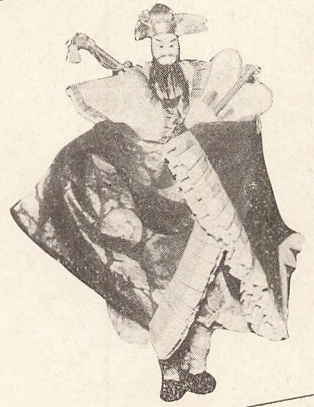
「壇浦兜軍記」阿古屋の人物



影撮念記の行一從侍下木たれら觀を座樂文

役重マネキ竹松上井・長社竹松井白・長部務内井半・長部務學木鈴三より右
長部察警原藏端左・從侍下木・郎十紋竹桐

形人の内藤和(左) 女祥錦(中) 輝甘(右)「戰合爺性國」行興月二座樂文





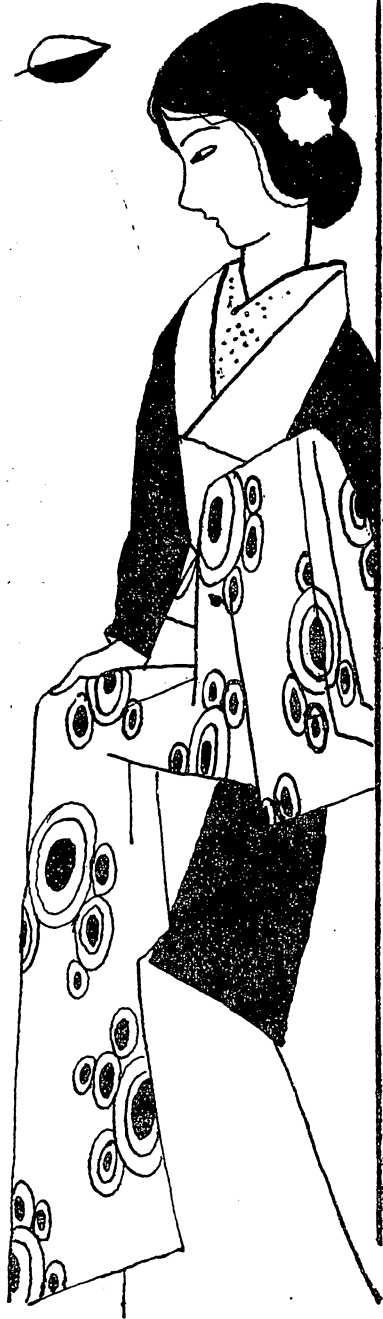
裂 小・具道小

貸 衣 裳

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい）
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部



東京支店

東京市淺草區並木町十五
園電話淺草 五五九九番

本店

大阪市南區久左衛門町八
園電話南一七一八番

颯爽たる

春の御容姿を

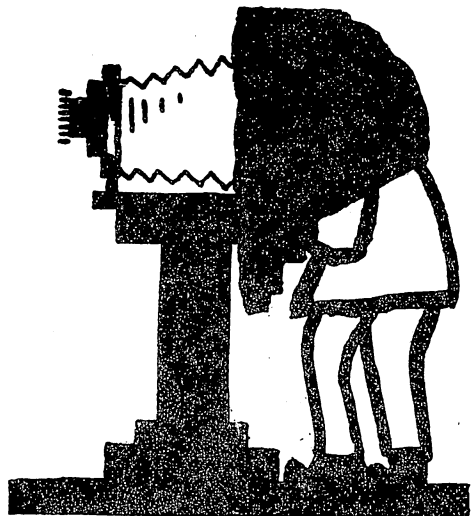
まづ優秀の技術を誇る

當館で御撮影下さい

高津郵便局東

山崎寫真館

電話南四二四四番



神戸松竹劇場
二月の新聲劇

「貝殻一平」



(右) 中田正造の貝殻一平
(上) 序幕の東本願寺横新地
和歌浦の白濱お千代、中田の一平、
富士野のお加代



(左) 辻野良一の澤井轉
(下) 大詰の伏見街道の場
中田の一平、伊川の帶刀
辻野の澤井轉



◇…クッヒラグの月正堀頓道…◇



(上右) 中座「南部坂」鷹治郎の大石内蔵之助 (上左)「簾の梅」我當の梶原源太景季、扇雀の梅ヶ枝 (下左) 浪花座「鎌倉三代記」右團次の佐々木高綱 (下右)「勇春駒」我童の春駒の男





(上左) 中座「簾の梅」扇雀の梅ヶ枝 (上右) 「戀飛脚大和往來」鷹治郎の忠兵衛 (下左) 「南部坂」我童の瑤泉院 (下右) 「戀飛脚大和往來」仁左衛門の孫右衛門、魁車の梅川 (中左) 浪花座「慶安太平記」福助の松平伊豆守 (中右) 同 延若の丸橋忠彌

松竹座レウユ一

「モンゴール王子」

(上) 瀧澄子、上山草人、若山千代

文楽座一月興行

(中) 「平家女護ヶ島」

榮三の俊寛

(下) 「壽式三番叟」

文五郎、榮三の三番叟



新時代尖端の往大キ超特作

原作者は……彼女を通じて……社會に呼びかける……あ、宿命的に陰鬱な空氣の下に産れつゝいた彼女の苦惱流轉の生活は、次から次へとその身邊につきまとう……何が彼女をそうさせたか？

新興文壇の權威 戯曲の映畫化
藤森成吉氏原作

何が彼女をそうさせたか

鈴木重吉監督作品・撮影 塚越成治

高津愛子主演

小島 洋々 濱田 格 尾崎 静子 藤間林太郎
海野 龍人 園 千枝子 浅野 節 二條 玉子 他オールスターキヤスト

一日公開



帝國キネマ演藝株式會社

芦邊劇場

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

電話 土佐堀

(44)

長

三四四
〇九九
八四四
三一〇
番番番

誌雜 · 究研劇演 · 刊月

二
月
號

演類編

第
五
年

輯 一 十 四 第





假名手本忠臣藏

大

簡潔にして

發展の鍵を握る

序

高谷伸

長いものには巻かれよと、言つたのは昔のこと、長いものはちよんざれといふ今の時節である。敢て階級闘争とやらに限らない。五段建の淨瑠璃、それを奥口等に分けて十餘段から成る院本が通して見られやうとは思はない。一段でさへ満足には出かねる時代である。

月々の狂言は皆みどりである。鮎屋と渡海屋とがつゞきだといへば變な顔をする人があるのも無理はない。その中に忠臣藏だけは不思議な程、通し狂言として扱はれてきた

九段目は切り離され、二段目と十段目は忘れられやうとしても、とにかく大序より茶屋場までは穢をつないできた。その「假名手本忠臣藏」が、通し狂言として残された唯一のものである時代さへ、まう長くないかも知れない。七段目だけ五六段目だけが獨立して出るやうになつた。半端物ではないこの頃流行の中間物としてである。

その急がしい時代に、如何して忠臣藏が、ともかくも通し狂言としての生命を持つてゐることができたか。それは大序がよくできてゐることも一つの理由である。

院本物の大序は多くの場合、内裏や營中で公卿や大名の善悪二派がごたくと事件や時代の説明をして、しかも全局の中心に縁の薄いものが多い。にも拘らず、忠臣藏では大序が簡潔でしかも重大な發展の鍵を握つてゐる。

人形淨瑠璃さへみどりである今では、大序としてわれわ

れの目に觸れるものは鶴ヶ岡だけだと言つても過言ではない。

従つて忠臣蔵の大序の演出は、古格を守られてさへ居れば、教へられる所が随分ある。

廻りといふ樂屋の準備如何をまわる折のはじめから棧敷にゐて歌舞伎特有の氣分に浸ることも興の深いものがあるしかも今度の忠臣蔵を演ぜられる中座は日本いや世界唯一の歌舞伎の劇場である。東京にも京都にも無い純粹の歌舞伎の殿堂である。

笛がなる。太鼓が聞こえる。最初の鳴物がカタシヤギリである。おどけた口上人形が出る。ふざけ過ぎては困るが操りと歌舞伎との關係を物語るものである。人形が入ると天王立になる。この鳴物の一くぎりに一つづ、折が入る。昔はこれを三度ばかり繰り返したさうだが、今は一度ぐらいで直して下り端になる。折をゆつくり刻んで幕があく。幕があくと、置鼓になつて、「幕ありといへども食せざれば」の淨瑠璃になり、例をこゝに假名書の太平の世の政」のオロシになるまでに東西の聲を七五三にかける。舞臺では中央上に足利直義、横に師直、平舞臺に若狭助と判官その他並び大名一同、それ／＼人形の心で座を占め

る。最近では無いが舞臺面の均衡上、師直に對して石堂右馬廐を据えたこともあるが、これは例外である。

師直、若狭助、判官、大紋の色にも黒、水色、黄とそれぞれ變化を見せると共に、役柄の強弱をも表すことになつてゐる。

人形の心で首を垂れてゐた人々も、床のそれ／＼の名を呼ぶにつれて、大紋の袖を搔いつくろひ人間になつてくる師直と若狭助との間に一議論あつて、顔世御前を呼びだし、兇改めの段になる。一同が入つて、一人残つた師直が顔世を口説きにかゝる。顔に似合はぬ様まゐるである。また來か、つた若狭助が顔世を去らせる。師直と若狭助との間の空氣が、いよく緊張してくる。

突如「還御」の聲である。兩人が畫面の見得できまる。折が入る。幕である。

これで充分二段目三段目との事件の發展を豫感させる。師直若狭助判官の三人が大序にすでに、判然と書かれてゐるからである。これを見ても忠臣蔵の大序は、俗にいふ駄三ツではない。なくもがなの序幕でなくて、初めから確かり中心に觸れてゐる。

院本では、こゝで還御の列を見させてゐる。芝居でも古くは

直義公をまう一度出してゐるが、三段目との關係を考へると、還御の聲だけで拆を入れた方が幕切の効果が強くなるかうした舞臺効果を意味する省略は、かへつて好結果の場合もあるが、たゞ何がなしに時間だけの理由からくる省略は芝居を毒するものである。

ともすればお役人が干渉して時間制限のおせつかいまでされる時節である。でなくても人の氣が短くなつて忠實な演出のむづかしくなつて行くのに、速度々々忙はしい言葉が流行する。それほど速度がやかましいなら、四十七分の忠臣藏をやつた曾我廼家五郎はすばらしい先覺者である。幕切は別として、幕あきなどは忠實な演出で充分、芝居氣分を深めたいものである。

目 段 三

事件の中心點

忠臣藏の常識論

山 上 貞 一

綜合藝術として演劇の諸條件を遺憾なく具備し、大衆的

興味を十二分に盛つて、凡そ狂言に現はれるほどの構想なり、筋の全部を包含してゐる「忠臣藏」に就て、もう考證的なことを書くべくあまりに有名であり、研究的なことを書くにはあまりにすぎない。たゞこゝには「忠臣藏」を禮讃して、元祿期に於ける武家制度の批判を、それを材料にして舞臺化した劇作者の常識に對して、尖端的な今日から見て、如何に惠まれた彼であつたかを羨望する方が妥當らしい。

全體を十二段に分つた趣好を一年十二月から出たものとしてからが、既に大衆的な趣好であるが、鶴ヶ岡の兜改め桃井邸の松切り、と事件が端を發して三段目は殿中松の廊下となる。昭和の疑獄事件を俟つまでもなく、政府と收賂は古來つきもので、徳川期はその代表的繁雜期なものであつた。そこへ着眼した作者が、更に老人の執拗なる戀着とからませた處は、色と金の見本展覽會で、諸狂言中斯くまでに、斯道の代表的老人が出て來る劇は少い。老人と言へば名譽なり金錢なり戀愛なりに、趣味的な愛玩心を持つてゐるものが多いが、高師直ばかりは徹底してゐる。徳川の臣吉良上野介には茶道の心得があつたが、鹽谷判官の妻女が美人だと聞いて湯殿を垣間見る足利期の高師直には、た

だ卑俗なる貪欲のみが旺盛であつた。附屬するに玉の盃底なきが如しとひたすら淫してゐた吉田の兼好法師が美辭麗句をつらねてそつたのだから、徹底のしやうが決してさばくしてゐない。こゝが作者竹田出雲のねがけ處で、さてこそ、鹽谷判官の文字も現はれ、それに對して高師直の文字も使用された譯ではあるまいか。

だが、今も昔も官僚臭の不愉快さは郵便局に一步入れば鼻を突く如くいゝものではない。鹽口三寸ひらげば……といふ制定のある殿中で小さな刀にしろすらりと抜く職官たるものゝ意氣は眞に壯なるものであつても、決して悲なものではない。悲を思ふものは勸忍の心がある。鮎だ鮎だ武士であらうが、井中の蛙で鼻柱を何方でどう打とうが、袴が長袴素袍であらうが、着替えさえ持つておれば間に逢ふ。現に着替えてすみつゝあるではないか。——こう言へば芝居は面白くない。氣の永い人間揃ひの徳川中期に、短氣者を點出したのも作者の功勞だが、松の廊下に於ける老人の無遠慮極まる罵詈譏諷刺は蓋し完璧に近い。だが師直とてあの齡で金が欲しい人間だ、殺されやうと思つてあ言つたのではない。賄賂が欲しくて請求する形式を露骨にやつたまでだ。その請求ももう駄目だと思つて積極的に出

た。そこへ——わがつまならでつまなかさねそ——と書いた女文字の短冊が現はれたので、かつと來たのだ。此の老人家外にお若い。即ちするべき事をしたまでの話で、師直の立場から言へば、敵討は愚か額の傷すらも、つまらない損をした事になる。この損の野の老人と命不用の短氣者、全く判官は短氣者だ、あの美人の顔世御前を擁して、師直の手にする女文字の短冊を誰からかとちらツと神經を働かすと、それはわが妻の手跡だ。——わがつまならでつまなかさねぞ——おほんど顎でも馴れておればすむ處を……全く女性の愛情を無視した短氣者だ。その二人を中心にして此の三段目では變つた二人の人物が現はれる、桃の井若狹之助とその家老加古川本藏だ。

この場の若狹之助は全く胸のすくい、役だ。俳優となつたからは一度はこの役をしないと、俳優になり甲斐のないといふ役だ。されば我が中村鷹治郎丈も「忠臣藏」では由良之助と勘平の外にこの場の若狹之助を買つて出で、「あのこゝな無禮者奴が……」といま短刀でやられた老人の額にびつしやりと扇子を喰はして、あつと思ふまに上手に消える。たゞなんやすうとした……といふのが三段目の若狹之助だ。今度は守田勘彌だそうだが、なんと恵まれた勘彌よ

それに引替えて加古川本藏ほど此の場でつまらぬ役を買つて出る慌て者はない。松を切つて主人の短氣を諫めたり、暮夜ひそかに師直邸を訪ふだけの融通人が、鯉口三寸の殿中で抜きも抜いたり、すらりと抜刀して、他人の額を傷けた既にしての犯罪者を抱きかゝえて止めるとは、あまりに判官に同情のない仕方だ。もつと息の根の止まるまでひと思ひにやらしてやればよい、ものを、全く馬鹿な出遮張りやうだ。だがこゝで師直が死んでは第一大星が困る、出場がない。「忠臣藏」は師直といふ對照に依つて劇的興味を十二段目まで持續さすが、その持續味を可能ならしめたのは加古川本藏である。「忠臣藏」は加古川本藏に依つて成立する——これを辯證法論理といふと京大の三木清君はまさか言はない。

四 段 目

ハラキリ場

名劇の技巧的發展

白岡道太郎

何しろ、これは日本名物二つの一である。フジヤマとそ

してハラキリ。ハラキリもこのハラキリは、天下に冠絶してゐるハラキリだ。三萬五千石——十三萬二千圓。今の十三萬二千圓だから、當時の物價指數に直すといくらになるかしらん。ともかくも大變なハラキリではある。ほく常に思ふのは、短氣は損氣といふことで、十三萬二千圓あれば顔世御前ぐらゐる、いくらでもあると思ふ。しかしだ、その十三萬二千圓のハラキリを見てみると、何やらしんげれど眼頭が熱くなつて來るから不思議である。

日本人といふ奴はけつたいな種族で、ハラキリはさぞ痛からうと考へるまへに、先づ福助のハラキリぶりに泣けてしふ。

何百年か後に、モダンボオイであるほくを泣かさうなんて、大それた考へで出雲君は書下したわけではなからうに閑話休題。

古今を貫くこの名劇の技巧的發展は、このハラキリ場に至つて爆發してしふ。事件の漸層的な開展、鹽谷判官の人格的開展もこの場を以て極點とする。この劇の主要な二つの人物。即ち鹽谷判官も大星由良の助も、日本武士道といふ大道を歩む通行の一人に過ぎない。武士道の本格的な味ひを語らうとする出雲の手によつて動く人形である。この

腹切場を以て鹽谷判官といふ現實的な人格は消滅してしまつて、そのスピリット——武士道に生きるスピリットが大星由良の助といふ、この場に於て始めて現れる人間によつて承繼される。これは、今日の作劇的見地から見ると、驚異すべきことである。

思潮氾濫的な今日の時代に於て、かくの如き一つの大きい精神を、斯の如き方法。即ち二人の主要人物を、たゞの一場面に於てのみ出會せしめて、而して、兩者が形影相離るべからざる如き感情を觀客に抱かしめるといふのは、武士道といふ大道あるが爲めであつて、現代に於ては、かかる作劇法は容易に成功せしめる事が出来ないといふは考へる併し乍ら、作劇者その人も亦、大膽にして卒直なる技巧を用ひ、この時代の精神を活かしてゐる事は注意に値する。

大星由良の助がいかに忠直な人物であるかといふことを判官の由良の助到着を待つ心持に於てその片鱗を味はしめ城明渡しといふ明快な手法によつて、觀客の肺腑を貫いて行くところ、言辭を挾む餘地のない立派な技巧である。判官が腹切の場で、綿々の怨みを由良の助に語つたところで、かうも觀客を把握する事は出来まい。寧ろ、一足後れて、盡きぬ怨みをたゞ一眼で判官が由良の助に語るとこ

ろに、心憎いまでの作者の用意を知る事が出来るのである。人あり、忠臣蔵は、出雲書下し當時より見れば次第に形を變へ、枝を剪り、葉を摘んで、即ちこゝに至つたものであるといふ。或はそれしからむか。

しかしだ。今日か、る事件が新聞紙上に報道されるならば、いかなる特號活字を以て、連日に亘る報道をくりかへすともか、る明快に、しかして心にくいまで人心を把握することは出来ないであらうに。

さりとはこの作者、いかなる星の下に生れ合せた幸運者であらうか。いく百年の後にまで、その名をうたはるゝとは——
その値ひ、その名譽、到底十二萬三千圓では買ひ得まいであらう。

五 段 目

明快な動き——

簡素な道具衣裳

森 ほのほ

五段目の一ト幕は、『忠臣蔵』といふ大規模なプランから

観ると、まるで數寄屋のやうにさゝやかなものですが、演
出の上から考察すると、これはなか／＼、すばらしいもの
だと思ひます。

簡素な道具立、單純な衣裳、明快な「動き」——それが
暗示的な鳴物と共に、様式的なリズムを持つ吾等の「歌
舞伎」を渾然と描き出してゐるのであります。

先づ幕が明くと、「本舞臺、一面小高き敷聲、うしろ黒幕
好き處に松の立ち樹、日覆より同じく吊り枝」この松蔭に
勘平が雨やみをしてゐる——これが昔の舞臺面で、爰で彌
五郎との出會があり、勘平が仇討の用金調達を約す件があ
るのでありますが、現今ではこの黒幕前をカットして了ふのが普
通です。或はこれを出す場合にも、黒幕前にはしません。

それは「車曳」の梅王櫻丸の出會を淺黄幕前にしないのと
同様、舞臺効果を考へての上からでもありませうし、又身
分の上の役者達が「仕出し」同様に見做されるのを厭ふ爲
からでもあらうと思ひます。この黒幕を淺黄幕で演るこ
ともあるやうですが、これは夜を象徴する處の黒幕でなけ
ればなりません。

こゝで彌五郎が郷右衛門の旅宿の所書を書いて渡し、勘
平も與一兵衛の住居を教へる——これが本文の行き方なの

ですが、芝居では彌五郎が「お待ち下され」とか何とか捨
臺詞を言つて矢立を取出して、懐紙へ勘平が教へる通り
の道筋を書きつける。これが型になつてゐるのですが、彌
五郎ともあらうものが、餘程頭が悪さうで感心しません。
古風も結構ですが、こんな型は墨守したくありません。

さて、黒幕を切つて落すと、真中に掛け稻、上下に敷聲、
下の方に松の立木——いつもの簡單な道具立です。昔の臺
帳には「日覆より松の吊り枝、タツブリと下ろし、すべて
物置き道具、本雨、時の鐘、蛙の聲」とありますが、現今
は吊り枝は下ろしませんし、本雨も、蛙の聲も遣ひません
丸本では與市兵衛の後をつけて定九郎が出るので、大昔
風に演ると丸本通に行くべきですが、現今は與市兵衛の獨
臺詞があつて財布を頂くと、掛け稻の間から定九郎が片手
を出して、その財布を引つたぐる型に定つて了ひました。

これは簡潔で而も舞臺効果の多い演出です。
定九郎の拵へは、大昔は山岡頭巾に夜具縞の着付、チヨ
ンな山賊立だつたのを、仲藏の創意で今のやうなスツキ
リした浪人物の拵へに改められたのは今更言ふまでもあり
ませんが、これは思ひ切つた寫實的な意匠で、「忠臣蔵」全
體の上から言ふと、不調和な扮装と非難すべきでせう。併

し、生白粉を塗つた顔、胸、手足と黒縮緬、そして真赤な血紅、白猷上の帯と朱鞆の大小、——その色彩の調和は、よし、寫實的であるといふ非難があつても、それを打消すに充分なものであります。與市兵衛の茶の着付と、定九郎の着付の黒との對比も好いものだと思ひます。

テンテレツク（早笛）で猪の出る前に、昔の臺帳では定九郎は松の木蔭へ隠れることになつてゐますが、今は誰も元の掛け稻の中へ忍ぶことにしてゐます。掛け稻を二度有効に使つてゐるのは、褒めていゝ演出です。

勘平はツカツカと出て、花道七三で二度目の鐵砲を打つて、一寸極る。火繩を振りながら本舞臺へ來て、件の松の木に行當つて火を消し、鐵砲を藁の上に糞と一緒に置き、腰の繩を捌いて極り、その繩を輪がね、山刀を抜いて探り寄り、得物と思つてそれで打拵え、繩を定九郎の足首へ懸けて目方を引く、目方が輕過ぎるので手で探る。人と知つて驚き、薬を探す心で懷中へ手をやる。財布に觸れる。財布の紐を刀の鯉口で切つて懷に捻ぢ込み、鐵砲と糞とを抱へて一散に向へ駈けて這入る——これは型の輪廓に過ぎませんが、役者は大凡右の段取を採つてゐます。勿論、役者によつて多少の相違はあります（着付なども亦同様です。）

たゞ一ついつも妙でないと思ふのは、勘平が財布を奪つて行きかけると、財布の紐が定九郎の首に懸つてゐるので定九郎が大の字なりの儘で起上ることです。折角の定九郎をこれ一つで全く臺無しにしてしまふ。これは是非改めることです。

勘平は一旦、向揚幕へ駈け込むのが普通ですが、こりや人……」で驚いてへたるのを析の頭にする役もあります。いづれにしても、前の鳴物をはやして道具を廻します。

六 段 目

おかる勘平——

忠臣藏の三昧境

森 ほんのほ

六段目の一ト幕は、五段目を序曲とした一挿話とも見做し得るものです。言ひ換ると、六段目は「忠臣藏」から離れても存在し得るものですが、六段目を省略した「忠臣藏」は山葵を附けないさしみのやうな、倦き足りなさ、頼りなさを感ぜらうと思ひます。「忠義」の作者が、「假名手

本」を懸案（けんあん）（寧ろ創作と言ふべきですが）するに當つて、勘平や本藏などの挿話は全く捨てて了ひ、クラノ（内藏之助）を中心とした筋一本で押通したのは、作全體から受ける感じを力強いものにする上からさもあるべきこと、思ひます。

「忠臣藏」には判官、勘平、本藏と三様の「腹切り」がありますが、今も昔も一番見物に受けるのは、やはり勘平の「腹切り」です。勘平が判官よりも、本藏よりも見物の同情、同感を喚ぶのは、勘平と言ふ若い、美しい善良な浪人が、偶然の「くひちがひ」から、戀女房や同志の人々から遠く離れて、獨り空しい死に就く點に在るのは今更言ふまでもありますまい。併し、勘平といふ美しい武士に扮する美しい役者の血みどろな、一種のエロチックな苦惱に對する同情が、同感が、よゝ力強いものであることも見逃してはなりませんまい。

テンツクの鳴物で道具が納まると、おかるが、襟を掛け、た小豆色石持の着付、黒緇子の丸帯、淺黄の半襟、白手拭といふ單純だが、配色の好い拵へで鏡臺に向つて、合せ鏡をしてゐるのは、錦繪そのまゝの情景です。

おかるを引取に来るのは、現今は一文字屋の女房（お才）でそれに女衞の源六が附添つてゐますが、昔は丸本通り一文字屋才兵衛だけど、今の源六の臺詞も才兵衛が言つてゐたのです。又、才兵衛をお才で行くのも、近年のこと、思ひます。源六の臺詞のついでに言ひますが、勘平が「親父どもの戻られぬに女房どもは渡されまい」といふ條で、丸本では才兵衛が「イヤこれ京大阪を股にかけ、女護ヶ嶋ほど奉公人を抱へる一文字屋」とだけアツサリ言つてのけ、臺帳の方でも「憚りながら判官の源六と言はれちやア京大阪は云ふに及ばず、江戸長崎までも顔を賣つた男だ。仲間もの者にもちつとやそつと立てられて、初穂茶の一杯も呑む男だ……」ぐらるで今のやうに「富士山へ腰を懸けて、近江の琵琶湖を横目に睨んで……」とか云ふやうな前受けを唱つた臺詞を餘り長々とは言はなかつたらしく、これは是非さうありたい處で、後の駕を追つての引込に煙草盆を提けて行かうとするのなども、同じ遣り過ぎの部であります。おかるが駕籠に乗る前に、丸本では母親との取り遣りがあるだけで、勘平の存在を忘れたやうなのは全く作者の手落だと思ふが、芝居の方では「勘平どの、そんならもう行くぞえ……さらばでござんす」とおかるが思切つて行きか

かる、ト勳平が「おかる待ちや」と呼び留める、「アイ」とおかるがツカ／＼と戻つて来てグイと勳平に抱き付く、勳平もおかるを抱き締める、思ひ入れあつて勳平が「達者でるやれ」と突放す、おかるが聲を上げて泣き倒れる、「達者でるねえでどうするものだ」と源六が格子を開けて這入つて来る……といふ段取、これは勝れた脚色で、僅かこれだけの臺詞、これだけの演技が、舞臺をグツと引締めてるます。これと前後しますが、夫婦の名残りに粹を通して、源六が外へ出る。それでも内の様子が氣になるので、格子戸へ近寄る。丁度おかるが盥の水をこぼす、水が足元へ流れる心が源六が飛退く、おかるが格子をピシヤリと閉めるのをキツカケにシンミリした合方、おかるは勳平の側へ寄り添ふ——これも手順の好い、垢抜けのした演出です。

母親は丸本に名はありません、それ故以前は一定した名もなかつたわけですが、今はおかるに似通つた呼び名のおかやと極つてゐます。勳平の役者に充分なシバキをさせるには、このおかやが餘程しつかりした腕の役者でなければなりません。

勳平を演る役者の難所は與一兵衛の死骸の運ばれたのを見てから後、切腹までの間で、血の付いた財布を母に引出

される條、所謂二人侍の訪れる條、煩悶に煩悶は重なり焦燥に焦燥は加はつて行くので、寸時も氣を抜くことの出来ない表現は、興味もあるが至難でもあります。この煩悶焦燥を助長させて行くのがつまりおかやの演所で、生易しいものではありません。

腹を突いてからの勳平は、岡目で觀る程難しいことはなく、篠人りになつての長臺詞も好い氣持でやれるのです。難しいのは前に述べた心理の描寫、二人侍を門口に迎へた姿態と臺詞廻し等でありませう。この二人侍の條で紋服と着替へる優もあり、或は紋服は落入りに掛けさせるのもありますが、普通は先刻御存じの通り、家に歸つた時に紋服と着換へます。切腹も居所が普通ですが、或は格子際で切る優、後向で突ツ込む際、未梢的な型は様々ですが、概して昔も今も、その型に大差はあるまいかと思はれます。たゞ近く吉右衛門の演じた團藏系の切腹は陰慘を主眼とする爲か、血のりの付け方などが醜く、この點どこまでもエロチックさを留めてゆく音羽屋系の方が勝つてゐます。(團藏系の型は總べて寫實味を多分に持つてゐます。)

二人侍は、若い氣早な彌五郎と、落付いた老年の數右衛門(或時は郷右衛門——これは丸本通り——或は堀部彌

兵衛、或は吉田忠左衛門。その對照は妙です。たゞ老年の方の敷右衛門を演る役者が餘り貫祿を見せようとして、由良の助もどきになつても、御當人はしたり顔であるのを屢々見受けます。彌五郎の、ともすれば騒々しくなるのと共に、役者の注意すべきこと、思ひます。

餘白があるから附け加へますが、勲平の薄い淺黄の紋服と、おかるの小豆色の着付とは色彩の對照が非常に好く、此點から言ふと、紋服と早く着替へて置く方に私は賛成します。

七 段 目

演技伴奏に

演者の苦心が積る

高 谷 伸

全體として墨畫が淡彩の趣のある忠臣藏の中に、七段目だけは極彩色の繪模様である。かうした所に對照の妙があり、作者の周到な用意が窺はれる。

釣燈籠のあかりの下に長い文を讀む由良の助、それをの

べ鏡で見るおかる。椽の下にうかがふ九大夫、さながら何某描く錦繪の構圖ができてゐる。由良の助の紫、おかるの緋、九大夫の茶といふ風に色彩にも三段の變化を見せてゐる。

平右衛門の襦袢の藍色とおかるの緋縮緬の胴ぬきの間にぱつと開いた白紙の花を、きらりと斬る兄の刀に感覺的な面白さはないか。力彌の黒紋附に紫の頬冠が見せる艶それが男色時代に、どれだけ觀客の網膜を刺戟したか。

さうした眼に映る面白さばかりではない。茶屋場にはいつもある面白さではあるが、賑やかな踊り地が、どれだけ人の心を浮き立たせるか。七段目の興趣はそれからそれへと盡きない。

花に遊ぶと祇園あたりの色揃へ……唄入りの踊り地である。太鼓が入る。本椽つきの二重、釣燈籠、手水鉢など重要な道具が見える。上手には二階屋臺、正面には色模様の暖簾がかつてゐる。九大夫と件内の出である。三人侍の件である。

めんない千鳥をして由良の助が出る。駒鳥の合方である平右衛門が三人を無理に抑へて入ると、八月の入る山科よりは一里半、力彌が文箱を持つて出る。鐙音をさせて花道

の枝折戸の陰で待つてゐる。四條の橋からの唄か何かに
なつて由良之助が枝折戸の柱に凭れて手紙を受取り、敵と
見えしは群れるる鷗で諺にまぎらし本舞臺へ戻る。九太夫
と蛸肴のやりとりがある。おのれ「末社ども」と言外の意
をそれとなく聞かせて由良之助が入る。あと、九太夫件内
の赤鯛から松浦さよ姫の洒落で、九太夫が床下へ入る。

再び、由良之助が出て、「九太はまう去なれたさうな」の
セリフがあり、これからが眼目である。

こゝでチヨチヨンと橋が入つて、奥の暖簾を落すと、灯
入りの庭遠見になる。下座では三下りの獨吟になる。

父よ母よとなく聲聞けば、妻にあふむのうつけし言の
葉エ、何ぢやいな、措かしやんせ。

由良之助は力彌の持つてきた文を釣燈籠の灯で讀む。こ
の長文を垂らして讀むのと、巻き取るのと二つの型がある
前者が彦三郎型、後者が團十郎型と言はれてゐる。理につ
まつた巻き取る型より、畫面になつた垂らした型の方が色
氣が出て美しいことは言ふまでもない。

二階からおかるが覗く、のべ鏡の末ばつたり釵を落す、
はつと後へ廻した由良之助の文を椽の下から九太夫が取ら
うとする。

感づいた由良之助が九ツ梯子を持ちだして、おかるを下
ろし、その梯子で椽の下を封鎖する。一石二鳥、身請け話か
ら、「あのうれしさうな顔わいの」と顔見合せ由良之助がち
よつと扇を開いてきまると獨吟になる。

世にも因果なものならわしが身ぢや可愛い男に幾世の
思ひ。エ、何んぢやいな措かしやんせ。忍び音に啼く
小夜千鳥。

由良之助は奥へ入り、おかるは文を書く。唄がきれると
平右衛門の出になる。高うは言はれぬと、文の様子をこれ
く明す「よめた」と思はず言ふ平右衛門、おかるの生
命を所望して、はつと抜き討ちに斬りかける。下座は踊り
地を早めてひく、懷紙が舞ふ。立廻りになる。花道の方
へ逃けるおかるを追ふて行く平右衛門の花道附け際の見得
になる。

明治二十二年に團菊左競演一日替りの七段目の記録を見
るとこの見得は、團十郎は左を踏みだしクルリと廻り右に
かゝつて刀を脊へ廻した裏見得、菊五郎は刀を振りあげて
顎をひいた畫面、左團次は真向に振り冠つて兩足を割つた
型と、それぞれ特色を發揮したとある。平右衛門は此見得
さへ、きつぱりすれば儲かる役である。(第三十九頁)

切賣りの忠臣藏

高安吸江

忠臣藏に助六、國性爺に矢の根と炬燵など、二月の道頓堀は義太夫ものに江戸歌舞伎、東西とりく、の古典趣味の横溢で、歌舞伎滅亡論の熾な今日、少からぬ皮肉を感じさせられますが議論はとにかくとして温古的で花やかな、お芝居らしい二の替は先以て結構な事でありませう。

一月に寺子屋で當てた中座は、同じ出雲の忠臣藏、本格の假名手本の通し、大序から七ツ目までを出すとの事ですが、圓熟した鷹治郎をはじめ福助其他關西の諸名士は今更云ふまでもなく、老巧な源之助、活歴じみるが質直な幸四郎、新舊何でも御座れの達者な勘彌等が加はつての大一座で定めて滿都の人氣を

煽ふる事であらふと想像されます。

近年道頓堀の舞臺に上つた忠臣藏は、大正五年十月、同十年の十一月、同十五年五月と丁度五年目毎に出て居ります。いかに重寶な獨參湯でもそ一度々では効きめがどうかと、掛念されないではありませんが、昔と違つてすべてが急速度の今日、以前の十年一ト昔より今の五年の方が遙に甚しい變り方ですから、必しも又かとの感を起させるにも限らないでしやう。それから一九三〇の此時代に漢法の獨參湯ではと難する人があるかも知れませんが、現今の洋藥界も大分行詰りかけ、何かな妙法をとソロ／＼漢藥の研究が大分流行しだした折柄、獨參湯もあながち唯古臭いとばかりでうち棄てるわけには参りますまい。たゞ困るのは時間の問題です。今度の中座でも二時間を要する助六と舞踊とで約三時間を除いた残りの數時間で果して七段目まで演じ得られませうか。否、それは斷じて不可能で、定型的是無論のこと、唯幕敷を都合よく並べるだけさへ餘程の努力が入るであらうと信じます。今日の興行時間では茶屋場までさへ此始末ですから、到底全曲を通しての上演は望めないわけですから、全篇十一段、假に一段を一時間としても一日仕事ですから昔は兎改めがまだ夜の明きらぬ中に演ぜられ、討入は夜半に

もなりましたのは當前と云ふべきです。

昔といへば私の幼時を憶い起します。其頃には主として一般民衆の趣味の中心が芝居でありましたが、今日のやうに毎月開場するのでなく、且又替りめ毎に見物するに限つたわけでない我々は、一日千秋の思で幾月も前からその日の来るのを待ち焦れて居ました。扱て當日まだホノ暗い、曉の星を戴いて、心も空に駆けつけますと大序鶴ヶ岡、足利直義を中央に師直、鹽谷桃井と左右に分れ、百目燧燦然たる光の中に、一同ズラリと顔を並べた卅観は、感激性の強い、見るもの一切が驚異そのものである幼な心にとつて、お正月の元旦以上の大なる歡喜を覺

— 忠 臣 藏 聯 作 —
春 の 雪

山崎やまつ間もとけし春の雪
紫摩黄金しろがねとつむ春の雪
山崎やはにふの家の春の雪
花に遊は、雪ふる春の祇園かな
梅に雪丹波與作か唄の聲

えずにはおられませんでした。現今でもそうですが、床で語り出す名乗につれて各俳優が今まで閉ちて居た眼を睜いてキツトなるあの見得などは、こう云ふ雰圍氣の中にあつて彌々その効果確實ならしめるもので、いかに天地開闢、人間創造の趣がマザ／＼と目前に現出せられるのです。
然し今日から見れば此等は皆お伽の國の神話に近いもので、到底その感じを再する事も困難でしやうが、せめて此名作の妙趣を幾分なり共より多く味ひ得る爲に、實際事件のあつた元祿十五年、或は初演の寛延元年、でなくば作者の竹田出雲の記念として、其何年かに相當する時期毎に、限られたる僅かの日

足輕かこのみち行きし春の雪
うす紅の木にも萱にも春の霜
みち芝や醒めかゝりたる春の雪
鶯やふとあけほのゝ霜に在り
鶯や籬のうちの里なれて

入 江 來 布

— 忠臣蔵 聯作 —
春 雪

春の雪山科みちの竹の前
山科へ一里半なる雪の果
山科は寒紅梅を藪の前
里なれて吹く風竹に鶯が
鶯の母よ父よとなくなめり

鶯のうつしかゝりし鸚鵡かな
鶯やよその戀ともちいさくて
鶯やはつたりおちし玉簪
鶯や霜に涙の眼にて
天の川見しそらさへも夜の雪

入江來布

數を、撰ばれたる俳優によつて、拂腕より夜半まで全篇アツ通しに原作其まゝ忠實に上演する企があつてほしいと思ひます。こゝに忠實と申しましたが、それは此様な特別の場合や、又は忠臣蔵に限らず、すべて古典劇の上演には然うありたいと思ひます。しかしいかに原作その儘が良いにしても、例の洞庭の秋の月は勿論、三段目の「奥は謠の聲高砂、松根によつて腰をすれば」の邊や、八ツ目の「しゝき、がんかう、がかい、れいにうきう」等その他徳川中期の淫蕩氣分の餘波と見られるエロチツクな箇所をも盡く忠實に、といふのではありません。唯末世の役者達が賢すぎての改作、度々の上演から手に入り過ぎた結

果からの蛇足などの取捨整理が必要であるといふ意味です。適切な例とは云へませんが、七段目のお輕が、勤平の年をいくつじやと思ふかと、先づ兄に反問してからサハリにあるなどの類も其一ツで、是等の冗長な點は十分注意して避けたいものです。上述の特別興行は別として八時間若くはそれ以下に短縮せられやうとする傾向をもつ現今では、原作を傷けない程度の演出に向つて、是非全曲をいくつかに別けなければなりません。例へば

- (一) 大序から城明渡まで
- (二) 山崎街道から茶屋場まで

(三) 道行から討入まで

先づこう三分して三日續きにやる、丁度ゲーテの「フワウス」を前後篇二回とし、シラーの「ワルレンシタイン」を陣營「ピコロミニ」、「ワルレンシタイン」の死と分けるやうなものです。或は此(一)を正月、(二)を五月、(三)を十月といふ風に季節をかへ、又は其興行毎に俳優を交代さしたり、更に又此分け方を改めて特別に勸平の悲劇と見て、三ツ目門外より道行を加へて五段目に續けるとか、或は本藏を中心に、それに似た試みをするのも面白いでしやう。要は唯どこまでも原作の滋味を失はぬやう、外形だけ整つて内容をば脂のぬけた水臭いものに變質させたくないと思ふのです。

終に古來から時々行はれた配役の毎日替りの事について申添えます。是は無論正道とは云へませんが、顔見世などの遊戯的分子の豊富な時期に用ゐられる一法です。参考のために昔東京の新富座(明治十一年十二月)でやつた役割を抄録してその一般を示します。

師 直 菊五郎、仲藏、左團次、宗十郎、團十郎
 判 官 左、菊、宗、團、家橋
 桃 井 宗、團、菊、左、家、小團次

石堂	仲、團、左、家、宗、菊
山名	團右衛門、宗、團、仲、菊、鶴藏
鷺坂	鶴藏、團、團右衛門、荒次郎、仲、左、菊、梅五郎、喜知六
與一兵衛	菊、宗、左、仲、喜知六、鶴藏、團右衛門
直義	團、小、小紫、宗、菊、家、左
勸平	菊、團、宗、家、左
かや	しげ松、仲、菊、左、猿十郎
定九郎	菊、團、家、左、宗、小
九太夫	菊、仲、左、團
本藏	仲、左、團、宗、菊
不破	仲、左、宗、菊、團
千崎	團、左、菊、宗、家、小
才兵衛	家、團、仲、宗、左、しげ松
源六	菊、梅五郎、つる藏、左、團、門藏、喜知六、仲
寺岡	左、菊、團、宗、仲
角兵衛	左、小、喜知六、團右衛門、つる藏、仲、家橋
由良之助	團、梅五郎
	團、宗、菊、左、仲

—(了)—



私 の 役 々

中 村 鴈 治 郎

字屋さん、音羽家さんの諸優が来阪の、お珍らしい處で「忠臣藏」はまた格別の御期待を仰ける事と思ひまして、この狂言を決定しましたものでございます。

私は由良之助の勤平で、役割豫想投票でも最高の豫想を戴きました事を非常に光榮に思つて居ます。

紙上を拜借して、御寄稿下さいました皆様に厚く御禮申上げます。

元來由良之助は、澤村宗十郎（すつと先代）の型を、大阪では、中村宗十郎が踏襲し、私の由良之助も、中村宗十郎に倣ひ、更に由良之助役者として定評のあつた團十郎の型も加味し、其處へ自分の解釋を加えたわけですが、團十郎の由良之助では、おかる及び勤平で附きあつて居ます。

團十郎は由良之助しか演らなかつた人ですが、宗十郎は由良之助にも勤平にも扮し、私の勤平も、大體宗十郎の流れを

善導とか、國民教化運動とか、世間では随分八釜敷く云はれて居る時節納「忠臣藏」の上場は、世論に合致するものでもありますし、また一つには、大衆的要望

的でもあります。

殊に、東京よりは、高麗家さん、喜の

「假名手本忠臣藏」は大正十五年五月の竹田雲樑百七十年忌の記念興行以來の上場で五年振りであります。

初春興行で南部坂の内藏之助を演り、又二月興行で、由良之助を演るとします

と、ツクといふ嫌ひもありますが、思想

汲んで居ます。

「忠臣蔵」は、狂言につまつたら「忠臣蔵」を出せ……と俗言にある通り、忠臣蔵さへ演れば、大入満員で、俳優も仕打も非常に得意がる狂言の様に聞えますが、俳優の場合は此に相違し、その演出に於て、この位骨の折れる狂言はありません。狂言につまつたら忠臣蔵……云々といふ程、お客様の方では、この狂言を知つて居ます、だから各場各役共に、一つの規矩がありそれを破つて演るわけには行かず、といつて單なる模倣では、第一お客様が承知しない……といふ風に、俳優にとつて、この位演り難い狂言はありません。

あれ程由良之助役者として衆望の的となつて居た團十郎も、「四段目はやりよかつたが、七段目は何時も思ふ通りにやれなかつた」といつて居ましたが、四段目

では、急使により主君の刃傷から切腹其の他を豫想し、更に師直に對する復讐を「しなくてはならぬ」といふ一心で、氣持の中に一つの纏りがあり、舞臺に望むにも、すべてを知つての上だから非常に演りい、わけです、然し、七ツ目茶屋場では「討たねばならぬ」といふ氣持は充分にありながら、敵方の間者には、その色も見せてはならず、といつて、敵を謀むための動作が、味方の士氣を殺ぐ様な演出になつてはいかないし、「何時も氣持ちよく演れない」と、藝に對する苦心を述べ居ました。

とまれ、二月興行は久々の「忠臣蔵」で、既に新聞其の他で發表いたしました様な役割を得ます事は珍らしい事で、必らず皆様の御期待には添へるだらうと信じて居ますが、何卒よろしくお引き廻しの程を、特にお願いして擱筆いたします

忠臣蔵(勘平住家の場)

早野勘平 中村鴈治郎

〽鏡き眼に涙をうかめ、事のわけせむれば、たまりかねて勘平、もろはだ押しぬぎ脇差を抜くより早く早く腹にぐつと突立て、苦しき息をホツホ、ホツとつき御平、ア、いづれもの、手前面目もなき仕業、拙者が望み叶はぬ時は切腹とはかねての覚悟、我が男どのを殺せし事、亡君の御耻辱とあれば、一ト通り申し開さん、御兩所に御許し下され、夜前彌五郎どにお目にかゝり別れて歸る暗まぎれ〽山を越す猪に出合ひ
二つ玉にて打とめ、かけよつてさぐり見れば猪にはあらで旅人、南無三寶誤つたり、薬はなきかと懐中をさぐり見れば、手に當る財布に入つたるこの金子、道ならぬ事なれども、天より我れに興ふる金と直に駆せ行き彌五郎どのにかの金子を渡し立歸つて様子を聞けば、打とめたるはわが男御、金は女房を買つた金、かほどまで、する事なすこといすかの噂ほど違ふといふも武運につきたる勘平の身の成り行き、御兩所御推量下されい。



「忠臣藏」と「助六」のドグマ

|| 歌舞伎の生命は俳優の生命 ||

富 田 泰 彦

「鷹治郎の由良之助は天下一品である」——

それだけで、今度の「假名手本忠臣藏」の搖ぎなき價値は定つて居る。

眼・眼・眼——眼千兩の鷹治郎の眼!! 智、情、意の利くその眼だけでも、大星由良之助を、誰と比較して遜色ありと云ひ得る者があるか、況してやその押出し、その貫碌、その演技、當代無比である以上、全く絶後的な由良之助であり、歌舞伎の最後を飾る「假名手本忠臣藏」である。

——一九三〇年、「何故に忠臣藏は貴いか」……でなければ「何故に生命を持つてゐるのか」、假りに私に、斯うした質問を抛けかける近代人? がありとすれば、私は言下に、我國劇

としての藝術的範鑄を多分に持つてゐるからだ……と答へるであらう。

歌舞伎の藝術價値は、形式美である。斯うした觀賞眼を持つては、既に演劇に對する新人舊人を問はざる批判の定義になつてゐると思ふ。今日「假名手本忠臣藏」を見ても、憂鬱にならざる點は、即ち形式美を諒解し得るほどに何人の頭腦にも、その概念が整ひすぎてゐるからである。それほどに、我國民と「忠臣藏」とが、斷つにた、れぬ親しみを持續してゐるのである。能くも米の御飯が飽かないものだと言ふ罰當りでない以上は……。

型・型・型……を生命とする。「忠臣藏」の役々。

操り淨瑠璃から歌舞伎獨自のものとして發達して來た「忠臣藏」そのもの、傳ふる處の各種の型や、いろくゝな傳説こそ、即ち我歌舞伎劇の進化史とも見れば、見らるゝ交渉を持つてゐる。

寛延元年八月竹本座の操り芝居に書卸された「假名手本忠臣藏」のため、爾來昭和五年の春に至る迄、幾多の名優を生み、さうして百種にも近い所謂「忠臣藏狂言」を、創作されし點から觀察しても視野の狭い私にしてからが猶「忠臣藏」禮讃論は、無盡藏にある所以である。

一九三〇年——世界の藝術界は古典に遠れと誨へて居る。新しい流れを追ふ時代のテンポに、感溺する人々には、恐らく驚異の聲であり、私自身には何んと耳懐しい聲ではあるまいか——？

灯・灯・灯——の道頓堀に、近代人の血管が脈打つやうにもえてゐるネオンランプにも、もう魅惑がなくなつた。音・音・音——の道頓堀に、現代層の混濁を強調したかのやうなジャズの音にも踊られなくなつた。あゝ浮華な亂舞の夢は、一瞬の享樂の滓を残して、その街頭に蹂躪されてゐる——と云ふ。是れが私の睡語ではない。現實の批判である。その證據

は——？「忠臣藏」さへ完全に生きてゐる。完全に生きてゐる。何故……何故……。

往昔は竹田出雲の「道頓堀」である。現代は中村鴈治郎の「道頓堀」である。嘘と思へば道頓堀の土に聞いて見るが可い——其處の土から生まれた藝術は、なほ生々と脈打つてゐる。

百目蠟燭のまたゝき、太三味線の啜り泣き……「道頓堀」の藝術は、猶定式幕のそよぐ舞臺の上に嚴存してゐる。それなのに今茲に古典復興を説くこと、既に私達の頭腦が何うかしてゐる。

「國民の忠臣藏」「國民教化の忠臣藏」——斯うした松竹の新聞廣告に機智があるように感心した私は、「古今いろは評林」と云ふ——「忠臣藏」淨瑠璃及び演劇に關する細大洩さず記した——そんな説明は、必要なきほどに名高い天明五年巳霜月上梓、八文字屏編する處のその本の巻尾に「……誠に忠臣藏の狂言いつとても大當りならぬ事なきは、全く實は實情の忠臣の功ゆへならんかしとも」とあつた。

日本の思想界は、何う動いてゐるか？今日の問題としてもこゝには暫く措く、「忠臣藏」の持つイデオロギー、まア難か

しく云はずとも、「忠臣蔵」そのもの、藝術上の認識不足の
ない以上は、誰にだつて判かる。人形式で幕が開くと、鎌倉
八幡宮社頭の場、正面には足利直義公、上手斜に立烏帽子に
五三の桐の黒の大紋、床の呼びで屈んでゐた頭を上るまでも
ない師直だ。黄の大紋は淺黄の大紋は、判官と若狭之助……
その色彩的舞臺の感覺だけでも大序であることは判かる。手
習草紙の「いろは」と共に知つてゐる。

×
團藏の師直は、傳五郎のは……？仁左のは……？而して近
くは延若、中車に就ても、師直意識が、未だ好劇家の胸にハ
ツキリ魅み返つて来る。而して今度の幸四郎に於ける演出へ
の興味と繋がる。

×
「嘉肴ありといへども食せざれば、其味ひを知らずとは、國
治つてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、譬へば星の晝見えず
夜は亂れて顯はるゝ、吉例を爰に假名書の……」と、是れは御
存じ知らずの人も多からん、大序の冒頭である。——嘉肴あ
りといへども食せざればの言葉は、直ちに今度の名優名役揃
ひの「忠臣蔵」の見物價値をも、暗示した箴言と云つて可い。
先づ見物せざるうちに結構は判らぬと云ふ事——だ。

×
譬へば星の晝見えず、夜は亂れて顯はるゝ、——この形容か

ら云つても、大星は主役として、「忠臣蔵」全體を背負ひ立つ
藝の力、それを我が鴈治郎に求めて、微塵危氣のない大磐石
の如き壓力、感激、興奮、等、等……觀客は、たゞ陶酔
境に導く——而して彼の表現は模倣ではない。盲従ではない。
猶更隋勢でなく、マンネリズムで満足する俳優でないことを
信ずる。

×
型・型・型——を生命とする歌舞伎!!型は形式ではない
精神を打込んでこそ躍動する。鴈治郎の見せんとする處は、
天明の、化政度の、明治期のではない、昭和五年の由良之助で
あらねばならぬ。此點私は、安心して期待してゐる。

×
「助六」「助六」「助六」——隨分好劇家の耳に、なじんで來
た名だ。だが本當の「助六」は歌舞伎十八番に封じ込められ
て、この大阪では、明治時代以後初演と云つても可い。「助六
は江戸一番の頭痛持ち」——と、その許しの色の紫の鉢巻が
生命である。歌舞伎十八番としての異色である。吉原の揚屋
前の達引を構想とした舞臺と共に……。色・色・色——色
彩の交錯である。

×
古典復興——さうした意味からでも「忠臣蔵」と共に、「助
六」は劇界での貴重な文獻を持つてゐる。

「假名手本忠臣藏」と云ひ、「助六由縁江戸櫻」と云ひ、ハイスピードの尖端に、動的な享樂を求むる時代に、是れは餘りにも奇蹟の如き上演と云つて可いほどに珍重したいものである。一幕二時間に垂々とする長丁場に、近代人的な感情の躍動を抑へて、封建時代の長閑さに、浸ることの出来る風流氣を未だ失はぬ日本人なのが、何よりも痛快だと思ふ。

追憶は、甘美な夢である。眞晝の夢である。それを更に詩化し、音楽化したのは歌舞伎の舞臺である。戀愛に對して、いろ／＼な理窟を云ふ人は、自己欺瞞である如く、性慾そのものを享樂として大びらに取扱はれた理想郷としての吉原の存在を、現實的にも否定し得ない今日、「助六」上演に對する煩瑣な關聯を今なほ持つてゐることも、強ち因襲とのみ笑つて終ふことは出来ない。——それほどに吉原の情趣點景が、この劇の基調をなしてゐるものである。

階級鬭争は、いつの世にもあつた。封建時代にあつての支配階級の武器は、たゞ暴力だつた。その暴力に對する反抗は正義の立脚地にある者の挑戦力だつた。ツラネと云ひ、啖呵と云ふのも畢竟それ等の詩的表現である。——其處に「助六」が大衆的に迎合されたスローガン？が判然する譯だ。

私の云はんとする處は、何うやら脇道に踏み込みさうだ。要するに、歌舞伎の醍醐味と云ふものは、脚本そのものよりも、寧ろ俳優の演技を中心として、味得すれば可いと云ひ度い。尤も狂言そのもの、愚劣なものは、如何に俳優の演技に支配權がありと云ひ條、それは論外である、實際さうしたものは、自然淘汰で亡びて終つてゐると思ふ。

一體歌舞伎十八番なるもの、濫觴は何であるか、「歌舞伎年代記」を考察する迄もない、狂言そのもの、價值よりも、俳優の演技が根本だつた。——それだけに如何に俳優はその演出法に苦心慘澹たるものあるかと察知出来るよう。「嚴格に云へば歌舞伎十八番などには版權などあり得ない」と云ふ論者のあるのも、その點を指摘してのことである。

斯うして私の支離滅裂となりか、つた論據を一ト括めにして、結論へと急ぐ——。即ち歌舞伎の價值は、俳優の演技にある。取り分け傳統的に洗練に洗練を経て集積された「型の芝居」としての模範的なものに「忠臣藏」があり、參考的なものに「助六」のある中座の二月興行を、此意味から極力推薦するに憚る處はない。而も歌舞伎の生命は俳優の生命と共に動く……。名優鴈治郎の健在と、共に天下一品の由良之助を謳歌する。(五・一・二三夜)

歌舞伎十八番の内【二月の中座】

助六由縁江戸櫻

幸四郎の助六―福助の揚巻―彦三郎の意休―勘彌の白酒屋
源之助の満江―三升の福山かつぎ―扇雀の白平―純藏の外郎置



止め木を聞いて場に入る。

通り神樂の合方につれて幕が開いた。

吉原三浦屋の場―

その舞臺の麹畑さ、結構さに場内は暫し観客のどよめきが續く。實に大懸りな舞臺ではある。

清振の彈流して、上手下手より提灯を持つた茶屋女、さては按摩、臺屋の男、辻片屋等すべて廊にのみ觀る男女が三々伍々出て舞臺を入違つて這入る。

と上手から後見が出て来て口上を述べのべる。

つまり、この「助六由縁江戸櫻」が歌舞伎十八番の中でも極めて重用される狂言であること、所謂容易に上演は困難であることを披露するのである。さてこの口上が済むと、正

面格子内の河東節連中に向ひ。

「河東節御連中様何卒御始め下されませう」と町重に言つて上手へ這る。特に河東節御

連中様と呼びかけるのは昔時より河東節御連中様と一般の玄人でなく、皆町家の旦那衆によつて組織されたもので、一切の利害關係から離れて、この「助六」のみには助勢の意味にて多額の金子を費してまで出演したもので、現今尙さうした旦那衆によつて組織されてゐると聞く。

後見が入ると直ぐ河東の前躍きになり、東西花道より金棒引二人出て付際にて金棒を突けば唄になり各人れ違つて揚巻に這ると直ぐ傾城八重衣が出る。あとから浮橋、胡蝶、愛染と何れも新造一通り、番新遣手若い者二人

が附添ひ。

河東の國の名の豊原や吉原に根越して植ゑし江戸櫻……の唄一杯に八甲字を踏んで舞臺へかゝる。夫と同時に暖簾口より誰袖と梅ヶ香が新造を連れて出て舞臺端に立身に居並ぶと、清振通り神樂の合方で外郎屋を待つほどに、揚巻から外郎屋藤吉が極りの扮装で舞臺へ来る。こゝで番新達がいづものいひ立てを外郎屋に所望する。これにて外郎屋は藥のいひ立てを見せ、又清振通り神樂の合方で上手へ這入る。と直に傾城の渡りせりふになり、かくするうちに愛染が向ふを見て。

「アレ／＼アノ提灯は慥に香葉牡丹、揚巻さんであらういなア」とせりふの切れた唄入り渡り拍子（闇の夜）になり揚巻の出になる。麹畑目を射るが如き扮装で若い者、禿、振袖新造、詰袖新造、番新、遣手、等の介添にて、酒に酔ひたるこなしにて、出て来て揚巻は東向に外皆々舞臺斜向花道一杯に居並ぶ。揚巻「これは／＼おれき／＼のお揃ひなされ、此揚巻をお待受けとは、マ、難有い」と言ひ、酔ふた理由を訊かれこれにて、揚巻は優しい管を巻く。と禿が酔のさめる薬とて袖の梅を

渡す件があり、前の（闇の夜）の唄にて一同舞臺へ来てと清搔の合方にて上手より曾我の満江が揚巻を探し出る。と揚巻は一同をのれん口に這入らせ、これより満江が揚巻に助六の喧嘩沙汰を心配のあまり、廊へ呼びつけぬやうと頼む件がある。やがて若い者が出て揚巻に意休の來た事を報らすので、満江は尚も助六の事を頼むて去る。

舞臺は揚巻一人になり、満江を見送り涙を拭ひ、

「おいとしやお袋さんは、助六さん故子故の暗、私は又助六さん故戀路の暗、何かに附けて女子程はかないものはないわいなア」で左の手を懐ろに右の煙管を突いて眼をつぶり考へると。本釣、薄く風音、直ぐ河東節にかゝる。

河東へおちこち人の呼子鳥、否にはあらぬ逢瀬より、こゝを浮世の仲の町、よしやはかせし越方の
此唄の初めに白玉の出になる。このうち以前、傾城六人、新造六人、暖簾口から出て來て後ろの床几に順に居並ぶ。
向ふ揚幕より白玉が出る。若い者が型の如

く後ろから傘を差掛け、禿二人が持物よろしく、その次に意休が左手を懐ろに右手に鳩杖を伊達に軽く突き乍ら出る。後ろに男達四人それに續いて振袖新造二人、詰袖の新造一人番新造手、若い者、茶屋女房がついて出る。一同花道に東向に居並び、河東の切れより清搔の彈流し。これにて意休を始め、男達四人の伊達の渡り裏詞があり皆々舞臺へ來てよろしく居並ぶと、八重衣が意休を揚巻に熱心に通ひ來るを知つて優しく抑捺すれば、揚巻は始めて心付きし科にて、

「ハテ仰山な、意休さんがござんすを、先刻から待つてゐたわいな」

「待つて居たと、助六の事か」とこれより意休が助六の事を悪しざまに罵るので、揚巻はムツとして、
「意休さんでもない、煩いこと云はしやんすな。お前の目を忍んで助六さんと逢ふからは仲の町の眞中で踏まれ様が、手にかけて殺されようが、夫がこはうて間夫狂ひがなるものかいな」と屹と云ひ、

「慮外ながら揚巻でござんす、男を立る助六が深間、鬼の女房にや鬼神ぢやわいな、さあ

これからは、揚巻が悪體の、マ初音」と大きく張り綱襦の襟に両手をかけ、肩から外し加減に斜に極る。清搔の合方になり。

「モン意休さん、お前と助六さんを徳ら並べて見る時は、此方は立派な男振、此方は意地の悪きうな、たとへて言はば、雪と墨、硯の海も、鳴門の海も、海と云ふ字は一つでも、深いと浅いは客と間夫、サア間夫がなければ女郎は闇暗がりで見てもお前と助六さん取違えてなるものかいなア。オホ、ハ、ハ」と身體を引いて心地よく笑ふ。意休は思入、堪へ兼て刀を取り、意氣込むと、揚巻は、

「お前私を切る氣でござんすか、切らしやんせ、たとひ切られても殺されても助六さんの事は思ひ切らぬ」と云ひ切るので、意休は刀を鞘に納めて、
「失せう」と源とした調子で強く云ふ。
「行つても大事ござんせぬか」
「タ、失しやアがれ」と長く引く。
揚巻は禿、番新、振新、若い者の介添へをうけ花道のスツポンの處まで行くと、白玉の呼び止になり。

「お前が其様に腹立しやんしては、お前が思

ふ其人の難儀にならうとも知れぬぞえ、とサア皆さんを差しおいて、おこがましふも呼び止めたは、出過ぎ者とのお叱りを受けるも知れぬ白玉は、ホンの蒼の藪樺、お前に向つて口青い、訛りも取れぬ小雀が、小癩な者と思はんせうが、名前に免じて揚卷さん、どうぞ戻つて下さるいなア」と極る。揚卷はちよつと振り返つて、

「可愛い男の所へ行くは嬉しいが、仲の好いお前の頼み潰されもさしやんすまい」と合方て揚卷は舞臺へ返つて来る、そして意休を見、

「意休さん、モウお前には逢はぬぞえ」と揚卷先きに續いて白玉、二人は附いて来た者一同暖簾口に入る。外の者は皆舞臺に残る。と向ふ揚卷の内て尺八の音がかすかに聞える。

「アレ虚無僧が来やんしたわいなア」と八重衣が向ふを見ると愛染が、

「アリや虚無僧ぢやない地廻りの衆ぢやわいなア」皆々

「どれ、ほんにナ」

で河東節のかゝりになる。

河東へ思ひ出見世やすがびきの音締の襟に招かれて、夫といはねど顔世鳥、間夫の名

とりの草の花。

の合の手で揚幕より助六が出る。右手に傘の握りを持ち、左手に轆轤を軽く持ち半スボメにして頭冠冠り、

河東へ雨のみのわのさへかへる。

でいる、本極りの型があつて、體は稍舞臺向、首は東棧敷の末を見上げた形で極ると舞臺の並び傾城が、

「助六さん、其鉢巻はえ」と問ふ。

「此鉢巻の御ふしんか……」と助六がゆつくり張つて言ひ、

河東へ此の鉢巻は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫の君がゆるしの色見えてうつり變らて常磐木の、松のはげ先すきびたひ、堤八丁風誘ふ、目あとの柳花の雪、傘につもりし山合は、富士と筑波をかざし草、草は音せぬ、ぬり鼻緒、一つ印籠一つ前、せくなせきやらのなサヨエ、浮世は十車サヨエ、廻る日並の約束は籠へ立ちて音づれも、果は口説がありふれた手管におちて隣言となりふりゆかし君ゆかし。

で極りの型あつて、

「君なら、君なら」と少し張つていひ、

河東へしんぞ命を揚卷の、これ助六が前わたり、風情なりける次第なり。

の段切で大きい見得で極る。

茲の大見得で河東が切れると並び傾城皆々。

「ヤンヤ」とほめ詞、續いて愛染が、

「助六さん待つて居たわいなア」といへば助六は傘をスボメで後見に渡し傾城の方を見て

「どうでんす、いつ見ても美しいお顔ぞるひ、なんなら一番、割込みませうかナ、冷ものごエす、御免なせえ」と清極になり助六床几に眞向にかけると、傾城新造皆々立つて、助六を取巻くやうに吸付煙草を出す。

助六その内の一本抜き取つて呑みながら、

「この様に銘々御馳走に預つては、しんぞ、火の用心が悪ふござんせう」と軽く言へば、意休が一寸横目に見て、

「君達の吸付黄、一ぶく」と所望する。

「お安い事ぢやが、きせるが御座んせぬ、このきせるには主が御座んすわいなア」

「して其ぬしは誰だ」と詰寄る、助六は意休を一寸見て、

「わしてござんす。何ときついものか、大門へぬつと面を出すと、仲の町の兩側から馴染

の女郎の吸付裏で、ナ、煙管の雨がふるやうだ。(張つて延ばす) なんぼ大盡だのと味噌をあげ、大きな面をしても(意休へかけて思入)かういふ事は金づくちや出来ねえ、誰だか知らねえが、煙管が入用なら一本貸して進ぜやう」とそろ／＼喧嘩の下地を賣りにかゝる。煙管を左足の親指の股に挟み意休の方へ眞直に延ばし、

「どうでんすな、どうでんすな」と大きく一杯に言ひ、意休はさげすむやうに、

「ウハ、ハ、ハ」と大笑して、

「や見かけは立派な男だが、可愛やこいつてんぼらだそらな、足のよく利く鉄屋の男かこんにやく屋の手間取りか、總じて男達といふものは、第一正直を守り、不義をせず、無理風を云はず、意氣地によりて心を磨くを誠の男達といふ、理非を辨へず慮外を働く奴を氣負といふ、兎角廓に絶へぬが地廻りのぶう／＼耳の端の蚊も同然、馬の耳に風、儘よ、蚊からに伽羅でも焚かうか」と云ひながら香爐へ伽羅を焚く、助六は意休のせりふの切れで直に、

「變道常ならず、敵に依りて變化なすとは此

三略の詞、相手によりてあしれえやうが違ふ來つて是非をとく人は是非の人、大きな面をする奴は足であしれえ無禮とがめをするやつは、下駄でぶつ、ぶたれてぎややばると引つこ抜いてた、つ切る習えも傳授も外にやあねえ、引つこ抜いてから竹割にぶつ放すが男達の極意だ、誰だと思ふエ。つがもねえ」と居並ぶ傾城に、意休の棚下しをする。

此時、のれん口よりくわんべら門兵衛が湯上りの扮りやりてと口争ひしながら舞臺へ來て居並ぶ傾城に憎まれ口を叩く、

と、花道より福山左肩にけんどん箱をかつぎ、舞臺へ來て門兵衛へ棒の先を當てたので福山が詫げるのを門兵衛は訊かず。

「何だあうぬあ、人にけんどん箱をぶつつけおいて……爰なそばかす野郎のたれ味噌野郎のだしがら野郎め、うぬ、おれが目の玉へ這入らねえか」と棒を突放して尙も意氣まき傾城等が口添へも訊れないので、とど福山も了簡しかね、舞臺の眞中に尻を捲つて胡座をかき。

「席で通つた福山の、のれんにかゝわる事だから、けんどん箱の角だつて、いはにやあな

らねえ喧嘩好き、出前も早えが氣も早え、かづきが自慢の延びねえ内水道の水で洗ひ上げた肝の太打細打の、手際をこゝで見せてやらあ」と門兵衛の手を逆に捻ぢ上げる。

とのれん口より、朝顔千平、門兵衛の着物と脇差を抱へて出て、門兵衛より事の次第を聞き、門兵衛が、

「ソレ、やつつける」と下手へ合圖をすれば若い者大ぜい三尺棒を持つて助六に打つてかゝらうとする。門兵衛と千平はこの内にのれん口に這入る。

「その棒の先がおれの身體に當つてみる、五丁町へ死人の山あきづくぞ」と言ふので若い者は「イヨウ」と尻込みをする。こゝへ又千平が出て來て、

「ヤイニ才野郎奴、三才野郎め、イヤサ四才らしい野郎だな」とせりふの切れで首を下からシヤクツて助六を見、

「およそおらが親分、門兵衛どのに、双向ふやつは覺へがねえ、夫に親分のあたまへよくもうどんをぶつかけたな」とこれより己が經歷を大仰に述べ立てる。そして助六の胸ぐらをとりにかゝるを助六は上手に投げる。

「アイタ」と叫ぶので門兵衛も出て来て千平をいたわりながら如何したと訊く、千平は眞おしみを言ふ。門兵衛は脇差の鐔を持って「重ねんの曲手まり、一體うぬあなんと云ふ、野郎だエ、イヤサ何んといふ野郎だ」と大きく云ふ。

助六は兩人を流し目で見、肩で軽く笑つて「ナ、いかさまなあ——此五丁町へ、腰をふん込む野郎めら、おらが名を聞いておけ、先づ第一おこりがおちる。まだいゝ事がある。大門をすつとくじるとき、おらが名を手のひらへ三遍かえつてなめる、一生女郎にふられるといふ事がねえ、見かけは小さな野郎だが肝が大きい、遠くは八王寺の炭焼ばいたんの齒つかけぢい、近くは山谷の古やりに、梅十郎ばいに至る迄、茶のみ咄しの喧嘩沙汰、男達の無盡の掛捨て、つひに引けをとつた事のねえ男だ、江戸柴の鉢巻に髪はなまじめ、ソレや、はけ先のえゝだからのぞいて見ろ安房上總が浮繪の様に見えるわ、相手がふれば龍に水、金龍山の客殿から、目黒不動の尊像まで御存知の大江戸、八百八町にかくれのねえ、杏葉牡丹の紋付も櫻に匂ふ仲の町、

花川戸の助六とも亦揚巻の助六ともいふ若え者、間近くよつて面像拜み」と右足をトンと踏み出すとツケを打つて門兵衛、千平はドーと尻持をツク助六は右手を開いて腰の下より「カツカ……」といひ乍ら其手を返して振り腰の下へ腕を張つて構え、左手は右の二の腕に受けて、

「奉れエ」とツケを打たせて大見得、門兵衛、千平、若い者一同「イヨウ」と氣を吞ま

れる助六は、「爰などぶ板野郎め（門兵衛に）たれ味噌野郎の（千平に）だしがら野郎奴（門兵衛に）引つ込みやあがれ」と強く言ふ。門兵衛が「ソレやつてしまへ」と通り神樂、追ひ廻しの合方になり、門兵衛、千平刀を抜き斬つてかゝるをよろしくあしらつて、二人の刀をヂツと鏢元より見改める。とど二人は折重なつて倒れるので、傾城どもは、

「助六さんの大當り、ヤンヤ〜」と賞めそやす、若い者一同去る。助六は抜き身を投捨て意休を見、
「ヤツトコ、トツチャア、ウントコネエ」と大きく極まり、

「そこな撫付どの、こんたの子分はみんなアノ通りだ、こんた了筋がなるめえ、切らつせえ、どうだな、〜」

意休が黙つてゐるので、
「なせものをいはねえ、啞か、つんぼか」と床几を意休の傍まで運び、すりよつて、
「抜きやれさ、抜きやれさ」と左足を下駄履きの儘上げて意休の脇差の柄にのせて二三度身をゆする。意休は猶無言——
「いけ張り合のねえ野郎だ、——可愛やこいつあ死んださうな、ム、いゝわ、おれが引導を渡してやらう。」

と、下駄をぬぎ、意休の頭へのせ、拍手を打つて、
「如是畜生發菩提心、頓生菩提、南無阿彌陀佛〜と拜み「ヨウ〜乞食の鬘籠様め」

意休は助六のせりふの切れて、靜かに頭の下駄をとつて、「アツ」と驚き投捨て、刀架の刀をとり、抜きかける、助六はすつと立つて「コリヤ面白くなつて來たわへ、ぬけ、ぬけぬけ〜、ぬかねえか」と大きく言つてツケを打たせ大見得をする。
意休はム、と意氣込んで三四寸ぬきかける

が、大きく氣づきそのまゝ收めて、
「ぬくまい——鶏をさくに、なんぞ牛の刀
を用ひんや、意休が相手になるやつでない」
と空うそふく。助六は立身の儘、ツカ／＼と
脇息をとつて前へおき、抜打に眞二つ。
「一寸しても此位えのものだ」と刀を鞘に收
める。と意休、

「ソレぶちのめせ」で立廻りの合方、意休、
門兵衛、千平、八重衣、浮橋、傾城、新造等
一同のれん口へ這入る。前の若い者大ぜい出
て助六に打つてかゝるを、尺八をぬきとり花
道へ追込む。

と、下手より白酒屋新兵衛實は、助六の兄
十郎祐成、極まりの扮りにて出て、若い者に
交つて花道スツポンの處まで行き舞臺に向い
て俯伏になる。

「口程にもねえやつらだなあ」と助六が肌を
入れ、尺八を腰にさし、下駄を履いて、
「ドレ、揚卷の蒲團の上で一杯やらうか」と
上手へ行きかけると新兵衛が呼かけ、呼とめ
やがて、新兵衛がしみ／＼と、
「モシそなたはなア、どう心得て居やるのぢ
や、父上の敵が討たさに、臯月下句を待つて

はないか、夫に此程より毎日此席へ入込み喧
嘩汰汰、母者人はそなたを案じ、コレ祐成、
ナゼ時致に意見をせぬ……」とこれより新兵
衛が助六にいろ／＼と意見し、とど兄弟の縁
を切るるとまで云ふので、助六もその喧嘩は親
達への孝行の爲、喧嘩を賣つて相手に刀を抜
かせ友切丸の證義をしてゐるのでございませ
と事をわけて述べるので新兵衛も今は却て自
分の意見が恥しくなり、こゝに兄弟揃つて刀
證議の爲に喧嘩を賣る事にする。助六につい
て新兵衛が喧嘩の仕掛を稽古する件があり、
助六が上手を見て、

「兄者人御覽じませ、とそういふ内、風吹鳥
が来るわ／＼」で唄入り通り神樂「へちごが
前がみ」の合方になり、上手より國侍が奴
を供に出ると、助六イキナリ侍の刀を引抜
きヂツと見て投げ出す、奴がそれを拾つて、
侍に渡し鞘に収めて構わず行きかけると、
助六上手向に兩足を踏んぱり、

「股アぐれ」とやる。國侍無言で四つん
這になつて助六の股をくゞり、行きかけると
新兵衛が同じく、
「股をくゞれ」とふるへながら云ふ。とど、

國侍は新兵衛の股もくゞり、奴も怒りなが
らくいり、向ふへ這入る。
夜櫻唄入り當り鉦の合方で通人里噺、微醉
にて出て来て、やゝ脈味なせりがある。こ
ゝで助六と新兵衛は又、通人に股をくゞらせ
る。いろ／＼通人の洒落せりがあつて、流行
唄の當込みをいつて通人は向ふへ這入る兩人
は見送つて、

「變な野郎でござりまする」といふ時、のれ
んの奥にて揚卷が、
「おあぶのうござんすわいなア」と風かほ
る、の合方になり、のれん口より湘江編笠を
冠り、後より揚卷附添ひ、出て来る、助六は
稍嫉妬の思入れにて湘江に難題を吹掛ける。
やがて母と知つて、悔り、湘江が紙衣を出し
ての意見がある。

と、のれんの奥で意休が揚卷を呼ぶので、
助六は屹となつて揚卷の襦袢の裾に躑躅むで
居ると禿をつれて意休が出る。そして揚卷を
なびかせやうとするが揚卷は訊かないので意
休は助六の事を懸ぎまに云ふ。やがて了簡し
かねた助六が裾を飛出すので揚卷が、
「コレ必ず紙衣を忘れきんすなえ」と助六を

坐らせると、意休が、
「揚卷といふ土傾城の禰へ、助六といふ溝鼠
が蹲踞んで居るといふ事は、意休が髭松明で
睨んで置いた。助六、わりや何故盗み喰ひす
る。其様な魂性で大望成就するものか、コリ
ヤ時致の腰拔め」といふので助六は向直り「ヤ
レ待て意休、某が本名を知るといひ、此時
致が何で腰拔だ」

「サ、父祐泰が無念の最後、其仇を報はん心
もなく傾城に本心亂せしうつけ者——」と持
つたる屬で助六を打つ、助六は其手を取つて
「意休わりやアあやかり者だなア、吾々兄弟
十八年附狙へど、今において敵も討たれず、
夫に引きかへ助六は、其方が爲には戀の敵、
其敵を目前に、屬の答、サア打つといふ字が
浦山しい、あやかりたい、我に教訓の屬と云
ひ、母の紙衣に手向ひならぬ此時致、打て、
たゝけ、打つて腹だに癒えるならばいくらも
打てえよ」と屹と云つてポン／＼と兩手を膝
に突いて、
「髭の意休」
と身體を反して少し首を垂れる意休はうな
づき前の香爐を取つて置据え、

「コリヤ時致、譬へて言はゞ此香爐臺、此三
足は曾我兄弟と、三人心一致して、まつ此如
く、力を合はせるものならば、祐經は愚か、
伯父伊東の敵たる、頼朝殿も討たれるぞ、其
方等が頼朝殿を恨む所存も有るなれば、年老
つたれど此意休が、力となつて、サア得させ
まいものでもな、此香爐の如く、兄弟心合體
なきば、百斤の鼎を置くと倒れず崩れず、
まつだ兄弟、離れ／＼になる時は、まづ此如
く」と太刀を抜き香爐を眞二つに切る、助六
はじつと意休の拔身を見て、

「コリヤコレ正しく」と意氣込むので、意休
は素早く刀を鞘に收める。揚卷は襦袢で助六
を圍ふ。
意休は太刀を肩一杯に上げて見得、それよ
り唄になり唄一杯に悠々と暖簾口へ入る。
揚卷は助六の身體を見て、
「助六さん、紙衣が破れたわいな」
「ナニ紙衣が破れた、オツ紙衣を破るまいと
じつと堪へて居たが、モウ堪忍がならぬわえ
と立上るを揚卷は、
「モシ短氣を出すまいぞえ」と押へる。
「コリヤ揚卷、今意休が扱いたる一腰こそ、

豫て尋ねる」
「友切丸かえ」
「コレ」と押へて兩人は四邊を見込み、助六
が何やら揚卷に耳打する。
「そんならお前は」
「今宵意休が歸りを待受け」
「早ふござんせ」
「オウ」でバタ／＼にて花道附際へ来て、
「然うだ」で、見得
あと通り神樂でツナゲ——
やがて清掻き早めの合方が幕が開く。
舞臺は總て前の通りだが、前よりグツと暗
くして、暖簾口の處に木地の大月が下りて居
る。下手の用水桶は前幕の時より、稍大椅子
の角から前へ出してある。
鷹の者の見廻りが上下から出て入れ違つて
這入ると、風音でバタ／＼になり向ふから助
六が拔身をさげて出て来て、用水桶の前あた
りで屹と見得、それより大椅子の間より内を
窺ひ、用水桶の後へかくれる。「更けて」の合
方に風音をあしらひ入口より千平先に後から
意休が出る。次に若い者一人、振袖新造三人
が随ふ意休は若い者や、新造の世辭を聞き流

して退け、舞臺は意休、千平兩人になる千平が右手に提灯を下げて、先に立ち、下手へ行きかける時、用水桶の後から助六が突然出て提灯を切落す、助六は刀を正眼に附けて意休と向ひ合ひ、ツケを大きく打たす、これをキツカケに八千代獅子の合方になる。

「汝の一顧こそ豫て尋ぬる友切丸、夫を所持せず汝こそ、本名なくてかなはぬ、姓名明して尋常に友切丸を……」と云ふを意休が、最前情を持つて教訓せし意休に刃向ふ人外め、豫て汝等兄弟をも我味方となし、頼朝を一太刀恨まんと、義經が奉納の友切丸を盗み取、本望遂げんと思ひ、疵の意休とは假の名、眞は頼朝に恨みを含む、伊賀の平内左衛門、長盛とはおれが事だ」と此の臺詞のうち悠々下駄をぬぎ、羽織をぬぎ、着物をぬぐと白の四天になる。

「千平ぬかるな」と、これにて八千代獅子竹笛入の合方に風音をあしらひ千平が助六に斬つてかゝりいろく立廻りの末、と千平は助六に斬られるあと、意休との立廻り、本極まりの殺陣があつて助六は意休を殺し、助六も手疵を負つたが首尾よく友切丸を奪ひ取り

すかしみると、揚幕のうちで「人殺しだ」と多勢の聲がする。やがて兩花道から鳶の者や塞屋の若い者等が總出て来る。助六はかくれる心算で用水桶の中へドブんと入る。

多勢が助六をなほも探しながら上手下手へ這入つたあと、助六は用水より出んとすると又も向ふて三ツ太鼓の音がして、上下で多勢の聲がする。で見つけられまいとして再び桶を冠つて沈む、やがて靜かになつて助六は用水桶より飛下りて氣を失ふ。上下から以前の多勢が棒や鳶口を持つて出て、ワイく騒ぐ時、揚巻が出て來て補襦の裾を助六の身體にかけて、大勢を押へる。

「お前方、其棒の端がちつとも身體へ障るが最後、此五丁町は暗闇ぢやぞえ」と兩手を補襦の襟へかけたまゝ極まり、

「サア是からは私が相手、此揚巻が相手ぢや」と調子を一段張つて云ふので、大勢はひるみ各捨て臺詞にて花道と、上下へバラ／＼になつて入る。

揚巻は助六をいたわりながら、

「助六さん、心が附きましたか」とこれより

友切丸が手に入つた事も助六が語るのて揚巻「此上は片時も早く退かかん」と助六が立上るのを、

「モシ、此席は八方取巻いて居る故に逃る路はないわいなア」と揚巻が涙ながらに言ふ。

「ナニ逃る路がないとな、チエー残念——」

と助六は無念のこなし、不圖後を見て、かけ放しになつて居る竹梯子に心附き、

「幸ひの此梯子、家根傳ひに」と言へば揚巻

「そんなら私は西川岸の方へ廻つて居るぞえ田圃の方へ下りて下さんせ」と言ふ。

助六は梯子に上つて、左手を後へ廻して梯子の横木へかけ、左足を曲げて横木の四ツ目右足は三ツ目へ伸ばして身體は正面を向く

「そんなら揚巻」

「助六さん」

「オー」

で兩人顔を見合せるが木の頭、助六は右の刀を返して下手へ斜に突き出し揚巻は下に片膝を立て強く引締る意であんこ帯の兩端へ兩手をかけ、西向斜になつて双方あざやかに極まる。柵に付新内の前躍き、舞臺は急に明るくなつて、三ツ太鼓入風の音にて幕が閉まる



助六・雑感

松本幸四郎

助六の上演に就ては、先年種々の事故がありましたが、それも無事な解決を見たので、今度は心持よく勤められるのを、喜んでをります。

助六の性根は大體五郎ですが、揚巻

の間夫といふので、五郎中での色つほいものと思はれます。

助六劇は古典的なものなので、現代とは離れた處もありますが、また同感出来る點もありますので、これは私自身の意を加へてゐるのではないかと見

える處もございませうが、師匠九代目團十郎が、此の助六上演の折、私は後見をして、その演ずる處を始終見てをりましたので、この型を残す上に於て自分の目の寫り頭に残つてゐるものをそのまま、自分の意を加へることなしに十分生かして御覽に入れたと思つてをります。

唯、残念なのは、水入の件で、寒中本水の中へ飛び込むことや、揚巻が金糸銀糸の縫のある目もあやな桶箱を、桶から溢れ出た水びたしの舞臺に、惜氣もなく引摺つて歩くといふやうな、江戸氣分を發揮させたことが、なかなか江戸人の喝采を博したことでありませうが、あの大桶に水を汲み入れますのに、消火線を用ひて、汲込みに三十分、排出しに三十分、前後一時間空費致しますことは、時間短縮を叫ばれてゐる今日、考へるのだと思はれますので、此度は本水を使はずに、ただ型だけを御覽に入れることになりま

した。
尙詳細に演じますと二時間の都合により、
ますので、これも時間の都合により、
あまり重きを置かぬ處は適當に省略いたしました、古典劇に對する自分の責任上、誠に濟まないやうな氣も致しま

すが、また長いのを誇りとするも如何かと思はれますので、仕打側の要求に任せました。
これ等の點、お酌み取り下さいまして、大様に御見物願へれば幸ひに存じます。

文屋は矢張、師匠九代目團十郎の工風による、志賀山風に西川の振を取入れ、それに藤間を取捨したもの、これも師匠の風を出来るだけ寫さうと努めて居ります。

文樂座の二月興行

▽七日 初日△
▽毎日三時半開幕△

前「國性爺合戰」

仙壇女道行より獅子ヶ城迄

仙壇女道行のたんシテ駒太夫、ワキ貴鳳太夫、鶴尾太夫、ツレ綾太夫、陸路太夫、播路太夫、三味線叶、歌助、友造、八助、友若、友作、猿糸、芳之助、友之助、淺造、友衛門叶太郎人、形住吉大海童子(扇太郎) 仙壇女(文作)小むつ(文之助)
權門の段||鏡太夫、三味線新左衛門人、形和藤内の母(文五郎)老一官(門造)和藤内(玉松)錦祥

中「勸進帳」

女(紋十郎)
獅子ヶ城の段切||津太夫三味線友次郎人、形吳將軍甘輝(榮三)錦祥女(紋十郎)和藤内(玉松)和藤内の母(文五郎)

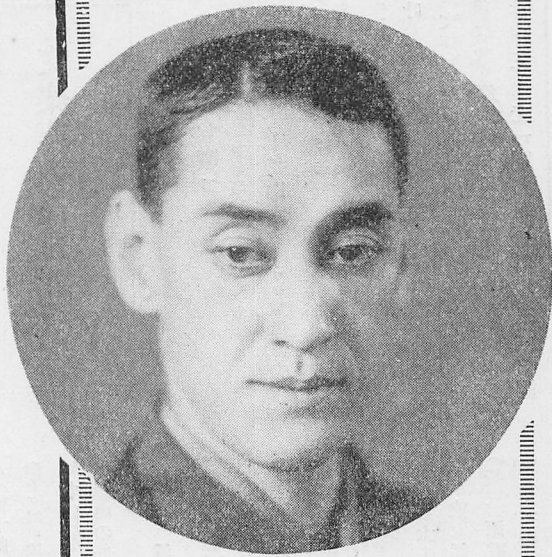
【役毎日替】武藏坊辨慶(大隅太夫)富樫左衛門(和泉太夫)源義經(相生太夫)片岡八郎(島太夫)伊勢三郎(つばめ太夫)駿河次郎(源路太夫)常陸坊(富太夫)梶下佐忠太(文太夫)辰太夫、長子太夫)番卒(駒尾太夫)隅榮太夫、津藤太夫、文字榮太夫、佐久太夫、宮太夫)三味線道八、勝市、團六、廣太郎、猿太郎、寛市、清二郎人、形武藏坊辨慶(榮三)源義經(紋十郎)常陸坊(政龜)梶下佐忠太(玉幸)伊勢三郎(紋太郎)片岡八郎(玉

市)駿河次郎(光之助)富樫左衛門(玉治郎)
次「攝州合邦辻」

合邦内の段||中(鏡太夫)三味線綱右衛門、切(古鞞太夫)三味線清六、人、形親合邦(榮三)合邦女房(玉七)玉手御前(文五郎)奴入平(門造)俊徳丸(市松)淺香姫(扇太郎)

切「檀浦兜軍記」

琴賣のたん||阿古屋(土佐太夫)重忠(大隅太夫)榛澤(越名太夫)岩永(文字太夫)三味線吉兵衛ツレ勝平、栗友平、胡弓吉左、人、形秩父庄司重忠(政龜)岩永左衛門(玉松)傾城あこや(文五郎)榛澤六郎(玉幸)水奴(文作)水奴(玉市)水奴(光之助)水奴(市松)



頃日小感

守田勘彌

展望することは比較的容易であつても
観察するとなると中々至難であります。
単に現時の劇界を展望するだけならば、
替り目毎に芝居を見物しないでも、新聞
の演藝欄か、演藝畫報を讀んでても或
點までは分りませうが、眞調に觀察する
となると、どうしても主觀的になります

から、自然個々の觀察が、必ずしも的確
であり正鵠を得てゐるとはいへない場合
が多くあります。殊に山に登つて山を見
ずの譬への如く、實際舞臺に立てゐる私
共には、傳統的に自己中心に囚はれて
て、全然白紙となつて、まづ新聞やボス
ターで狂言と俳優とを知つて、劇場の前

に立て看板を眺め、觀劇券を求めて席に
着き、幕の明くのを待つ觀客の心理状態
になることは、難しいことでもあります。

客席と舞臺との隔りはカーテン一重で
あり、そのカーテンさへあがれば、直に
觀客と俳優とがピタリと一致して、同感
共鳴するものばかりとはいきません。客
席の後の休憩室と、舞臺の裏の樂屋と、
その雰圍氣は或る時には非常に距離があ
るものであります。觀客には享樂の自由
さがありますが、俳優にも亦演技の自負
がないでもありません。そこで双方の意
氣が合致した時に喝采が起り讚美があり
ますが、それが背反した場合には默殺か
嘲笑かに終るのであります。

今カーテン一重の隔りといひましたが
もつと實質的にいひますと、觀客と俳優
とを繋ぐ重大な使命をもつものは、いふ
までもなく脚本であります。脚本のない
處に演劇はない、從つて俳優も觀客もな
いのであります。その重大價値をもつ脚
本を選択することは、興行主側にとつて

は是に緊切な第一條件であります。登場すべき俳優の演技の特色を十分に發揮させ且つ活躍させるに務め、一面には脚本の全體價值を遺憾なく表現させねばならぬ。言葉を換へていひますと一個の戯曲の最善最上の機會を作るといふことでもあります。ですから興行主が脚本を選擇するには並々ならぬ苦心が存するのであります。

そこで近時の劇壇を概観しますと、先づ一番目に時代物——重に院本物を据え二番目に世話物——默阿彌物其他、中幕か大切に舞踊物所作事をつけるといつたやうな、寧ろ古い式の並べ方が多いやうに思へます。尤も時間の制限で幕數場面の縮小は已むを得ませんが、多くは三本立か四本立であります。之は登場俳優の多いといふ理由もあり、また多種の観客の好尚を迎へるといふ理由もありませうが、何んだか鳥渡昔に還つたやうな氣もするのであります。けれども亦仔細に觀察しますと、手近な例でいひますと、同

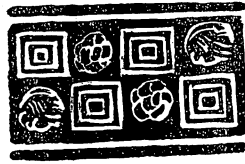
じ先代萩や千本櫻でも、または默阿彌の諸作でも、先輩諸優の演出と、比較的若手の後輩の演出とは、同一型をたどつていつても、どうしても幾分の差違は免れません。前者には古典の格式を守る演出があり、後者には合理化的といつた演出がチラツクのであります。これは何も不思議なことでもなく、今は昔の古名優との演出を比較してみれば、矢張同じ途をたどつて來たのであります。其處に明治劇壇が演劇史上、永遠に存在價值を主張し認識される譯であります。ですから院本物や默阿彌物が流行しましたも、決して悲觀すべきではないと思つて居ります。かの不識庵が得意の陣法、車懸の備とでもいひませうか、退くと見せて進む、歴史は時に繰返すと見せても、仔細に捻索すれば決して無意味に繰返してゐるのではない、矢張進みつゝあるのである。

現時の劇界必ずしも悲觀を要しない、

否更に進んで大に希望の曙光を認められるのであります。最近演劇關係の雜誌界の傾向が、漸く「劇と評論」の時代でなくなり、「舞臺戯曲」の時代となるやうであります。以前に廢刊しました「演劇新潮」の如きは實に惜しいものでありましたが、併し昨年から發刊されました「舞臺戯曲」は、主として上演可能を目標とした新作脚本のみを掲載するといふので、之は私共には大に意を強くするに足るものがあります。

また新年號から「舞臺」が綺堂先生門下の方々によつて發行され大阪では「新興演劇」が新進作家聯盟とでもいふべき諸氏の手で創刊される如き更に更に人意を強ふするものがあります。

かくして劇界に昭和維新の來ると同時に新興演劇の機會を迎へるの近きを、觀客諸氏と共に衷心から期待してゐるのであります。意餘つて言葉足らず、甚だ要領を得ないことを申述べたことをお詫びいたします。



「助六」の演出に就て

濱村 米藏

意にしてゐるさうだから、二月の霜枯れに「助六」を上演して、陽春四月の氣分に浸るなどは随分進歩的だと云ふことになる。

で、結局「春」の氣分を充分出せばいい譯である。私は曾て「助六」の劇場美術といふものを書いたことがある。「助六」が上演される時には、劇場の表飾に櫻の花壇が出来て、芝居茶屋がそのまゝ、仲之町の引手茶屋に見立てられる。つまり「助六」の舞臺裝置が劇場の外にまで延長されるのである。さうしていざ「助六」の幕が明くといふ時には、見物席の棧敷に茶屋の暖簾と青簾とがさがる。そこで完全に「助六」の舞臺裝置が劇場の内外を包むことになるのである。私はその文章の中で「現代の小劇場が主張する演物の信仰箇條である印象の完成は、尤も理想的な内容を以て我等の祖先が持つてゐる。」と書いてゐる。

私は今でもその通りに思つてゐる。

こんな前置をくどくど云つてゐると、中座の常連諸君なんか、こつちだつて暖房裝置があると怒鳴られるかも知れない。一體人間の文化といふものは、總て自然に打勝つことにあるので、アメリカあたりでは冬の最中に、家の中は夏の初めごろの暖かさにして、アイスクリームなどを喰べるのを得

モスクワの美術座のスタニスラウスキはチエエホフの「櫻の園」を演出して次の如くに述べ立てる。「この戯曲は如何にもデリケートで、一つの花が持つあらゆる繊弱さを持つてゐる。葦が折られて、露が花を離れると、匂が直ぐ消えてしまふのである。この戯曲とこの劇中の人物とは、演出者と俳

優とが、この戯曲の中心神経が隠されてゐる人間の魂の秘密な寶庫に掘り當てるまで深く沈潜した時、はじめて生きて來るのである。」

「櫻の園」と「助六」とは餘りに對照が突飛である。その上右のタニスラウスキーの言葉をも、そのまゝ「助六」の演出の場合に當てはめるとしたら、滑稽とも何とも吹き出す人があるだらう。併し私は眞面目に考へるのである。無論臺本「助六」が如何にもデリケートで、一つの花が持つあらゆる纖弱さを持つてゐるとは思はない。或はその反對のものでさへあると云つていゝが、舞臺の「助六」は一つの花が持つあらゆる纖弱さを持つてゐるはしまいか、舞臺の「助六」は、演出者と俳優とが、その表現の中心神経が隠されてゐる人間の魂の秘密な寶庫に掘り當てるまで深く沈潜した時、はじめて生きて來るのではあるまいか。

チエホフの「櫻の園」も偉大であらうが、徳川時代の民衆が創作した「助六」も偉大である。「櫻の園」のいゝ所が本當に分る人なら「助六」のいゝところも本當に分る筈である。唯そのふさがその人の進歩に、どの程度に貢献するかは今日のやうな時勢では、立場次第でいろいろになるだらう。今日の「助六」の臺本を主として書き上げたこと云はれる初代の櫻田治助は、毎晩のやうに吉原を一遍宛廻つて來ないと寢られない男だつたさうである。さういふ人間が集つて造りあげた

ものが「助六」である。だからどうせ愚劣なものだらうと思ふ者は論外として、さういふ道樂物の遺産にも、人間の魂の秘密な寶を見出す者だつて、昔の道樂者が味はつたと同じやうには味はへもしないし、そんなことをしようたつて無駄だが、同時に「助六」を永久的な青春のヤンチャな詩として見る時に、お互に治助の生れながらの道樂者の神経がないだけに、一層一つの花の持つあらゆる纖弱さを味し得るやうな傑れた演出者の神経が今日の「助六」上演に必要となつて來るのである。それを私はいたく感ずるのである。

磨齒煉固「スブギ」



本品を使用すれば幼時より老年に至るまで歯牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉歯固は刷毛がとどかぬ微細な隙間に侵入して常に歯を保つ事は取

大形 壹個 金七十拾錢
大形中味 壹個 金六十拾錢
小形 壹個 金四十拾錢
百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

日本代理店

株式会社
ギブス
株式会社
山商會社
東區豊後町三番地

りも直さず身體の健康を計るの取戻さずから毎日同必すギブス煉歯固を御用ひ遊ばせすれば氣分は爽快になれます。本品は美しい入り桃色の固煉製であります。有名な

「助六」註文帳

◇倉田啓明◇

「ぬれて来た曉傘を花川戸」

おなじ歌舞伎は十八番の内でも「助六」は「勸進帳」のやうな能樂から移植したものでなく、純粹の創作としての江戸狂言である。殊にそれが殆ど完璧に近いまでに大成された天明度においては、その時代の色彩なり趣味なりが如實に描破されてゐて一種の風俗史料、世相史料としても、立派に文化史的價値を有する狂言である。年代記的に言へば人も知るとほりこの狂言は二代目團十郎によつて、正徳三年四月山村座で「花館愛護櫻」といふ大名題で上演されたのが最初であるが、爾來二代目團十郎は、享保元年と寛延二年にもつとめてゐて、その都度大名題を異にし主人公の名が變つてゐて、内容も今日のとは非常な相違があるにしても、現今の「助六」に至るまでの根元をなすものとして忘れてはならない。元來二代目團十郎は初代以來の「荒事」を得意としたのみならず、所謂「和事」にも秀でゝゐたために、この狂言に大當りをとつたのである。即ち「助六」には「荒事」と「和事」「時代」と「世話」とを兼備してゐるので、

詳しくいへば意休を對手に腕立をするところは「荒事」で揚卷との情痴は「和事」である。又會我五郎といふ所は「時代」であつて、花川戸の遊俠といふところは「世話」である。

然し「助六」が爾後修正に修正を加へられて、今日羽左衛門や幸四郎——否むしろ九代目團洲が屢々上演した時の臺帳即ち「助六由縁の江戸櫻」の根底を基きあけるに至つたのは、天明度の五代目團十郎であらねばならぬ。即ちそこには天明時代の江戸ツ子生活が極めて寫實的に描出されてゐる。洒落本や狂歌全盛期の天明振の面影が髣髴としてあらはれてゐる。こゝにおいて以前は元祿江戸歌舞伎の眞骨頭を傳へた荒事風の助六が、漸次に削減されて、和事味の勝つた助六として登場するに至つた。その例は鉢巻の色の變遷をたづねても知れるわけである。

だが、かうした考證研究をしてゐると、尨然たる大冊子が出るほどの材料があつて、到底この小篇ではその一斑も示すことができないから差控える。その代り如月の中座で幸四郎が助六を演ずるに際して、いさゝか註文めいたことを列擧してみよう。先般彼が南座で出した時には例の外郎賣が市川宗家との間に紛擾を來したので、今回は外郎賣なしにやるかの巷説がある。外郎賣は成程この狂言では大切な役になつてゐるが、然しあの輕妙な輕口がこの役唯一の興味で、栢庭團十郎の得意の藝であつたのだから、「摘み蓼、つみ豆、つみ椒、書寫山の社僧正、こゝめのなま嶺く、こんな小米の小生がみ……」といふやうな輕口の文句を言はないものなら、むしろ出さない方が氣が利い

てゐる。先年市村座では三津五郎はたゞ外郎賣の廣告のみをやり、歌舞伎座では兒太郎——今の福助は振だけで無言劇にしてしまつた。これは甚だ以てよろしくない。

次は白酒賣が幕あきに出て言ひ立てをするところが往々にして省略される。これも今度の勘彌は是非やつて欲しい。

又、股ぐりに通人、田舎侍、若衆と三人出るのが本筋であるのに、二人位で御免を蒙るのを往々にして見受けるが、これも是非三人出すべきである。

それから滿紅が助六に紙衣をあたへる件を省いたり、面白い警句や洒落を言はなかつたりするのはよくない。今度はどんなに省略されて上演するかわからないが、何しろ原作のまゝでは餘りに時間を要するので幾分の省略は是非もない次第だが、適當にカットをして原作の興味を殺ぐやうなことはしたくないものである。

小生は定評ある羽左衛門の助六を三度も見てゐるが、幸四郎のはまだ見てゐない。羽左のは音調とその活殺が優れてゐるが動作にふくらみが不足してゐる。この點幸四郎の方に或は團扇をあけていゝかも知れない。勘彌の白酒賣は先年市村座で立派に成功してゐるから、今度もさぞよからう。江戸の和事師としては當代第一人者である。

とにかく「助六」といふ香氣な芝居は見えていつも溜飲が下がる。これは助六の啖阿ばかりか、登場人物ことごとくが洒落や警句をはくのだから全く以ておつこたへられねえ。それに

つけても死んだ翫助のくわんべら門兵衛や翫太郎の通人が今でも眼底に残つて忘れられない。翫助と言ひ翫太郎と言ひ又は仲藏といひ、あんな國寶的老優は今一人もゐない。

(第十三頁より)

それにおかるの文のかの字盡しや、後の癩のくだりいろいろ技巧を技巧と小細工に走ると、田舎芝居になる本文通りで充分芝居のできるやうになつてゐる。

おかるに因果を含めると「ヤレ待てしばし早まるな」と由良之助が出て、獅子身中の虫と九太夫を罵つて加茂川に水糞炊といふことになる。人形だと、平右衛門が軽々と九太夫をさしあける。橋頭で踊り地をだん／＼早めて幕になる。

ざつと右に述べたやうに、舞臺の上色彩も豊かであり、下座の妙味にも富んでゐる上に、義太夫には、おかるのさわりをはじめ面白い語り所もある。七段目は演技に伴奏に昔からの演出者の苦心が積り積つて充分芝居のできるやうになつてゐる。

忠臣藏の作者が判官勘平本藏と三人三様の切腹を書きかけた筆意は今さら事新らしくいふまでもないが、その間に介在する茶屋場の華やかなうちに、一脈たゞよふおかるを取り巻く哀愁や、底に力の籠る由良之助の苦衷が、大きな變化を加へ、それだけ全篇の興趣を増してゐることも亦忘れることはできない。

(をほり)

「助六」に就て

◇楠田敏郎◇

私は「助六」のやうな芝居が、大衆にとつてすこしも難解なものではなく、相變らず興味を持ちつゞけられて居るのを、たいしたものだと考へてゐる。

では、あの通りの、見る目だけ派手な舞臺面に、大衆だけが眩惑されて居るのかと云へば、さうでも無い。私共も、相當感服して見惚れる見物の一人である。

澤田正二郎君も「助六」をやつた。あの顔で、紫の鉢巻をして、踊りの素養のない身體で「煙管の雨が降るわ、降るわ」とやつたものだ。これは、まさに珍劇であつたが、澤田君でもやりたがつたと云ふ事に、大衆の興味問題が絡まるのである。

我々の知つてゐる範圍に於て、大衆は實にせつちちになつてゐる。そしてまたかなり演劇に對して無教養であり、無理解である、その證據にレビウー式の芝居が歌舞劇國をさへ風靡ふうびしや

うとしてゐる傾向である。

その大衆が、何が故に、ろくに筋もない「助六」を愛好し、二時間にあまる時間を、茹つた様子もなくおとなしく見物してゐるか。

「助六」の舞臺には、綜合された大きな美がある。大きさと云ふ點で、馬鹿けたほど大きく、美と云ふ點で、また極めて大きく美しい。そこに展開される物語は、ストーリーから超越してゐる。しかも、音楽、舞踊の混成美が、時代を忘れさせて日本演劇の本質に觸れさせる。それも、理論なしに、解釋を強ひずにである。

美にうたれて、見惚れるにしても、二時間あまりを、じつと我慢するのだから驚く、この點、作者に、どんなに敬意を表してもよい。

作者が見物に、すこしも解釋すべきものを提出して居ないし作の中へ理論を入れてゐない。また、小つほけな善惡を含ませず、涙を強ひやうとしてゐない。それも宜敷いのだと考へる。となると、俳優が、實に骨が折れて来る。と云ふよりも、俳優の個人を問題とせず、綜合的な舞臺面を持つために、皆がしつかりと一つにならなければ効果を上げない。とおもふのである。

羽左衛門の「助六」は、その點で甚だよい。美しくして、華車で、またすこしも近代的な相貌がなくて――。

助六の顔に、神経質な目が光つてゐたり、聲音に近代人らしい強さがあつたり、その姿態に、新感覺派的な韻律があつたりしては事がこわれる。どこまでもどこかに、花道から出て來て「この鉢巻の御不審か」と振事になつてくれなくてはいけない。

×

この芝居の持つ魅力は、總てが、事實とかけはなれて、大きく、ありつたけの誇張をもつて描かれてゐることである。あまりに分別臭い芝居の中に、せめて「助六」のあることを私共がよろこびとするのも、この點に關るものだ。

だから、舞臺全體の人が、めい／＼の持役を、すばぬけて大きく描くところに興味がある。一人でも、寫實で行つたりしてはいけないのである。

×

私の狭い知識では、前にも書いた羽左衛門が、當代唯一の「助六」だと考へてゐる。羽左衛門が「助六」役者でなくなつたとき、この不思議な存在である「助六」が、おそらく滅びるか忘られるかするであらうと思つてゐた。我々の世界では、芝居は俳優の柄で決定されるものではないが、歌舞伎の世界には、第一に柄、第二に柄、第三に柄である。

大阪では誰が助六になるか。勿論、東京役者でやらねばならぬが、飛んだ理屈っぽい助六が出來はしまいかと心配してゐる

ところだ。これは幸ひにして私の淺學を嘲はれる結果になると好いと思ふ。

×

東京でも近頃はかなり無茶になつて、春の芝居をま夏に出したり、盆興行のものが正月に出たりする。その點で、「助六」は四月のもの、やうに思ふ。然し、大正十四年の時も、昭和四年の時も、四月ではなくて、二月と三月にやられた。今度も中座で二月の出しものとされてゐる。かう云ふ事は、追々、香氣に扱はれて、問題でならなくなるのもあらうし、助六役者、揚卷役者の都合で、その顔の揃つたときに出されるのでも有らうと思ふ。が、變に思ふ人は、變に思ふで有らう。

×

東京で演る時も、水入りを省いた。鷹治郎が盛綱で注進受けを省く如く、これは、最も主要なる部分を省略するのだから、大きく云へば演劇を殺すの罪を犯すことになると思ふ。

私共が「助六」を見るのは、古典へのあこがれで見るとだから、それらは、完成したものが見せて貰ひたい。生命のぬけがらになつた「型」だけでは満足出來ない。

どちらにしても「助六」のやうな芝居は、早晚、誰も手をつけなくなり、大衆も、やがて魅力を持たなくなるであらうと思ふ。この際、看客諸君は、とつくりと見て、充分記憶して置くべきであらう。

(一月廿日夜病床にて)

古劇禮讚

渡邊虹衣

二月の道頓堀は東京から幸四郎、勘彌、三升、彦三郎、源之助氏等が乗込み、鴈治郎一座と合同中座に於て「假名手本忠臣藏」や「助六」等を出す、一方お隣りの浪花座に於ては「國性爺」「矢の根」「時雨のこたつ」などを上演される事となつた。

この狂言の選み方に就ては面白、いといふ者もあれば又面白くないといふものもある、面白、いといふ者も、面白くないといふものも、夫れは皆その人々の見方、考へ方の奈何にある事だから一概に其可否を斷ずる事は能きないが、兎に角私としては其可否を論ずる爲めに、茲にその理窟地獄を現出する事は避けたいと思ふ、夫れは可といふにも理由があり、否といふにも亦理由のある事で、丁度それは自己の趣味や性格を基として和食と洋食との可否を論じ合ふやうなものであるからである。

又或る通者といふ人々の間には、鴈治郎の由良之助はどうで

あるとか、幸四郎の助六は斯うであるとかいふ風に其舞臺上の演技や効果に就て既往の演技その他を標準にして云爲される方もあるが、私としては斯ういふことも差控へたい、何となれば此種の藝術は例えその臺本が一定のものであり、又その舞臺装置や着附等が一定不變のものであつたとしても、肝腎これが演技に當る人々の氣持ちが、日を重ね年を重ねるに従つて多少の變化を來たすものであるから、昨日面白く行かなかつたものも今日は思ひの外に其役々の氣持ちや感じを十二分に表現し得る場合も少なくないからである、況んや今回の俳優諸君は、皆一本立ちの名俳優としてそれ／＼の特技を有ち、不斷の研究を怠らぬ人々であるから私としては、其演技を實見するまでは一層斯うした點を斟酌する事は、その人々の藝術を尊重する意味に於て寧ろ當然すぎる事だと考へて居るからである。……など、自から避けた理窟地獄を現出しやうとして來たのは我れながらおろかしき話だ。

兎に角私は歌舞伎劇として斯く歌舞伎味の濃厚なものをより多く選まれた事をうれしく思つて居る一人である。

而してその味の江戸情趣に富んだものである。點に一層の喜悅を感じて居るのである。古い川柳點にも

助六は江戸一番の頭痛持ち

など、うたはれて居るが、アノ江戸紫のはちまきは、丁度彼の歌川國貞が田舎源氏の光氏の圖を描くに當り、苦心慘愴の結果

江戸紫の細い組み紐を以つて鬚の大部分を極めて派手に巻きつけた如く此俠骨稜々たる江戸一番の男になつかしくも亦捨て難い情趣を豊かに添へたもので香葉牡丹の紋服に細蛇の目傘と俱に此人物を彩る唯一のものである。斯うした美的方面を別として意休對助六の間に流れて居るその思想を看ても亦甚だ面白い點があり、夫れが決して今日の思想界と没交渉だとは云ひ得ない點があるのも、誰やらの説の如く古い歌舞伎劇などはと一口に片付け得られない處で、ソコに此劇の生命があり、尙久しく脈うつものである事は、こゝにいふまでもなからうと思ふ。

かる石も一つ混つて義を立てる

一字づつ化けて屋敷の様子を見

古い川柳點には忠臣藏に取材した句が頗る多い、劇としては大石内藏之助良雄で演る新劇も可いが、又大星由良之助の假名手本忠臣藏も佳い、夫れは丁度大橋翠石の虎の繪と圓山應舉の虎の繪とのいづれにも美的價値を認め得られるのと同である、併し藝術上の味ひとしては寫實に過ぎた翠石の虎よりも、張子の虎の如き應舉の夫れにより多くのうま味を感じるのと同様、由良之助の方に劇藝術としての覆ひ切れぬ光輝を認める、それは此劇を構成して居る分子に尊い遊戯的分子が多分に含まれて居るからであると私は思ふ。

古渡りの親父を持つた和藤内

和藤内どつちつかずの供をつれ

和藤内毛生へ薬をあごへぬり

和藤内親には二貫生れまし

など國姓爺の和藤内をよんだ古川柳點も柳多留の内に收められて居るが、これなども歌舞伎劇としては面白いものと云へる。

我が九州の平戸の士田川氏の女を母とし支那明末の臣鄭芝龍を父として生れた鄭福松が、父を追ふて明國に赴き、明の隆武帝に仕へ、その偉才を愛せられ「朕に汝に配する女なきを遺憾とするも永く仕へて我爲めに盡せ」と朱姓を賜ひ名を成功と改め若くして御營中軍都督に任じ更に忠孝伯に封ぜられ、國人から國姓爺と仰がれた一代の風雲兒鄭成功を題材とした、ソコにも多分の遊戯的分子が採り入れられて此劇を構成して居る。

此外「矢の根」といひ「文屋」といひ歌舞伎劇禮讓家には看過すべからざる好劇が斯くズラリと並べられたといふ事は慥に特記すべき事であり、又これが見物に就いては彼の古川柳點にある。

三芝居見たで取り巻く長局

の如く、一般好劇家の間に評判の種を蒔く事であらうと思ふ。

助六禮讚

邦枝 完 二

○ ジャズの世の中であらうが、テムボの世の中であらうが、それはそれ、これはこれとして、米の飯を食べて育つた日本人である以上、歌舞伎劇の持つ、あの大まかな味を忘れることは出来まい。しかも「助六」と云へば絢爛たる徳川の爛熟期に成長した、嘘も隠しもない、日本一の大歌舞伎だ。私は如何なる場合でも「助六」と「勸進帳」の前には、頭がさがる。そんじよそこらの、一夜漬のお芝居とは、第一磨きの掛りやうが違ふからだ。——大道演説を、そのまゝ、舞臺に移したやうな、お粗末極まる演劇の流行する今の時代は、すべてが寫實でなければ納まらないのかも知れない。赤い理窟の一つも云はなければ、所謂文化的大向の歓迎は受けられないかも知れないが、生のまゝからは、何としても良き藝術は生れないにきまつてゐる。

○ 江戸時代から、歌舞伎劇は、決して貴族の専有ではなかつた

否、寧ろ大衆の上に立脚して、始めて榮えた藝術であつたのだ。が、當時の民衆は（といふよりも、明治末期までの民衆は）民衆それ自身に、現在よりも、もつと詩があつた。渺なくとも、詩を味はふとする努力があつた。乾いた物を乾いたまゝの、埃まみれにはしては置かない心掛けがあつた。彼等はそれを取上げて如何にしたらば、うるほひのある物に仕上げられるかと、心を碎いて考慮した。——例へばこゝに「助六」の狂言が生れたとすると、民衆の全部は、ひとかどの鑑賞家として、これに接し得るだけの修養を、十分に練り、磨くことに吝ではなかつた。見る眼を養ひ、聴く耳を貯へるに切々たるものがあつた。詰り辱を知つてゐたからに外ならない。（現代の民衆の如く、浅い物にのみ耳を傾けるやうな、卑怯な真似はしなかつたのだ。）——その、力ある民衆に依つて、保護され洗練されて來た藝術の一つとして歌舞伎劇が美しく、華やかに残されたことは、當然過ぎるくらゐ、當然だと云はなければならぬ。

○ 輕薄な論者は、一概に歌舞伎劇を指して「古いからいけない」といふ。勿論中には、正に「古いからいけない」物も少なくはない。が、嘗に古きが故に價値なしとするならば法隆寺の建物はどうであらう。歌麿の美人畫はどうであらう。奇を衒ふ物のみが新らしく、價値ありと思ふならば、私はその淺見を嗤はずにはゐられないのだ。——苟しくも藝術を味はうとする者ならば、單なる新舊などは、問題ではない筈ではないか。幾十人も

の名匠が、心魂を打込んで煉え上げた、大歌舞伎の底を流れる一脈の流れにこそ、藝術の尊さは潜んでるよう。あからさまに云へば、「藝術」と名付くべきものは、決して一朝一夕の修行や習練で、鑑賞し得るものではないのだ。百里の遠きに旅する者は、百里の道を歩いて後、初めて百里先の風光に接することが出来るのだ。

私は「助六」の題に接する毎に、先づ想ひ起すのは故松助翁が生前語つた次の言葉だ。

「九代目團十郎さんが、まだ權十郎時分でした。初めて助六を勤めることになつたまではようござんしたが、相手の意休に廻つたのが、當時飛ぶ鳥も落とすと云はれて、人氣のあつた先代の芝翫さんでした。このお人は、千人の女が千人惚れたといふくらゐな好男子で、あたくしなどもよく見ましたがまつたく、水の垂れるやうな男振りでした。この芝翫さんのお袋さんといふお人が、また芝居切つての利権者でしたから、九代目さんが助六を演るといふことがきまると、どうしても納まりません。權十郎などに、家の俵の頭へ下駄を載せられちやア、あたしが付いてゐる甲斐がないとかういふんです。何しろ番附がきまつたあとですからその騒ぎと云つたらねえんで。……で、色々中へ人が這入つたり、太夫元がなだめに行つたりした擧句、新七さんが助六のセリフを書き直して演るといふことで、芝翫さんの

お袋さんも、漸く首を縦に振ることになりました。そのセリフは、お定りの、助六が意休の頭へ下駄を載せやうとするところで、揚巻が、助六さんその下駄は、といふのをきツかけに、云はずと知れた、意休の頭へ載せるのよ。だがこれをおれが載せたなら御最負多い成駒屋、ふだん兄貴と立てる仲……

と云つたやうなセリフがあつて、とうとう九代目さんは、芝翫さんの頭へ下駄を載せずにしまひました。ところがおかしなもので、これが滅法評判になつて、その後、九代目さんの人氣は、めき／＼上つたぢやありませんか。——その時にあたしは、助六の子分になつて出ましたが、草履下駄といふ履物で、トンボを返るのが六ヶしくて、毎日大汗を流しましたよ。……」

私は今度の中座で、親しき友の守田勲彌が、何の役を演ずるのか、少しも知らない。が、久し振りの大阪出演に、上々吉の成功を祈ると共に、關西愛劇家諸氏に、同丈御愛顧の程を切に御願する次第である。

訂 正

本誌一月號に掲載せし竹本土佐太夫氏の記事中誤植發見致し右の通り訂正致します。

四五頁下段二行目「大席語り」は「大序語り」四六頁下段一〇行目「藝人一徒」は「一統」四八頁下段六行目「天下泰平」は「天平承平」の誤植



國性爺合戦

樂文の月二

竹本津太夫
(本院)
友次郎
(三味線)

夢も通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の縁恩愛の綱結び合ひ、結ぶ餘りの縛繩かゝる例は異國にも、まれに咲き出す雪の梅、色音は同じ鶯の、聲にぞ通事入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の梅三重の蒲團、山海の珍菓名酒を以て、重んじてなす有様は、天上の樂花とも、又高小手の縛は十悪五逆の科人とも、見る目いぶせく痛はしく、様々に宮仕へ、眞の母といはれりし、心の内こそ殊勝なれ腰元の侍女ども奇集まり、甲なんと日本の女子見てか目も鼻も變らぬが、可笑しい髪のかみ、變つた衣裳の縫ひ様、若い女子もあれであらう裙も襪もほら／＼と、ばつと風が吹いたら、太股まで見えさうな。ア、恥しい事ぢやあるまいか。乙「いや」とても女子に生れるなら、

國性爺合戦

甘輝館の場(正本)

二月の浪花座

- | | |
|----------|-----|
| 和藤内 | 我童 |
| 後ニ延平王國性爺 | 延若 |
| 伍常軍甘輝 | 魁車 |
| 甘輝妻錦祥女 | 長太夫 |
| 和藤内の母渚 | |
- 【舞臺】

本舞臺一面上下通しの高二重の家體、上手九尺程折廻しの障子取込み誂らへ金地へ唐花を飾きし通しの大欄間、石疊の蹴込み誂への三段をすへ、向ふ一面唐畫極彩色の金襖、都て伍將軍甘輝館城大廣間の模様此の道具いろ／＼誂へあり、揚幕に唐門拵へあり、ちやるめら入り唐樂賑やかなる。鳴物にて幕明く。

ト、直ぐに床の淨瑠璃になり。
ト、遙かなる、夢の通はぬ唐土に、通へば通ふ親子の縁、恩愛の綱結び合ひ結ぶあまりの縛り繩、かゝる例は異國にも、まれに咲き出す雪の梅、色香は同じ鶯の聲にぞ通事いらざりし、

本調子の合方になり、家より侍る女○、唐裝束、唐子かつら、緋の袴、好みの拵らへにて、結構なる掛盤、膳を携さへ出る、跡より○同じく二の膳を持ち、唐草の臺重を三寶に載せ持ち、○何れも好みの拵らへ、大島臺、異形の長柄の銚子○、同じく唐女の形り、三寶に内ぐもりのかわらけ、硯蓋様の肴を乗せしをさ／＼げ持つて、○同じく唐官の形、ふきの臺御誂への銚子を持ち出る。

此跡より○、同じく唐侍女？かつら、誂らへ胸かけのかよりし唐裝束、緋の袴の拵らへ、かけばんへ色どりの大鉢をのせ、此の中に異形の肴を入れ、持ち出て皆々花道に並よく並び。

侍女○ なア皆さん、きのふよりして日本から御臺様の母御前のお入りに付き、鹿略なきやうもてなせとの仰せつけ、それ故今日の御聖膳。
侍女○ お口に合ふやら達はぬやら、國を隔つる唐大和。
侍女○ さればいなア、どうぞお心に叶ふ

此方や日本の女子になりたい。何故といや、日本は大きに和の大和の國といふげな。なんと女子の爲には、大きに和かな、好もしい國ぢやないかの。ホウ有難い國ぢやの。」と、眼を細めてぞ領きける。錦祥女立出て「これこれ面白さうに何いふぞ。彼方は自らとは産さぬ中の母なれば、孝行といひ義理といひ、眞の母より重けれども、國の掟せん方なく、縛り廻めるおいとしき韃靼王へ漏れ聞え、良人に咎めあらうかと、宥免もなりがたく、難義といふは我身一つ。孰も頼む。食物も違ふとやお口に合ふ物何うて進せてくれよ。」と宣へば侍「イヤもうし如才もなうお料理も念入れ龍眼肉のお食、お汁は家鴨の油揚、豚のこくせう、羊の漬焼き、牛の蒲鉾、饅々にして上げてても、なう忌々しい、そんな物嫌々縛られて手も叶はぬ。ついむすびをしてくれと御意なさる。其むすびといふ食物は、何の事や、どうも合點參らず。皆打寄つて詮議致せば、日本では相撲取をむすびと申すげな。それゆゑ方々尋ねても、折も悪うお齒に合ひそな相撲取がきれ物なり。」とぞ申しける。表に轟く馬車 兵御歸館。」と呼ばはつて、唐櫃先に穿ぎ入れさせ、優々たる絹笠も、さすが伍常軍甘輝と名に負ふ其物體。錦祥女出迎ひ 錦「何

やうと、思つて見ても一ツ向に埒あかず侍女 とも日本のお方の上り物は我々には知れぬわいなア。
ト、本舞臺に入り、二重に住ひ。
侍女 時に皆さん、あの日本の女子の風俗見てもかきな、顔の樣目も異も變らねどをかしい髪結びやう……
侍女 ④ そして變つた衣裳の纏ひやう、裾も襷もほらくと、
侍女 ⑤ ばつと風でも吹いたなら、
侍女 ⑥ 笑止なことてムンせう、
皆々 ホ……、ハハ……
玉ひ。
ト、此時奥より錦祥女、唐裝束、好みの拵らへにて出て來り、好き所に住ひ。
錦祥女 ヲ、皆のもの、おもてなしの配膳九獻、大儀く、まだ委しうは云はなんだが、あなたは自らとはなさぬ仲の母上なれば、孝行と云ひ義理と云ひ、誠の母より重けれども國の掟方なく、縛り廻めるおいとしき、韃靼王へ洩れ聞え、難義に咎めあらうかと宥免も成り難く、難儀といふは我身一ツ、随分心をつけお口

あふもの何ふて進せてたも。
侍女 ① それに如才は入りませぬ、御料理に念を入れ、龍眼肉のおめしに、お汁は鰻の油揚。
侍女 ② 豚のこくしやう、ひつじの漬焼。
侍女 ③ 牛の蒲鉾さまくにして上げましても。
侍女 ④ 喃いまくしいそんなものいやいや、縛られて手も叶はぬ、ツイ結びをしてくれと御意遊はず、その結びといふものは何のことやら。
侍女 ⑤ どうも合點が。
皆々 參りませぬ。
ト、顔を見合すばかりなり、折から轟く馬車、門外より聲高く。
ト、向ふにて、
呼び 御歸館。
錦祥女 ナニ、我が夫マの御歸館とや。自らが密かに申す事あれば、皆の者は間を隔て、控へておや。
皆々 思まりました。
ト、侍女皆々、膳を持ち奥へ遣入る。又向ふにて、
呼び 御歸館。
トと呼ばはつて、唐櫃先きにかき入れさ

とて早き御退出。御前は何と候ぞや。」甘きれば。韃靼大王、感深く過分の御加増、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任せられ、諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰付けらるる。家の面目これに過ぎず。」とありければ、錦「それは手柄、目出たい。なう家の吉事はかさなるもの、日頃戀しいゆかしいと、申し暮しせ父上、日本にて設け給ひし母兄弟、頼みなき事有りて、門外まで來り給へども、お留守といひ、殿しき國の控を憚り、男子は皆歸し、母上ばかりを留め置きしが、猶も上の聞えを恐れ、繩かけてあれ、あの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上繩かけし御心底、悲しきよ。」とぞ語りける。甘「ムウ繩かけしとはよい料簡、上へ聞えて言分あり。随分もてなせ。いざまづ我も對面せん。案内申せ。」といふ聲の、漏れ聞こえてや妻戸の内母「なう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高上り、妾それへ」と立出づる、形はいとど老木の松のしめからまれし藤かづら、起ち居苦しき其風情、甘輝見る目も悴はしく、甘「まこと世の子といふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ、其甲斐もなき縛めは、時代の掟是非もなし、それ女房、お手が痛むか氣を付けよ。優曇華の客人いさか疎略を存

せ、ゆうくたる絹笠も、さすが五常軍甘輝と、名におふその勿體錦祥女出迎へ。ト、此内誂らへの鳴物になり、向ふより下官唐人二人にて唐櫃を荷ひ、早足に舞臺へ來り、下に控へると、跡より甘輝誂らへの絹張りの鳥毛の付いたる黒塗金地の模様の付きし笠を冠り、誂らへのかつら結構なる唐裝束、帶劔にて異形なる香をはき、ゆうくと出て、直ぐに舞臺へ來り、錦祥女よろしく出迎へ、下官は唐櫃を能き所へ直し入る。

錦祥女 けふはいつになふ、お早き御退出
御前の御首尾は、
甘輝 されば、韃靼大王、感深く過分の御加増、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任せられ、諸侯王の冠裝束賜はり、大役仰せ付けらるる家の面目これに過ぎず。
錦祥女 それは御手柄お目出たう存じまする、それにつけても家の吉事は重なるもの、日頃戀しい床しいと申し暮せし父上、日本にて儲け給ひし母兄弟頼み度事ありとて門外まで來り玉へども、お留守とい

ひ殿しき國の掟を憚り、男子は皆歸し、母上ばかりを留め置きしが、猶も上みの聞えを恐れ、繩を掛けてアレ、奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上へ繩かけし心の中御推量なされて下さりませ。

甘輝 ウム、繩かけしとは能い了簡、上みへ聞きて言譯あり、したが、随分もてなせ。イザまづわれも對面せん。
案内申せと云ふ聲の、もれ聞えてや障子の内と家體の内にて、
母 ナニ甘輝殿のお歸りとや、爰はあまり高あがり、わらわがそれへ、
と立出る、形はいとど老木の松の、しめからまれし藤かづら、立居苦しきその風情。
ト、此内障子家體より母親以前の形にてよるほひながら縛られて出て下手に住ふ。
甘輝 見る目もいたはしく、
誠世の子といふまの、あればこそ、山川萬里を越へ玉ふ、その甲斐もなきいましめは、時代の掟是非もなし、それ女房、お手が痛まん氣を付けよ、優曇華の稀れ人と聊か疎略を存せず何事な

ぜず。何事なりとも此甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置かるな。」と、世に睦じくもてなせば、老母顔色打解て「ヲ、頼もしい、忝ない。其詞を聞くからは、何れに心置くべきぞ。頼み入れたき大事、密かに語り申したし是へ」と小聲になり「なう、我々此度もろこしへ渡りし事、娘ゆかしいばかりでなした去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ處へ、大明の帝の御妹、梅檀皇女、小船に召され吹き流され、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞くと齊しく、父はもとより明朝の陪臣。我子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡し、昔の御代に願し、姫宮を帝位につけんと、まづ日本に遣し置き、親子三人此唐土へは來たれども、淺まじや草木まで皆韃靼に隨ひ歸き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の、味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし。偏に頼み參らす。是が拜む心ぞ。」と、額を膝に押し下げ、只一筋のこころざし思ひ込うでぞ見えける。甘輝大きに驚き「ムウ扱は聞及ぶ日本の和藤内と申すは、此錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ム、武勇の程唐土までも隠れなく、頼もしき思立、尤も此うこそあるべけれ。我等

少とも此甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置かるな。

母

ヲ、頼母しい忝けない、其の詞を聞くからは、何れに心置くべきぞ、頼み入りたき一大事、密かに語り申したし。

「是へ」と小聲になり。

吾々此の度唐土へ渡りし事、娘ゆかしい許りてなした、去年の初冬肥前の國松浦ケ磯といふ所へ、大明の帝のお妹、梅檀皇女小船に召れ流れ寄り、御代を韃靼に奪はれし御物語、聞とひとしく父は素より明朝の陪臣、我子の和藤内と申すもの、賤しき海士の平業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡ぼし、昔の御代に願し、姫宮を帝位に即けん先づ日本に残し置き、親子三人此の唐土へは來たれども。

「淺間しや草木まで皆韃靼に隨ひなび

き。大明の味方に志す者一人も候はず和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝どの、力を添へて下されかし、偏に頼み參らす、是こそ拜む心ぞや。

「額を膝に押し下げ、只一筋の志し思ひ込うでぞ見得にける。甘輝大きに驚き。

甘輝

ウム、扱ては聞き及ぶ日本の和藤内と申すは、この錦祥女とは兄弟鄭芝龍一官の子息に候な、ウム……武勇の程唐土迄も隠れなく、頼母しい思ひ立ち、尤もかくこそあるべけれ、我等も先祖は大明の臣下帝亡び玉ひてより、頼むべき主君なく韃靼の恩賞業り、月日を送る折柄望む所の御頼み、早速味方と申したいが、少し存する旨あれば、急に應とも申されず、篤と思案し御返答。

「と、云はせも果てず。

母ア、そりや御畢性な詞が遠ぶ、是れ程の一大事、口より出せば、世間ばや、思案の間に洩れ聞へ、不覺を取り悔んで返らず、成れ成らざるの御返事を、サア只今。

「と、詰寄れば、

甘輝 ウム、急に返答聞きたくば、易い事如何にも往常軍甘輝、和藤内が味方致さん。

「云ふより早く錦祥女が、胸元取つて引寄せ劍引きぬき咽喉筋にさし當る

も先祖は大明の臣下。帝ほるび給ひてより、頼むべき主君なく、韃靼の恩賞被り、月日を送る折から、望む所の御頼み、早速味方と申したきが、少し存する旨あれば、急にあつとも申されず。とつくと思案しお返事を」と、いはせも果てず母「ア、そりや御卑怯な、詞が違ふ。是程の大事、口より出せば世間ぞや思案の間に漏れ聞えて、不覺を取り悔んでも返らず。お恨みとは思ふまじ。成れ成らざれ、お返事をサア只今。」と責めつくれば甘輝、急に返答聞きたくば易い事。如何にも伍常軍甘輝、和藤内が味方なり。」といふより早く錦祥女が、胸元取つて引寄せ、劍引抜いて咽笛に差當つる。老母周章で飛驚り、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏放し、娘を脊中に押遣り、仰向けに重なり臥し大聲上げて母「是れ情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺し殺すが唐土の習ひか心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁有るゆゑと、心腹が立つてのことか。但しは狂氣か。たまゝ始めて来て見たる、母親の目の前で殺さうとする無法人、日頃が思ひ遣られた。味方をせずせばぬ迄よ。今迄と違うて親の有る大事の娘。これ怖い事はない。母にしつかと取付きや」と、隔ての垣と身を捨てて、圍

老母あわて、飛びかゝり、二人が中へ割つて入り、持つたる手をふみ放し、娘を脊中に押しやり、仰向けに重なり伏し。母情なや何事ぞ、人に物を頼まれては、女房をさし殺すが唐土の習ひか、心に染まぬ無心を聞くも女房の縁ある故と、心腹がたつてか、但しは狂氣か。甘輝は、始めて来て見たる母親の目の前で、殺さうとする無法人。ほんに日頃が思ひやられる、味方を……せずばぬ迄よ、今までと違ふて親のある大事の娘、コレ、錦祥女、何も恐い事はない、母にしつかり取付けて居やいなう。隔ての垣と身を捨て、圍ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難き。怪れ遊ばすな。と計りにて、共に涙に咽びけり。此文句の内甘輝思ひ入れあつて、ト、劍をぬき錦祥女の胸元へさし付ける。母、これを見ていろゝこなしト錦祥女を圍ひ、よろしくこなし

錦祥女あちこちと心遣ひの思入れ、甘輝こなしあつて、甘輝飛びさつて、甘輝ムウ、その御不審御尤も、全く某無法にあらず、狂氣にも候はず、御疑ひの一通り申開かん。ト、詠への小鼓入りの合方になりこなしあつて、昨日甘輝王より某を召され、此頃日本より和藤内と云ふるもの、小僕下劣の身を持つて、智謀軍術たくましく、韃靼王を傾け大明の世に、職さんと此土に渡る彼が討手は誰ならんと、数千人の諸侯の中より此甘輝を撰み出され、十萬騎の大將を賜はる和藤内を我妻の兄弟と今迄は夢にも知らず彼奴日本に傳へ聞く楠とやらんが、かたんを出て、朝日奈辨慶とやらんが勇力あるとも。吾れ又、孔明が腕にわけ入り、樊噲項羽が骨髄をかつて、一戦に追つて追ひまくり、和藤内が月代首を掲げて來らんと廣言吐きし某が。ト、太刀も合せず矢の一本も放さずぬくゝと味方せば。

ひ歎けば錦祥女、夫の心は知らねども、母の情の有難さ、錦一怪我遊ばすな。」とばかりにて共に涙に咽びけり。甘輝飛退つて「ヲ、御不審御尤も全く某無法にあらざ、狂氣にも候らはず。昨日韃靼王より某を召し、此頃日本より和藤内といふ使者、せうぼく下劣の身を以て、智謀軍術遅しく、韃靼王を傾け大明の世に願さんと此土に渡る。彼が討手誰ならんと、数千人の諸侯の中より、此甘輝を選出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を賜はる。和藤内を我妻の兄弟と、今聞く迄は夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く、楠木とやらんが肝臓を出し、朝比奈、辨慶とやらんが勇力ありとも、我又孔明が膽に分け入り、斐噌、項羽が骨髄を借つて、一戦に追つて追捲り、和藤内が月代首提げて來らんと廣言吐きし某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬく〜と味方せば、往常軍甘輝が日本の武勇に聞怖する者でなし、女に絆され縁に引かれ、腰が抜けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雑口にかけれんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れがたし。恩愛不便の妻を害し、女の縁にひかれざる、義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲。ヤイ錦祥女、留どむる母の詞には慈悲心こもり、殺

伍將軍甘輝が日本の武勇に聞き怯ぢする者でなし、女にほだされ縁に引かれ腰がぬけて、弓矢の義を忘れ〜と、韃靼人の口の端にかけれんはコレ必定。
然れば子孫末孫の、恥辱のひかれ難し恩愛不便の妻を害し、女の縁に引かれざる義信の二字を額にあて、さつぱりと味方せん爲めヤイ、錦祥女、止むる母の詞には慈悲心籠る殺す夫の劍の先には、忠孝籠る親の慈悲と忠孝に、命を捨てよコリヤ女房。
理非を飾らぬ勇士の詞、錦祥女聞きわけて、
錦祥女 身に叶ふた。忠孝、親に貰ふた此の體、孝行のため捨つるはさら〜惜しいとも思ひませぬ、手にかけて下されませ、甘輝殿。
母を押しつけつと寄り、胸押明くれば引寄せて、見る目危き氷の劍、なふ、悲しやと駈隔て、押分けんにも詮方なく、退けんとするに手は叶はず、娘の袖に喰付いて引退れば、夫が寄る夫の袖をくわへて引けば娘は死なんと又立寄るを、口に咬へて唐猫の疇をかゆる如くにて、母は目も

くれ身も疲れ、わつと計りにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋りつき。
ト、此文句の内母甘輝錦祥女、いと泣き伏す。
錦祥女 一生に親知らず終に一度の孝行な何んで恩を送らうぞ、死なせてたへ母上。
口説き歎けばわつと泣き出し。
母 ノウ悲しい事をいふ人や、殊におん身は婆と冥途に親三人、残る二人の父母は産み落した大恩あり、中に一人の此の母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず、今爰で死なせては日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を憎んで見殺しに殺せしと云はれては我身の恥計りかは普ねく人の口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは我が日本の耻ぞかし。
唐を照らす日影も日本を照らす日影も、光に二ツはなれども、日本とは日の初め、仁義五常情ある慈悲専らの神國に生をうけた此母が、娘殺すを見物して、

す夫の劍の先には忠孝こもる親の慈悲と忠孝に、命を捨てよ女房。と、理非を飾らぬ勇士の詞：「ヲ、聞きわけた。身に叶うた忠孝、親にもらうた此體、孝行の爲捨つるは惜しいとも思はぬ。」と、母を押退けつつと寄り、胸を押明くれば引寄せて、見る目危き氷の劍母一なる悲しや。」と距離隔て、押分けんにもせん方なく、のけんとするに手は叶はず、娘の袖に食付きて、引退くれば夫が寄る。夫の袖をくはへて引けば、娘が死なんと又寄るを、口にくはへて唐猫の塙をかゆる如くにて、母は目もくれ身も疲れ、わつとばかりにどうと伏し前後不覺に見えければ、錦祥女縋り付き「一生に親知らず、終に一度の孝行なく、何て恩を送らうぞ。死なせて給へ母上。」と、口説き歎けばわつと泣き母「なう、悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人、残り二人の父母は産落した大恩有り。中に一人の此母は、憐みかけず恩もなく、うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰て死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を憎んで、見殺しに殺せしと、我身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと、國の名を引出すは我が日本の恥ぞかし。唐を照らす日影も、日本を照らす日影も、光に二つはな

甘輝 イヤ老母はこなたへ、
甘輝 ハ、ア是非もなし力なし、母の承引なきは、今日より和藤内とは敵對老母を是れに止め置き、人質に思はれんも本意ならず、輿車用意して、所を尋ねお送り返し參らせよ。
錦祥女 いやなう、送り參らす迄もなく庭先のやり水より、黄河までよき便りに白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、お迎ひにお出でなさるゝ筈。
甘輝 ム、スリヤ赤白の流れが返事、錦祥女 願ひ叶はぬ上からは、甘輝 とくく、知らせの合圖せよ、母 さらばいよく、ト、甘輝へ泣き乍ら寄るを引廻して、

錦祥女 イデ紅といて流すべし。
イデ紅といて流さんと、常の一下間へ入りければ、甘輝は老母伴ふて、立別れてぞ。
ト、送りになり錦祥女こなしあつて、上手の家體の内へ、甘輝は母を介抱して輿へ遣入る、知らせの木にて鳴物になり、上手の家體九尺程、障子を立たまゝにて三尺程せり上げ、よき處に止まる。
これと共に高梁の際より張物の唐門、扉共だんくくりおろす、是れにて真中へ石橋を押し出し、舞臺前へ一面の岩組、黄河の流れ下草のあしらひ、所々に牡丹の盛り、都べて庭前裏門の體、好みを通り納まる。
入るさきの月のそれならで、胸さへくらむ化粧の間の、障子引あけ錦祥女瑠璃の鉢に紅とき入れ、是れぞ親と子が渡る錦中たゆる、名残り今どと夕波の、泉水にさらさら、落瀧津瀬の紅葉葉と、浮世の秋をせき下し、共に染たる歌形も紅も滑る遣り水の、落ちて黄河の流れの末。

けれど、日の本とは日の始め、仁義五常情
 あり、慈悲専らの神國に生を受けた此母が、
 娘殺すを見物し、そも生きて居られうか。願
 はくば此繩が、日本の神々の注連繩と顯はれ
 我を今絞殺し、屍は異國に曝すとも、魂は
 日本に導き給へ。と聲を上げ、道もあり情も
 あり、哀れも籠る口説き泣き、錦祥女は縋り
 付き、母の袂の諸涙、甘輝も道理に至極して
 そる涙にくれけるが、稍ありて甘輝席を打
 つて「ハッア是非もなし。力なし。母の承引な
 き上は、今日より和藤内とは敵對。老母は是
 に留どめ置き、人質と思はれんも本意ならず
 輿車用意して所を尋ね、送り返し參らせよ。」
 錦「いや送るまでもなく、此遣水より黄河迄
 よき便りに白粉流し、叶はぬ知らせは紅を
 流す約束にて、迎ひにお出であるはず。いで
 紅解いて流さんと、平常の間に入り、
 り。母は思ひに撒き暮て、思ふに違ふ世の中
 を、立歸りて夫や子に、何と語り聞かせんと
 思遣る方涙の色、紅より先の唐錦。錦祥女は
 其隙に、瑠璃の鉢に紅解き入れ「是ぞ親と子
 が渡らぬ錦中絶ゆる、名残は今ぞ。」と夕波の
 泉水にさらさら落瀧つ瀬の紅葉と、うき
 世の秋をせき下し共に染めたる泡沫も、紅
 潜る遣水の、落ちて黄河の流れの末、和藤内

ト、此内上手の物見障子を明け錦
 祥女、誂への鉢を持ち出し、流れ
 を見おろし、思ひ入れあつて鉢に
 入れたる紅を流すことあつて、靜
 かに障子を立て切る、此石橋には
 和藤内好みの方へ、袋にて松明
 をともし笠をかざし立つてゐる。
 和藤内は岩頭に、篋うちかき座を
 して、赤白二つの川水に、心をつ
 けて水の面。
 ト、和藤内、石橋に足をふみかけ
 松明をさし付け川水にきつと目を
 つけて、こなし、
 南無三紅が流れた、扱ては望み叶
 はぬな、味方もせぬ甘輝めに大事な母人
 預けちやア置かれぬわへ、イデ取返して
 オウさうだ。
 ト、踏み出す足の早瀬川、流れを留どめ
 て行先の壱を飛び越へ壱を乗り越へ
 籠すは垣踏み破り、甘輝が庭の裏門
 口。
 ト、身構へする、向ふより下官大
 勢出て立廻り、投人形を遣ひ皆々
 向ふへ逃げて還入る。
 誂への鳴物になり和藤内ふつてよ

るしく向ふへ還入る。
 知らせにつき、淺黄幕を冠せ、道
 具出来次第に、切つて落す。
 本舞臺、元の唐家體に戻り、二重上手に
 甘輝、椅子にかゝり、誂への煙草盆、長き
 せるを持ち、冠りを臺の上へ置き、下手に
 母、繩にかゝり居る、此の見得唐樂にて道
 具納まる。
 ト、大太鼓入りの鳴物になり向ふ
 より和藤内、足早に出で来り、直
 に舞臺へ来る。
 母これを見て二重より下りる。
 和藤内繩をきりほどききつと見得
 縛めの繩引ツちぎり甘輝が、前に立
 はだかり。
 ト、此内、平舞臺へ下りる、和藤
 内よろしくきつとなる。
 和藤内 伍將軍甘輝といふ髭唐人はおのれ
 よな、天にも地にもたつた一人の母に繩
 をかけ渡したは、已れを已れと奉つて
 味方に頼まん爲めなるに、もつとうすれ
 ばはうすもない、味方にならぬは此の大
 將が不足な、第一女房の縁と云ひそつ
 ちから随ふ管、サア日本無雙の和藤内が
 直に頼む、返答聞かふ、いかに。

は巖頭に、鑊打被き座を占みて、赤白二つの河水に、心をつけて水の面和南無三寶紅が流る。扱は望みは叶はぬ味方もせぬ甘輝に、母は預け置かれずと、踏出す足の早瀬川、流れをとめて行く先の、堀を飛越え堀を乗越え、離透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ著きにけれ「まづ母は安穩帰しや」と飛上り、縛めの繩ひきちぎり甘輝が前に立はだかり和伍常軍甘輝といふ髯唐人はお主よな。天にも地にも只た一人の母に纏かけたは、おのれをおのれと奉つて、味方に頼まん爲なるに、持つてうすれば方圖もない。味方にならぬは此大將が不足な第一女房の縁と云ひ、其方から従ふ苦。サア日本不雙の和藤内が、直に頼む返答せいと、柄に手をかけつつ立つたり甘「ヲ、女房の縁といへば猶ならぬ。御邊が日本不雙なれば、我は唐土稀代の甘輝、女に絆され味方する勇士にあらず女房を去る處もなし。病死するまで便々とも待たれまい。追風次第はや歸れ。但し置土産に首を置いて行きたいか。」和「イヤサ日本の土産に己奴が首を。」と、兩方抜かんとする處を、錦祥女聲をかけ「ア、これなら、病死を待つ迄もなし。只今流せし紅の水土を見給へ。」と、衣裳の胸押開けば、九寸五分の

柄に手をかけ突つ立つたり。

甘輝へ、ハ、オ、女房の縁と云へば猶成らぬ、御邊が日本不雙なれば我は唐土。

稀代の甘輝。

ト、誂への鳴物に成り。

女にほだされ味方する勇士にあらず、女房を去る所もなし、病死するまでべんと待たれまい、追風次第早や歸れ、但し置土産に首が置いて行きたいか。

和藤内 イヤサ日本の土産にうぬが首を。

ト、雙方キツと詰める。

兩方抜かんとする所を、錦祥女聲をかけ。

ト、上手の純帳を巻き上げる、錦祥女出かゝり居る。

錦祥女 あゝコレ噂々、はやまり給ふな、病死を待つまでもなし、只今流せし紅の水、コレ御らんぜよ。

ト、云ひ乍ら眞ん中へ出て來たり思入れ。

ト、衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐劍、乳の下より肝先まで、横に縫ふて指し通し朱に染みたる其有様。

ト、錦祥女、兩肌をぬぐ、自害の體にて血に染り苦しき思入れ。

母は是はと許りにて、かつげと伏て正體なし、和藤内も動顯し、覺悟を極めし夫さへ、そゝるに驚くばかりなり、錦祥女苦しげに、

母上は日本の國の耻を思召し、殺すまいとなさるれど、我命を惜しみて親兄弟を貢がずば、これ唐土の國の耻と、斯うなる上は女に心引かざる。

人のそしりはよもあるまじ。嗚う甘輝殿、親兄弟の味方して、力もなつてたべ、父にもかくと告げてたべ、モウ物云はせて下さるな。

苦しいわいのと計りにて、消へくとこそ成りにけれ。甘輝涙を押し隠し。

甘輝 オ、出かしたく。

自害を無にはさせまいと和藤内が前に頭をさげ、

某先祖は明朝の臣下、進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと俗難を擇りしに、我妻只今死を以て義を勧むる上は心清く御味方、大將軍と仰ぎ諸侯王になぞらへ御名を改め。延平王國性爺鄭成功と號すべし。

装束召させ奉らん。

懷劍乳の下より肝先まで、横に纏うてさし通し、朱に染みたる其有様、母は是とばかりに、かつげと臥して正體なし。和藤内も動顧じ、覺悟を極めし夫さへ、そざるに愕くばかりなり。錦祥女苦しげに、「母上は日本の國の恥を思召し、殺すまいとなさるれど、我身を惜みて親兄弟を責がずば、唐土の國の恥と。かうなる上は女に心ひかざる、人の誇はよもあるまじ。なう甘輝殿、親兄弟の味方して力ともなつてたべ。父にもかくと告げてたべもう物いはせて下さるな。苦しいわいの。」とばかりにて、消々とこそなりにけれ。甘輝涙を押隠し甘「ヲ、出来た出来た。自害を無にはさせまい」と、和藤内が前に頭を下げ「某先祖は明朝の臣下、進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと俗難を憚りに、我妻只今死を以て義を勤むる上は、心清く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に准へ、御名を改め、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召させ奉らん」と、武運開くる唐櫃の、二重の錦羅縷の秋紵の裝束、章甫の冠花紋の香、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劍金を磨き、絹笠つとさしかくれれば、十萬餘騎の軍兵ども、幢の旗飾の旗、吹拔き立鉦弓鐵砲、鐵の袖を列ねしは、會稽山に越王の、二たび出でたる如くなり。

者共用意。

ト、此時唐人皆答へて、皆々ハア。

我運開くる唐櫃の、二重の錦羅縷の秋、紵の裝束。

ト、此内三階の唐人残らず、旗、さしもの、鐵砲、弓矢、鉞など、めい／＼持ち出て並ぶ、此内和藤内は裝束着替へ、よろしく椅子に虎の皮をかけ上手へ直す。

章甫の冠り花紋の背、珊瑚琥珀の石の帶、ばくやの劍金をみがき。

ト、唐樂になり、和藤内、唐冠り裝束、好みの拵へ、唐人長柄の絹傘をさしかける。

錦傘ささつと指しかくれれば十萬騎の軍兵共との旗は人の旗、吹拔き立鉦弓鐵砲、鐵の袖をつらねしは、會稽山に越王の再び出たる如くなり、母は大聲高わらひ。

ト、母罵しきこなしにて、ア、婿しや本望や、あれを見や、錦祥女お身が命で捨てし故、親子の本望天下の本望、四百餘州を洗むる自害、この上は生死も共に。

娘の劍をおつ取つて、咽喉にがばと突當る、人々これはと立駭げば、ト、母、錦祥女の劍を取つて自害する、皆々こなし。

母ア、寄るまい／＼。嗚う甘輝、國性爺、錦祥女は錦々の母の敵、妻の敵と思へば討つに力あり、氣をたるませぬ母の慈悲此遺言を忘るゝな。

錦祥女 母殿。

母 娘。

兩人 おさらば。

云へども残る夫婦の名残り親子手に手を取り引寄せて國性爺は出立を、見上げ見おろし婿しげに、笑顔を婆の紀念にて、一度に息は絶へにけり、鬼を欺く國性爺、龍虎と勇む伍將軍、母の遺言振くまじ、妻の心をやぶらじと、互ひに隠す涙の顔。

和藤内 母の遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に金棒。

甘輝 討てば勝つ、唐と。

和藤内 大和の兄弟。

兩人 兄弟。

未代不思議の智仁の勇士、異國に武徳を照らしけり。——(幕)——



國性爺を語る

竹本津太夫

久しぶりで國性爺が出ることになつて新装の文樂座に異彩を放ちます。私はこれで國性爺を出しますのは先の大正十五年五月一日初日御靈文樂座以來ですから五年振の上演です。

この「國性爺」に就ては深い思出話か

御座います。私がまだ文太夫時代であるとして、日露戦争の始まる二三年前ですから明治三十四年頃でした。先代呂太夫はこの國性爺が得意でありました、素人義太夫から入つた人で随分い、聲でした。その呂太夫師匠のをいつも聞いてゐまし

たのでそれをそのまゝうけついでる次第です、呂太夫の糸は鶴澤勝鳳でありまして、呂太夫といふ人は美聲で鳴らしましたがいつも中途で咽喉を痛めるのでその時は誰かゞ代役をせなければなりませんでしたが、私も陣屋を十日程替り役しましたがその興行には遂に再び顔を出さずに五十二歳で歿せられました、その時の陣屋の床本を遺品に貰ひ受け今でも思出に耽つてゐます。さて國性爺ですが、そういう都合でいつ師匠呂太夫の代役に出来なければならぬかわかりませぬので、勝鳳さんについて稽古をしてもらつてゐました。それが果して役立つて御靈の座で國性爺を出すといふことになり私が獅子ヶ城、樓門を源太夫と極まり糸は道人さんにはまりました。こんどは樓門を鏡太夫が語り、私は獅子ヶ城ですが糸は友次郎さんで始めて獅子ヶ城を附合つてくれるわけです。

この獅子ヶ城は一時間二十分位もありますが全段むらのない語り口でヤマとい

ふものがこれといつてあるわけがなく、全體いゝものであります、まあ強ひて申しますと、和藤内の母親を中心に、すべて大まかに、線を太く語るものです。

近松翁の名作だけに文章はともいゝもので語つてゐるその詞章の妙味に恍惚となりません。他の淨瑠璃と變つてゐるのは何といつても和藤内といふ異様な人物に活歴風の味を出させる點ですね、この國性爺獅子ヶ城は紋下の語り物として代々傳へられました、最近では文樂座の松島時代に於て攝津大塚師匠と團平師匠の

組合せで出されたのなどは淨曲史上に光るべきものでせう。

紅流しのところなどは婉然たる繪畫的情趣に酔はされます。この正本は正徳五年十一月一日初日の竹本座に書き下されたもので、一説には近松門左衛門獄中の作とも言はれますが今見てもいゝものですから、その當時の人は驚異の耳を聳てたこととせうと思はれます。

その時の名題は「父は唐土國性爺合戦」であります。母は日本國性爺合戦」であり、後享保二年二月十五日初日、仍且近松翁の筆で「種は日本國産は唐土

◆角座 二月一日初日 毎日晝夜二回開演

にて、第一大和田想外脚色「猫と旦那の子」二場、第二川竹五十郎作「兄貴の自惚れ」一場、第三小橋梅夜作「烟突」第四八方園福松作「人形箱」第五茂林寺文福作「引越し茶話」一場の新作五種で、その配役は――
眞野幸太郎、佐々木市兵衛、森永かく(十善)八百屋久造、弟幸一、兄一郎、島田知義(天外)母親おまつ、市兵衛の叔母お米(天照)工場主繁村、社員風の男(一郎)前田浩一、佐久間千之助、魚屋由造(三樂)藤井忠助、齒痛の男(致雄)淺尾健、弟次郎(三郎)古賀彌助、友人村上、利尚光悦、林昭源(富士

鳥)妻お安(紫鳥)仲仕音吉(十九郎)店員香松、知人菅野、工場員佐々、店員吉田(鐵彌)店員谷口、つんぼの芳(八四呂)醉漢時彌)土木語負師淺尾新太郎、友人増田(賀川)父治兵衛、事務長徳井脩三(小織)女中お淺、娘君子、女房お近(東)妾お千代、娘お津、社員の妻浦上與志子(春日)下女お民、求婚の女、長屋の女房お福、女中おしか(桃谷)娘久子、女中おかつ、友人咲子(鈴木)妻お弓、妹お花、お磯、妻香津子(如月)新太郎の妾お綱、佐々木の妻安江(米津)

◆京都南座 二月一日初日 毎日午後四時開幕で東京大新派合同劇が出演。主なる顔ぶれは、伊井、河合、喜多村、花柳、小堀、梅島、英、柳水谷八重子等にて狂言は、第一菊池寛原作川村花菱脚色「母」三幕六場、第二村松梢風原作巖谷三一脚色、清水の次郎長脚色、假名屋小梅三伊原青々園原作、眞山青果原色、假名小梅の一節「箱丁殺し」一幕、第四菊池寛原作、川村花菱脚色、婦女界所載「明眸」六幕の四篇。

◆神戸松竹劇場 二月一日初日 毎日晝夜二回開演にて新聲劇が出演狂言は、第一、舞臺評論所載、徳田純宏作「萬歳師の家」一幕、第二大阪朝日新聞連載、吉川英治原作、六田甲二脚色並ニ演出「貝殻一平」五幕十八場。



邦劇の意義

我童主宰の邦劇座が、去る一月廿四、五、六の三日間浪花座にその復活公演を行った。出し物は第一「矢矧の里」第二「關八州繫馬」第三「萩の朝霧」第四「春興」の四種。

興味を中心は近松原作の「關八州」にあつた、大森痴雪氏が脚色して三幕三場にアレンヂされたが、この狂言が單なる近松物の紹介といふよりも、古典的な歌舞伎研究に重きを置いてゐたことが見てゐて面白かつた。

この芝居は將門の子將軍太郎良門の謀反と源家の家督争ひを扱つてゐるが、第二幕を全然メロドラマとして、頼平(吉三郎)と詠歌の姫(霞仙)の道行を長唄に仕組み、將軍太郎(我童)の手で大勢の出に、市界、奥山、松壽の

三人の手下が美しい二人の姿を見て強請るセリフに「これ女郎さん美事でやすたよりませぬ」から「エ、ぐはちな、云はいでもしれたこと何ぼう美しようても、器量に惚れるこちとではござらぬ、その結構な衣服に首だけ、かう口説き掛つてからは、否でも應でも帯解かす、ホ、好い若い人、あつたら前髪早い落花」と原作を尊重してゐるのはうれしかつた、それから將軍太郎の頼平とのタテ、鞍馬下向の頼信(橋三郎)らとのタテに隨所に變つた型のキマリを見せてゐたのも目立つた、さうした古風な舞臺の匂ひをなつかしむならば、立廻りのツケ柝、すゝき野に降る切紙の雪、だんまり模様、幕外の大面の見得、六法の引込みとこの所古典復興の感が深い。

こんどの邦劇座の出し物の中で、強ひてその「邦劇の意義」を求めらば、この市原野の演出ではなからうかと考へる、我童として他の大村嘉代子氏作「萩の朝霧」に於ける勸王家の妻を描く新演出や「關八州」の第三幕箕田二郎住家に於ける纏もつらの母の演出にも苦心を拂つてゐたであらうが、印象的にも市

原野を面白く見た。

邦劇座は今後飽きも邦劇座であつて欲しいそして「邦劇」——即ち歌舞伎の研究をどこまでも捨てずにやつて貰ひたいものである。

世紀劇場の組織

東京の今東光氏から世紀劇場の通信に接した。大阪で邦劇座の公演された一月廿四、五、六の三日間を東京市村座に第一回公演としてダリーングの「三等水兵マルチン」十一場、今東光氏作「忠次半生記」十場を出した。主宰は今氏で、俳優には草間實、鬼頭善一郎、鳥居正、春野歌子も参加し、日活の月村節子、市村羽左衛門の愛娘藤間春江も出てゐる、そして構成員が新しく時代劇の分野を開拓しやうといふ意氣込みださうだが、近く大阪へも乗り出したと云つてゐる。

新興演劇

大阪から新興演劇が生れた。劇文壇のあらゆる線上に活躍する人々の寄り集まりである曰く森田信義、豊岡佐一郎、野淵昶、山上貞

一、田中總一郎、鳥江鐵也の六氏で、森田山上兩氏はふたば會の連中、豊岡氏は七月座、野淵氏はエランヴイタル小劇場の主宰、二人共關西小劇場運動の尖端に働らく人、田中鳥江兩氏は共に松竹の劇作家で、既に創刊號を出した。そして大いに劇文壇に新興的氣勢を掲げるといふ。因みに東京でも長友額田六福氏等綺堂門下の人々に依り「舞臺」が刊行された。戯曲雜誌の出版と同時に新人輩出は結構である。願はくば優れたる戯曲がそれらの雜誌より生れんことを望んでをく。

イヌム

もし、こんなことばで云へるならば、今日の劍劇には澤正イズムがある。

妙にニヒリスチックな顔付をした五分さかやきか何かの浪人が、いーざ、まゐれとか。何とかのセリフ廻しに死んだ澤田正二郎と共通の聲音を出す。

その澤正に共通した味を出さうとする劍劇の俳優を時折見かける。しかし所詮は澤正のイミテーションであつて、迫力に乏しいのは

仕方がないとして、中にはどうも鼻もちならぬのがある。

映畫の時代劇部の人のラヂオドラマにもよくこんなのがとび出す。

劍劇はその澤正イズムでなければやりにくい點もあるだらう、殆んど、そのイズムが劍劇と銘打つ劇團に流れてゐることはいやなことだ。

だが、こゝで中田正造をほめておきたい。

彼には澤正イズムのニヒがない、陰影がないその代りにユーモアと愛嬌がある。新聲劇が新國劇の追隨でない所以、そして澤正イズムにかぶれない理由は、この明るい喜劇的な要素を持つ中田を一枚持つてゐる強味だ。一月興行の角座で吉川英治氏の「貝殻一平」が大成功だったのはそこにある。一平の映畫化の成績が各社共香ばしくなかつたのに對し、獨り舞臺化されて斷然その眞價を現はしたのはこの新聲劇であり、中田の手柄である。

漸やく、劍劇を標榜する新聲劇もこゝに特殊な中田イズムを胚胎しつゝあることを報告する。

福井茂兵衛危篤

新派劇界の元老福井茂兵衛が上本町赤十字病院の一室に危篤に陥つてゐる。その昔自由黨の壯士が、その主義主張の宣傳のために組織した壯士芝居の所謂新派の初期から今日迄最古參格として新派劇界の大久保彦左を以て任じて來た彼も宿痾のために病篤しと聞く。

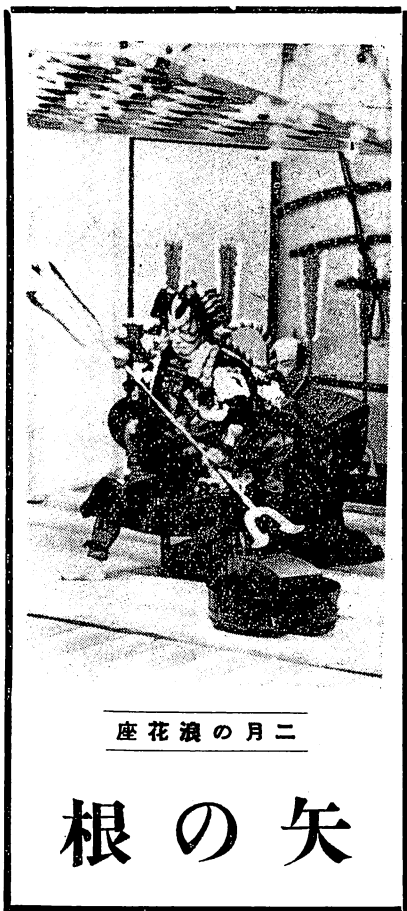
助六へ贈物

中座の二月に上演される歌舞伎十八番「助六」に因んで、新吉原から助六さんと揚卷さんの二人に贈り物が來た。

一月二十八日午前十時、梅田驛前にその贈物である所の助六傘や箱提灯その他五荷の荷となり、幫間連や白襟紋附に日本髪的女給連に送られて中座へのり込んだ。

劇場では幸四郎福助が受けをやり、一同手打ちをしてこの古例の式を終つた。

それにしても、女給の見送りとはモダン時代である、江戸の助六もこれでは煙管の雨が降るわ／＼でなくて、キッスの雨が降るわ降るわ。



座花浪の月二

根の矢

登場人物

- 一、曾我五郎時致 三 升
- 一、馬士畑右衛門 橋三郎
- 一、曾我十郎祐成 長三郎

大薩摩連中

大ざつまへ去る程に、曾我の五郎時致は方に向つてふとのつとそれ父の仇には俱に天籟和合樂、壽福開運萬巻の軍書の窓の北面は残んす雪の朝みどり、春風春水一枝の梅くわつと開くや花の春、新らし枕のもの事にあらたまれ共時致は今年も古座古疊古井といひし所にて矢の根磨いて

居たりける。

ト、大小入り寄せになり上障子を一面に上る。此内に吉例矢の根五郎の拵らへよるしくうしろに矢屏風矢の根を磨いて居る事、又淨瑠璃になる。

傳へ聞く養由が矢先は遠き高麗唐土近くは和朝尋ねれば鎮西八郎爲朝、源三位頼政が古今無双の弓ノ勢にも勝りはすれども劣らじと、天性普通の氣丈者。

五郎 虎と見て右に田作綱繪、矢立の酢午勢資こぼり大根、一寸の鯨に昆布の魂、髻は結經せち汁の鯨の威勢振ふ共、我鮫鉾の飾り海老、赤いは親父が譲りの面テ、つら

世上を鑑子の蓋、ちろり爛錦文福茶釜、毛抜鉄の折れまでも、古金買にてや羽子の、一夜明けても舊冬の鎖帷子小手脚當、すねから干鯛も申貝も、取子にとられぬ酒屋の通ひ、めて十七貫八百六十四文、横に子の日の初寅も喰合のない福の神、どうで貧乏するからは自問自答の悪たいを、申て申さん先づ大黒は慮外者。

ハテとはどうぢや。
ハテふだん頭巾を脱ぬつぎ。
ハ 悪比須は身持がうそぎたない。
とはどうぢや。

ハテ鯛をお抱きの脇の下。
江戸前にてもあらばこそ。

精進日にはつき合はれぬ。
毘沙門天の兜頭巾用心過ぎてうつとうしいわ
布袋はどぶで福祿壽は。

月代剃るに手間が入る。
辨才天は船饅頭、浪乗舟の銭もうけ。
儲けられうがられまいが、苦勞にするは國土のたわけ。

富貴天にあり。
死生命にあり。

何れ。
祈るな。

所なしげに顔回が巷に。
一單の食一瓢の飯。

〆疎食を食ひ水を飲み。
臂をまげて枕とす。

〆樂みしんぞその中にあるにまかする安煙草煙管おつとり吸付けて鼻の先なる春霞打眺めつゝ時致はくわんくとして居たりける。

〆時に年始の門禰者素禮年玉袂箱三絃箱の一調子張上げて物もう。

どうれ。

〆大ざつま文太夫御禮申ます。是は早やとの出語り御大儀に存じます、殊に年玉として末廣並びに寶船上下とつてサ、奥へ祝ひませう。

〆イヤさう致しては居ますまい、方々てムれば猶禮日の時を期しゆるりと御意得ませうぞ。

デモ一寸盃を。

〆イヤ、ヤ御めんく春永にと云ひ捨て、こそ立歸る。

大薩摩文太夫なればこそ時致が所へ祝うてくれる、ハテ奇特な男ぢやなア。
〆其時五郎年玉を開くや扇寶船ハテ氣の付たる年玉と正月心若輩に上からよんでも永き代の下から讀んでも永き代のような眠りのとろくと強か過ぎたる難夷腹枕の下へおつかつて敵祐經が首でも引つこぬく夢でも見べいか。

〆食後の一睡一樂と砥石を拭ひ、無難作に是れ邯鄲の枕ぞとふんぞり返つて時致はヤットコツチャアウントコナ。

〆暫しまどろむ高野、ゆたかにこそは臥しにけれ。

〆アラ不思議や轉寢の片腹淺き風の足、舎兄十郎祐成忽然と顯はれ出で。

ト、此内五郎は仰向けに寢る事よろしく、薄どろになり、上手梅の立木の所へ曾我の十郎着流しの拵らへにて宙乗りにて出で。

十郎いかに時致、我計らずも今日祐經が館へ掬となり籠中の鳥、網裏の魚働かんに力なし、急ぎ來りて急難を救ひくれよ、コリヤ弟、起きよ時致。

〆起きよ五郎時致といふかと思へば忽ちに消えて形ちは失せにけり。

〆十郎上手へ消えることよろしく。時致夢さめむつくと起き邊りを見れ共人もなく、莊然として居たりける。

五郎扱は夢中に兄祐成、念力通じて急難を救ひくれよと告げたるか譬は、祐經天へ昇らば續いて昇り大地へ入らば同じく分け入り日本六十餘州は目の邊り東は奥州外ヶ濱。

〆西は鎮西鬼界ヶ島。
〆南は紀の路野浦。

〆北は越後の荒海まで。

人間は通はぬ所。
千里も行け。
〆イデ追駈けん時致が勢ひ進む有様は恐ろしかりける次第なり、かゝる所へ向ふより。

ト、此内花道より馬土畑右衛門、大根を附し馬を曳き出て來たる。

〆馬附大根の春商ひ、大根くと賣來る、時致是をきつと見て、これ幸ひの肌脊馬價は望みにまかすべし。

馬を貸せ。

〆其馬貸せと近寄れば、馬士も氣おつて狼籍なり。

馬士商ひ馬に乗らんとはびやくらいならぬ、ならないぞ。

〆びやくらい成らぬといふ所を引擱んで七八間エイくやつと人蹴。

手綱引よせ馬に跨りきつと見え。

〆手綱おつとりひらりと打乗り、手練の大根千里が鞭。

五郎直へ行けば五十町。

〆廻れば三里、三ヶ莊、宇佐美、久須美河津が次男。

〆曾我の五郎時致が曲馬の術をこれ見よや。

〆工藤が館へ急ぎしは勇ましかりける次第なり。

幕

時雨の炬燵

紙治内の場

通り神樂で幕が明く。

丁稚の三五郎は店番をしながら、治兵衛の子供、お末勘太郎の二人を遊ばしてゐる、いや自分が子供の玩弄箱をひつくりかへして、いろいろの人形などを取り出して遊んでゐるのである。此間上るりで見たといふ三十三間堂棟由來、柳のおりうを一段語つて遣ふて見せると、口三味線で「和歌の浦には名所が御座る……」と語つてゐると紙買ひの町人が出て来て、その腰を折つてしまつた、三五郎はばやくまいことか、劔もほろゝの商ひぶりである、が好きな道はやめられず、そのつゞきをやり初めた、善六と太兵衛が連れ立つて出て来る、治兵衛居るか入口を開けたが、三五郎對手では埒明かぬと見て、奥へ行かうとした、孫右衛門は來かゝつて二人の様子を見

てゐたが、聲をかけて呼び止めた、自分は治兵衛の兄粉屋孫右衛門、治兵衛に代つて用を聞くといふので、二人はつくづく孫右衛門を見て、此間河庄で逢ふた侍、今日は丸腰とは、と首を傾けたが治兵衛の兄と聞いては云つてやると、太兵衛は自分が身受けする小春を治兵衛が連れて退き隠してゐる故せりふせうと逢ひに來たといふのであるが、連れて退いた證據があるかと、念押されて二人は押詰まつて間の悪さうに、つぶやきながら行つてしまつた。

孫右衛門は治兵衛おさんの二人の在否を三五郎に尋ねて呼ばうとしたが、撃知つて二人は奥から出て来る孫右衛門は最前からの様子に聞いたかと治兵衛に問ふて見て、治兵衛は始終の様子は聞いてゐたが、小春のことは心

残りなく、思ひ出したくもないと云ひ切つたおさんも治兵衛に嘘はないと言葉を添えるのだつた。

「それ聞いて私も安心しました、が勇殿やおふくろは、昔堅氣な御氣質故、口先ばかりでは御得心なさるまい、勇殿のうたがひ晴らす爲め、何と誓紙を書いてくれまいか。

治兵衛は言葉の下から易々と誓紙を書いて孫右衛門に手渡した、孫には目のない、年寄の事、自分が持つて往かうよりお末を連れて渡させやうと、孫右衛門はお末を連れてきも安心の體で歸つて行つた。

三五郎はおさんの喧附で、店を仕舞ひ八方へ灯を入れて奥へ去る、治兵衛は所在なきうに傍に暖められてある炬燵へ這入つた。

門送りさへそこ／＼に、治兵衛はそこに有り合はず、定木枕うたゝ寢の、あたる炬燵の小春時、まだ曾根崎を忘れずか、のける布團の内さへも、涙にじめるその風情……。

襟に顔を埋めてゐるものゝ、治兵衛は小春のことを思ひ出してか、泣いてゐるのだつたおさんはあきれてつく／＼とその顔を打守り「エ、餘りぢやぞへ治兵衛さん、それ程名残

りが惜しいなら、舊紙書かぬがよござんす、なせにお前はそやうに、私しが憎うござんすへ。

治兵衛は子までなした中と、おさんの云ふことをさへぎつたが、おさんはその手を拂ひのけるのだつた。

「イエ、憎いそやなく、

憎ましやんが嘘かいなあ、一昨年の十月申の亥の子に炬燵あけた祝儀とて「此處で枕。」

「並べて此方は女房の懐には、鬼が住むか蛇が住むか、それ程名残りおしいなら泣かしやんせ、その涙が鯉川へ流れたら、小春がぐんで飲むやらうぞ、あんまりむごい治兵衛さん、何ぼうお前にどの様な、せつない義理が有るとても……。」

「二人の子供はお前何ともないかいなあ。

おさんは心の限りかきどいて、恨み泣きであつた、治兵衛はむつくり起き立つて涙を拭ひながら。

「オ、尤もぢや、誤つた、悲しい涙は目より出で、無念な涙は耳からなりとも出るならば云はずと心見すべきに、同じ目よりこぼるゝ

涙、足掛三年がその間、露程も憎氣せぬそなたに云ふも小春めが不心中。

もう小春の事は思ひ切つてはゐるが、太兵衛が受出すとなれば、治兵衛は金の工面に盡き、小春を退いたと得知れぬ奴の口の端にかゝるのが無念、口惜しいので、ツイ涙が出た

と心の中を明すのだつた。おさんは此の言葉を聞いて思ひ當るらしく、なら小春さんは死ぬ氣ぢやと、自分が頼み込んで治兵衛と切れぬやう愛想つかしのからくりを、初めて治兵衛に打明けた、小春を殺せば義理立たず、命助ける思案してとらう、するのであつた。

治兵衛も今更に小春を恨んだ心が恥かしくなつたが、何を云ふにも先立つものは金、おさんはうなづいて立上つた。

「立つて算笥の小引出し、明けて取り出すないませの、紐付き帛紗押ひらき、出す一ト包み……。」

おさんが手渡す一ト包みを取上げて治兵衛は不審さうに聞いた。

「サア此金も後で語れば知れること、此晦日に岩國の仕切り銀に才覚はしたれども、それは兄御と談合して、商ひの尾は見せぬわいなア、小春さんの方は急なこと、ソレ此小判五

十兩、残り私は私か。

「かい立て、明けて取り出す染小袖兼て斯ふとは白茶裏、黒羽二重もにかへぬ淺紫の糸目逢、ひつた鹿の子も惜氣のう、小供のものもかい集め、内輪に見ても二十兩、餘もや貸さぬと云ふ

ことではないものまでも有る顔で、夫の恥と我義理を一つに包む風呂敷の、内情を籠るらん。

治兵衛も我が羽織を脱いで共にやらうとしたが、おさんは止めて自分の櫛をとり箱へ入れて通共々風呂敷に包んだ。

「私や子供は何着いても、兎角男は世間が大事身受けして太兵衛に一分立て、下さんせ。治兵衛はおさんの手をとらんばかりにしてその心づくしに泣いた。

「したがり手附渡して取とめ、請出しかこぶて置くと、内へ入れるにしてからが、そなたは何と、

「何のいなア、かならず案じて下さんすな、子供は乳母か、飯炊きか、面倒ながら眞實の妹持つた。

「思ふといふも胸までつかへ涙呑み込み呑み込んで夫に立てる貞節は、

傍で見る目もいぢらしい。

「コレ何にも云はぬ、女房共、親の罰天の罰神佛の罰に當らずとも、女房の罰が恐ろしい治兵衛は手を合して、詫び入るのだつた。

「あゝ勿體ない、わいなア手足の爪を放しても皆夫へのためぢやもの、跡の間では詮ないことサア早く。」

おさんは三五郎を呼立て、風呂敷包を背負つて、治兵衛を急ぎ立てた。

男五左衛門、ずつと内に入つて来る、治兵衛とおさんは嘗て顔を見合した、三五郎の背の風呂敷に目をつけた、五左衛門は又質屋へであらう、こつちへよこせと引たくつた、此の劍幕に恐れて三五郎は奥へ逃込んでしまつた。

「大方こうであらうと思ふたわい、……手みぢかにおさんに吸やりや、誓紙の代りに去り状かけ、エ、あんだらくさい。

五左衛門は誓紙を引きいて、治兵衛の顔へ打つけてむづと座つた。あまりのことにおさんは堪まらかねた、此家の身代のおとろへもお前が銀山へ手を出した爲め、男のこと、證文も残らず戻し済ました時、涙をこぼして拜んだこと忘れまい、その大恩も打忘れたのか

「なだめつ叱つ兩方へ、我が身一つのせつなきつらさ、思ひやられて道理なる思ひは同じ浮思ひ、身の言ひわけに紀の國や、小春は爰へ來かゝりて、様子ありげな内の體、逢ふてはいかゞと用水の、かげにかくれて聞き居るとは知らずして、治兵衛は手をつき……。」

頭巾で顔を隠した小春が、出て來たが、内へ兵衛は五左衛門に詫び入つて、おさんと此儘添わせてくれと頼むのだが、五左衛門はいつかな聞入れず、果ては拵へよこした道具衣類を改めて封印付ると、止めるおさんを振切つて單箭の抽出しを開けたが一物もないに、あきれるばかりである、治兵衛は心を定めて先刻の五十兩を衣類諸道具のかわりに差出した五左衛門は金受取ると直ぐにおさんの手を取つて引立てる。

「まア待つて下さんせ、ア、言ひ出しては聞かぬと様、私やもう歸ります、いふ迄はなけれど、勘太郎の事をたのみますぞへ、朝飯前に忘れぬ様、桑山の丸子どうぞ吞まして下さんせ。

五左衛門の急ぎ立てる聲に目を覺した、勘太郎が炬燵を出て母を呼ぶ聲も餘所に、五左衛門はおさんを無理に連れて行くのである。かゝさんのうと聞捨てに、跡に見捨てる手を捨つる、藪に夫婦の二股竹、長き別れと出て行く。

用水のかけから出た小春は延び上つて、おさんの後かけを見送つて、内へ入りざま治兵衛に縋りついた。

「何から言はうぞ治兵衛さん、いつぞや曾根崎で、愛想つかしの悲しいお別れ、思ひ切つては居るけれど、太兵衛に身受しられては、所詮生きては居ぬ覺悟、此世の名残りにたつた一ト目、來ることは來たも折あしく、立聞きした内の様子あれ程眞女なおさん様に、あふぎの別れさせますも、皆私から起つたこと勘忍して下さんせ。

「眞實な入りわけを、聞けば聞くほど此身の誤り、あの様な女房が、三千世界に有るかいのう、此言ひわけにはそなたも。」

「高砂や、此重箱に餅入れて。」

三五郎が經機の代りに手習ひ机に鶴龜のろうそく立、花立に松の一本枝をさし、重箱を乗せ銚子鍋かわらけをのせて持つて出て、お

家さんが言ふた、小春さんと旦那さんと祝言さすのぢや、われを頼むといふて置かんした酒がないから水を入れて来た、と二人に呑め〜とすゝめるのである。

二人は涙の内に覺悟の水盃を交わしたのであつた、表にお末は墨の衣にわらじがけ、坊主笠を着て立つた姿を見た三五郎は、幸ひの誦うたひと合點してつれて入つたをりの、變つたお末の姿に惘りそのまゝ奥へ逃込んだ治兵衛もいぶかしく、わけを開けば子供心に、着物は白いによつてたと書いて下さつた父さんや伯母さんに見せて來いと、ぢい様がそこまでつれて來て下すつたと語るのであつた。

「云ふに二人はさしよつて、あたふた脱がす墨染の下は何か白無垢の、おさんが筆のちらし書……」

治兵衛は心急ぎつゝ先づ讀み上げた。「涙ながらに一筆しめし參らせ候、先程と、様につれ立ち候節、小春様お忍ばせの姿儘に見受け候へども、御存じのわけ合ひ故御目もじなり難く書殘し參らせ候。

「とかく連れ合ひの命が助けたさ、小春様へわりなきお願ひ申上げ候ひしに、御聞届け賜

はる嬉しき、海山にかへまほしく、何ぼう忝けなふ存じ上參らせ候。

「此の御恩を送り候には末々お二人を御夫婦となし參らせ候より外なく存じ候、その上と、様の眞實を聞き我事は是までの縁とあきらめ參らせ候。

「又お末事はこなたの乳にて育て上げ申候、勘太郎が事をくれ〜も頼み上參らせ候讀みつゝも小春の術なきは、立つて見つ、居て見つらろ〜するばかりである。

治兵衛はお末の懐ろにある五左衛門の手紙を恩知らずめ、とつぶやきながら讀みつゞけた、銀山にかゝつて損失をかけた詫び、輕少ながら百五十兩衣類改めの籠單箱の抽出しに入れ置いたと讀み知つて、治兵衛は小春に改めさせた、その金は小春の身代金、おさんとお末は尼にして、先刻の五十兩は二人の飯料即ち寺の詞堂金にさし上げる……」

治兵衛は此處まで讀むと、後はもう讀む事は出来なかつた。

「是れ迄情氣もなされずに、違はして下さる其御恩、聞き入れたのが枷になり。

「こんな事ならその時に、なぜさう云ふては下さんせぬ。

「これなア申し治兵衛さん、おきんさんを呼び戻し。

「千年も萬年も添ひ遂げて下さんせ、此の子は可愛うないかないア、愛に溺るゝ幼子の、乳房にはなるゝいぢらしき「孤兒にしたも皆私から起つた事。

「堪忍してと計りにて、取亂したる詫び涙、嗜れ間もわかず降りしきる。

小春は身も世もあらず泣き伏すのである。太兵衛と善六は、小春を探しに來た。紙屋の家を覗いて、小春の姿を見、太兵衛と善六は抜身で治兵衛にかゝつたが、三五郎の箆の助太刀に、焦つた二人は相打ちにどろと倒れた灯をつけて治兵衛は見て惘り、三五郎にお末勘太郎を男の家へ送らせた震へる小春の手を取つて、

「斯うなるとは是非に及ばぬ、兼て云ひ合はせし如く網島の大長寺。

「そんなら是より。

「人なき内にさアおじや。

「手を曳き急ぐ悪縁の、末は涙の藻汐草の種となりける。

治兵衛はお末の衣を冠り小春を抱へるやうにして花道へ。

【幕】

新舊「國性爺合戦」

山上貞一

……牡丹に唐獅子竹に虎、虎追ふて走るは和藤内……よく子供の時分に聞いた俗論だが、ダグラスや草人がもてる一九三〇年には、かゝる微温的な言辭を弄する子供すらないことはなんと隔世の感が深いではないか。こゝに新舊の文字を對比させて近松門左衛門作する處の「國性爺合戦」とそれを新解釋した築地小劇場の小山内薫の「國性爺合戦」とに就て書けといふ編輯長の命令こそ、正に尖端的なあまりに尖端的なものではないか。

元來、和藤内はあのグロテスクな風貌であり、風姿であるに拘らず、實に親しみ多い名である。虎を退治し異國

に武名を輝かした意味で加藤清正と同じ程度の親しみが持てる。その和藤内が波穩やかな平戸の濱邊で、鳴と蛤の争ひを見て軍法の奥儀を覺つて、大明韃靼併呑の厚望を抱く處から、延平王國性爺と改名して明朝再興の大成功までを五段ものに書きあげたのが、再び言ふ近松門左衛門作の「國性爺合戦」である。

昭和五年一月東京歌舞伎座ではこの「國性爺合戦」の内樓門の場だけを上場した。普通五段通しで演ずる事は文樂座ぐらゐのもので、主として樓門より獅子ヶ城、俗にいふ紅流しまで演ずる即ち三段目だけを演ずるのである。大

阪では珍らしい出し物で大正七年一月に鷹治郎一座で中座で上揚した以來だと聞く、今度は文樂座でも又浪花座でも、出るとなると勇敢な出やうである。

「仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず、大和唐土さまんに道の巷は別れど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて親子三人めぐりあひ、我智とばかり聞き及ぶ、五常軍甘輝が館城、獅子ヶ城にぞ着きにける。——いつもながら大近松の流麗な筆致には頭がさがる。だが大近松もこの文章に變るに築地では汐見洋の老一官があつた。『これは困つた。運よく赤壁の麓で三人一緒にやつて、やつとこゝまで辿りついたが、この厳しい堅めではどうにもなるまい』と獨白しやうとは思はなかつたであらう。

小山内薫が近松の淨瑠璃に依つてこ

の「國性爺」を築地小劇場のために演出臺本として書かれたに就ては、筆者として意見がある。即ち、近松の原作の内容にはわざと少しも手を入れないで、今日から見ると幼稚な趣向も粗雑な滑稽も、わざとそのまゝにしてあるそれは小山内氏の目的が、内容は飽くまでも正徳時代のものにして置いて、演出だけを人形浄瑠璃からも歌舞伎劇からも離れて全く新しい形式のものにしてみたい處にあつた。従つて演出の目標は内容的であるべきより、外觀的であるべき筈だと言つてゐるが、この突拍子もない二つを假に新舊と對比して書き出してみると、決して偶然でない對比を二三にしても見ることは寧ろ不思議な氣がする。

それは、大近松の作の「國性爺」が正徳五年十一月一日竹本座に上演されたに就ては、その前年の正徳四年九月十日に竹本義太夫が六十四歳で歿してそれに代る首席太夫は政太夫で年齢僅

かに二十四五歳であつた。世間では竹本座の存続が問題になり内部では古参の不平があるといふ際に、一座の顧問であり作者である大近松が、一新生面を開拓すべく、外國關係 日支兩國に涉つての人物風景を見せて、観客の吸收到當つたことは、實に築地小劇場が翻譯劇に飽いて局面轉換策として近松の「國性爺」を出して、あつと驚嘆させたのと同様な點がないでもない。まして竹本座に於ける近松門左衛門、築地小劇場に於ける小山内薫、なんとよく似た人物なり位置なりではないか。たゞ相違の點は築地はこの「國性爺合戦」を上演して間もなく小山内氏の逝去に會ひ、更に分裂の非運に際會した。だが大近松の「國性爺」は全く大好評で初日以来十七ヶ月打續けで、近松の作品中でも初興行の打日の最も永い記録をもつてゐる。

獅子ヶ城の樓門が堅くて開きそうにないので、和藤内が憤慨して「今更驚

く事ならず、一身の外味方なしとは日本を出づる時より覺悟の前、つい見ぬ男よ聲よと親しみだてして不覺を取らんより、頼まれうか頼まれぬか、一口商ひ……」いやと言へば竹林の虎狩して従へた島夷を軍兵の元手とすれば、五萬千萬勢の付くのは隙入らずと門を蹴破ると吐鳴るのだから愉快だ。即ち和藤内は父の老一官と共に、娘の婿に當る五常軍甘輝を味方に付けて、韃靼國を征破り、大明の御代に回さんといふのが目的で乗込んで來たのだ。甘輝は折悪しく大王の召に應じて昨日より出仕して不在といふので、樓門に現はれるのが甘輝の妻の錦祥女である。一官は始めて臘月の下で娘の顔を見た。娘も肌身放さぬ姿繪を高欄に押開いて柄付の鏡を取出して、月に映る父の顔を鏡の面に見た。これからが大近松の大文章だ。

「さては誠の父上か、なう懐かしや戀しや、母は冥途の苔の下、日本とや

らんじに父上ありとばかりにて、便を聞かん知る邊もなく、東の果と聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を披き、是は唐土是は日本、父は爰にましますよと、繪圖では近いやうなれど……

二十年間逢へないと思つてゐた父に逢つたのだから娘も泣く父親も咽返るこの樓門も崩る、ばかりの愁嘆場を、築地では田村秋子の錦祥女が「おう、目許口許、額の黒子、お父様に相違ありません。まあ、お懐しい。よう生きてゐて下さいました」と簡単に演じてしまふ。ニヒは築地へ、センチは歌舞伎へ。

父子の對面は終つたが、他國者を城内へ入れる譯には行かない。そこで和藤内の母が甘輝に逢つて口上を述べるべく城内に這入る。「さて此城の廻りに穿つたる堀の水の上は、自らが化粧殿の庭より落つる遺水の、末は黄河の川水と流れ入る木筋なら、夫の甘輝が聞入れ

て、御願成就せば、白粉を解いて流すべし、川水白く流るゝは目度度き印と思召し、勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずば紅を解いて流すべし、川水赤く流るゝは叶はぬ左右と思召し、母御前を受取りに門外まで出給へ、善惡二つは白妙と唐紅の川水に心をつけて御覽ぜよ……といふ錦祥女の言葉に和藤内が巖頭で箒を被つて赤白二つの川水に心をつけてゐると、即ち此處だ。

「南無三、紅が……」

この和藤内は大阪では竹島幸左衛門が好評とあるが、江戸でも二代目團十郎や松本幸四郎が、金平式の荒男として江戸歌舞伎の荒事に移し、豪快なものにしたといふ、今日見る和藤内もその系統らしい。なぜ「紅が流れたか」和藤内も日本魂の男が知らぬが、甘輝も唐土稀代の男だ。女房の縁で開いたとあつてはと首を振つた。そこで錦祥女が胸をぐ

さつと突き刺した、その血だ。母も義理の娘の後を追ふ。そこで韃靼王こそ母が敵、妻の仇と、

「討てば勝ち攻むれば取る、末代不思議の智仁の勇士、玉ある淵は岸破れず、龍栖む池は水涸れず、斯る勇者の出生す、國々たり君々たる、日本の麒麟これなるはと異國に武徳を照しけり……」と大夫の聲も濁る、ばかり築地では丸山定夫の國性爺が「お母さん、お志は決して忘れません」なんと新舊幕切の相違よ。

草履ばきの伊豆守——河内家が名古屋地方へ巡業した時丸橋忠彌を上頂した延若の忠彌、右團次が伊豆守。丸橋が池の深さを計らんと石をお堀にほり込む件がすむと伊豆守が傘をさして出てくる。或る日の伊豆守が傘はさしてゐるが草履ばきのまゝ出て来た。よく聞いてみると右團次の番頭が高ゲダを持つたまゝ便所に行つてゐたその間に伊豆の出になつたものらしいとはあとで大笑ひ！

『國性爺』の變遷

仲野武男

國性爺合戦が近松の傑作の一つで正徳五年十一月から足掛三年、十七ヶ月を打續けたのは周知の事であるが、此外に歌舞伎が操から脚本の供給を仰いだ最初のものが此の國性爺である事も注目すべき事柄であらう。

即ち翌享保元年秋に京都都萬太夫座で、神山小四郎の和藤内、柴崎林左衛門の甘輝で演じられたのを始めとして享保二年(三月?)には大阪で和藤内に竹島幸左衛門、姉川新四郎、櫻山四郎三郎の三人が扮して競演した。此時竹島の爲に脚色したのは福岡彌五郎で虎を二匹出したり、母に扮した八重桐が唐の幽霊になると云ふ様な珍趣好も

あつたらしい。

此年の五月には江戸の三座でも二世團十郎、廣治、幸四郎の三人が和藤内を競演して居る。

是より前、此年の正月、京都早雲座に「傾城國性爺」なる狂言が出て不入りを取つたとあるが、是が同じく二月には大阪澤村長十郎座で「けいせい千引石」と云ふ外題で上演されて居る、筋は、つきりとは判らず従つて「國性爺」との關係も知られないが、兎に角お家騷動物で、若殿と馴染の遊女長門の姉が若殿の許婚なる中の姫の家老大隅原右衛門の妻であり、そこへ長門が銀の無心に来り、原右衛門が妻に長門

の首討たせんとする處は後の淨瑠璃「傾城國性爺」の三段目の源泉をなして居るらしい。

諸此の淨瑠璃の「傾城國性爺」は海音の作で初演年月不明のお家物だが、明かに「國性爺」の模倣で、橋清澄の臣鬼拉牛藏と清澄の妻の實家筑摩家の臣犬上軍六が謀つて橋家を横領せんとするのに對して、橋の家來桑原女之介、筑摩の家老岩淵左膳等が各主家を守つて一味を亡すと云ふ筋で、女之介が國性爺に當るのだが、清澄の馴染妓角山の姉村路は左膳の妻になつて居る、そこへ清澄、女之介、角山等が銀の無心に行き、幼時別れた角山と村路が木戸を隔て、の對面から、角山が左膳の意を察して身を殺して兩家を救ひ村路も其後を追つて自害する(三段目)と云ふのは全く獅子城を探つたものである。

又享保十二年には中村座で「國性爺竹拔五郎」の外題で、團十郎が國性爺

實ハ會我五郎に扮し、甲冑に篋を着け素足に下駄ばきで、切竹と笏を持つて大立廻りを演じ、續いて享保十六年の京都都萬太夫座の顔見世にも「平假字今川狀」の外題で國性爺狂言が出て居る。之には和藤内は出て来ないが、傾城玉山と名乗つて丸山へ身を沈めて居る柄籠女を救ふべく老一官 和藤内の妹おむつ等が活躍するらしい、そしておむつが繪姿にイせて初めて己が許婚の夫を知る件はやはり樓門の場の焼直しだらう。

寶曆六年七月には中村座で「月湊英雄鑑」の外題で和藤内を四世團十郎、國性爺作者近松門左衛門實ハ緒方三郎を二世團十郎が勤めて居るが此時の筋は判らない。

次に寶曆十年春に嵐吉三郎座で「假名草紙國性爺實錄」なるものが演じられて居るが、時代を豊臣時代に採り、それに天草騷動をも混合したもので、國性爺は七草四郎と化けて日本を窺は

んとするので殆ど原作「國性爺」の面影も無い位だが、たゞ妻小陸が桃山城へ忍ぶ時、事の成否を白粉と紅を流して暗示すると云ふ處に樓門の場の匂ひを残して居る。

降つて文久三年二月に小團次が市村座で國性爺を世話に碎いた「髮結藤次」を演じて、中村座の彦三郎田之助等の「國性爺」と競演したが、明治二十四年にも千歳座で菊五郎が「髮結藤次」を改作して散髮物にした「國性爺理髮妾鏡」を演じて市村座の團十郎の「國性爺」に對抗した、すると會團藏も春木座で「髮結藤次」を出したので勢ひ茲にも三優競演の形となつた。

此外明治五年には田之助が「國性爺妾寫眞鏡」を演じて古今に扮して居るが、その彥惣との別れは樓門の場の焼直しである。

又明治二十九年には勝彦藏が「國性爺實記」なる六幕十場の大作を物した之は「國性爺」と「後日合戦」を綴り

合した様なものだが其第四幕目は「國性爺」の三段目を探つたものだ。

更に明治三十九年に伊井が近松研究と銘打つて「國性爺」を三幕に演じ（紅流し省略）近くは一昨年築地では是を演じたのは記憶に新しい處であらう。

斯くの如く「國性爺」は色々な變遷を経て來て居るが、獅子ヶ城樓門の場は特に傑れて居る故か何れの改作物にも多く此場丈けは採られて居る。忠臣藏七段目のおかるが二階の延べ鏡の趣好も明かに此の樓門の場の錦祥女の柄付きの鏡から脱化したものである。

よいがなア——浪花座一月下旬に開演した我童等の邦劇座は、大阪の芝居では封じ物になつてゐる近松の絶筆時代もの「關八州繫馬」を上場した。我童には大出來の英斷である。何事にも、この調子で進んでくれるといふんだがなア——さて——。

文樂座の印象

(到着順)

松竹常務 福井福三郎

文樂座開場式の當日は御多忙中にも拘らずわざわざ御來觀下さいまして、御満足なる御接待も出来ませず、不行届き勝ちにて何とも申譯けが御座いません。また早速「文樂の印象」を執筆御惠與下さいました段只皆御厚禮申上げます。

文學博士 藤井紫影

御靈以來久々で文樂座を見物すると、太夫にも三味線にも人形遣にも大分馴染の古顔が見えぬので、何となくうら淋しい氣持がするが舞臺は新築の小ぢんまりした可愛らしい小屋で、設備が行き届き聴くにも見るにも心地よく、周圍も道頓堀ほど騒々しくなくて、しみみりと古典藝術を賞玩するにふさはしいそ

れに太夫よりも三味線よりも一番後繼者の案じられる人形遣に若い顔の見えるのは非常に頼もしい、どうか日本獨特の藝術を存續する者我を措いて誰ぞやの意氣込で、十分奮發努力してもらひたい。

この意味で私はおやま人形の故老文五郎君を禮讚する。

越路遊き吉兵衛去りて只ひとりこの文樂に文五郎あり

辰松も冠子も見ざる昔なり今この文五郎たゞへざらめや

政岡の人形つかふ文五郎反身になりし姿よろしも

飯炊のこまかき仕事いつくしと目じろきもせず見つめ居り我

政岡が屏風にすがる後つき片手遣ひの型のよきかな

醫學博士 高安吸江

我が内へ歸つたやうな氣がしました。それは道頓堀の借家住居から獨立して、自家専門の小屋を持ち得たといふ事の外に、辨天座での多少散漫な感じからのがれてより多くの落ち着いた着を覺える事が出来たのをも意味するので

す。

大阪市土木部長 島重治

文樂座は先般新装を凝して華々しく開場式を舉行了。總てが近代的施設とも申すべく就中大部分椅子席にしたのは古典的藝術を標榜してゐる同座としては果斷の處置と稱すべく私は大賛成である。或は人形淨瑠璃の眞藝味を賞玩するには座布團で無ければとの説をなす者もあるやうだが我邦の風俗が今日の推移を経て居る以上斯る施設を爲すは當然のことと然かも何等古典藝術を賞玩すること矛盾しないのである。それは藝術其者とは全然別個の問題であるからである。若夫れ藝術に關しては人形淨瑠璃のみでなく能、演劇其の他百般の藝術に對する私共の觀念として現在の演技者を批評するには必ず故人を偲び然かも今人が如何なる名人でも尙且つ其の伎倆が故人に及ばないものがあるかの感を脱することが出来ない。私は壽三番身を翻るに就いても三十年の昔攝津大塚や團平、紋十郎等の古舞臺を想起せざるを得ないのである乍併津、綴等の諸太夫を始め三味線、人形の諸丈が渾身の努力を凝揮されたる眞摯なる演出振りは自ら感動させられたと同時に斯道將來の爲に頗る心強く感じた。藝術の廢頽は時流に苟合

するより甚しきは無。座内の設備は益々近代のなるを歓迎するが藝は何處までも傳統的眞髓を尊重して欲しい。文樂座の開場式に臨んで兩者兼備せるを體驗したのは洵に欣しき限りである。

山口草平

昨年は春からずつと東京の畫室に暮らしたので未だ文樂座を觀ませんが、郷土藝術のために同座の新築を衷心から悦びて居ります寫眞の外觀の印象には文樂座として異議がありません、いづれ實物を觀た上で機會に申上たいとおもつてゐます。

北村兼子

女浪人は南船北馬、全國婦人文化講演會で臺灣に巡業をやつてゐる、臺北の醫學專門學校で演壇を降りて樂屋へ引上げたところ、文樂座開場の新聞があつて、その盛況が記されてあつた、遂かに想像して感想を書く。

古代藝術の復興は世界で、パリでも三ヶ月も一狂言を打續けるものは新作ものではない歐米の社交界で日本人をみると文樂の話させられるほど人形淨瑠璃は日本の代表名物である。その名物の根據地である文樂座が焼けてから十何年かの月日を闊して焼けぶとつた

再興ができた。

文樂座に勤める藝人はそれ／＼、優劣もあるが個々に切離してみれば、どれも名人たる資格は備つてゐる。その修練を積んだ技藝は日本の誇りとして推賞するに足る。トーカーの近代科學に對する古典技巧である。

義太夫とか人形使ひとかいふむづかしい技藝の修業は採算的に引合ふものではない。従つてその興行もそれほど弾き出せるものではなく、道樂本位でもできない。古代興味擁護の殉藝術精神と高尚な嗜好がある上に尙ほ興行餘力のあるものでなくてはできないことであり天下の大松竹にして始めてあんな文樂殿堂が建てられたものである。

私はその開場式に列する光榮を取りはづしたが文樂座に對する概念批判なら遣い臺灣からでも女學生の作文のやうなこの短篇で送ることがができる。

高谷伸

一言で申せば灘の生一本を上品なカフェーで頂いてゐる味とでも申しませうか。

大朝憲務 下村海南

義太夫に椅子腰かけは馴れないせいかまだそぐはない氣がするしかし大勢之も止むを得ぬことであらう殊に子供などつれる連中がう

んと多くなつて来てよいと思ふ。

序でに中の島の公會堂でヴァイオリン、ピアノでも又聲樂でもどんな高調に達しても満場靜まりかへつて聞きほれてゐるところが義太夫で肝心のさばりなどで聲をあげる手をたゞからうした感心しないわい癖もこの小屋の改造で次第に改まる事とおもふ又そうありたい。

大朝憲務 上野精一

文樂座の新築復興を非常に喜びそれを招來された努力に對して敬意を表します、昨日は東京から來た淨瑠璃愛好者に文樂座を聞いて貰はうとしましたが座席がないので遺憾ながらダメでした教化のために先代救を女學生に聞かせたり見せたりする當否は別として何とすばらしい入場者ではありませんか。

富田泰彦

文樂座そのものは不朽のものとなつた。だがこれに盛る藝術は何う云ふ形式のものに變つて行くかは誰が豫想出来ませう。

人形淨瑠璃の盛衰はかつて名人の出現を待つのみ斯くて文樂座は不朽のものとなつた以上は、必らずこの機會に恵まれる日のあることを信じて可いと思ふ。

松本憲逸

一、何よりも劇場の小ぢんまりと完備したことを愉快に存じ候大阪隨一と感じ申候。
 一、土佐大夫のやゝ恢復したるは心強し、つばめ大夫の將來期待せらる。紋十郎怠けるべからず。
 一、人形は榮三の俊寛が良しと思ひたり。
 一、大夫三味線に劣りたれど尙ほ將來天才の出現を期待し得べし、人形使に至つては天才の出現養成以外に期し難し文學の危機こゝにあり。

渡邊虹衣

モダン式の建築がアノ古典な人形淨瑠璃と實際どんな風に調和するかと開場式の當日アノ絢爛な裝飾建物を見て感じたのであつたが初観行を見て少しも然うした懸念などは問題でない事を知つた、ツマリ何も彼も大夫と人形との藝術に打ち消されて了つたのである只慾をいへば椅子の前後の距離が狭い點が多少ゆつたりとした氣持を削ぐ事である初興行見物中の所感川柳。

魂は人形に在り文五郎
 夕霧は紋十郎の手に息吹き
 榮三の脉甚兵衛の胸に打ち

八木善一

座席に座つた處は小じんまりと落着きたいゝ感じ、困るのは場内で飲食喫煙を禁ぜられてゐるので打寛いだ和やかさに缺ける事と義大夫に椅子席は何といつても不調和右御回答申上候。

吉田禎男

モダン建築の中に息づく古典藝術の粹！御靈文學焼失以來こゝに幾年、假りの宿を轉々として今、新裝なつた本陣を得て大夫三味線人形嬉しそうに舞臺を勤めて居ます。古典藝術を盛る近代建築、こゝにも時代が見へます此の古典をいかにして時代に活かすか、これが第一の問題でせう、そして大切なものぢやないかと考へます。

高木善治

美しい小屋です、他の芝居小屋の様に下駄をぬがせたりお菓子の手を心配する必要があるのが結構です。

大阪外語校長 中目覺

拙者藝術の事は了解致さず候へ共今日世界無二とも稱すべき文學座は永久に保全致し度きものと存候。

大阪工業大學々長 堤正義

新文學座が奇麗に立派に完成し昭和五年の年頭に新裝を凝して活動し始めた事を衷心御祝ひ申上げます將來益々大阪郷土藝術として其使命を發揮せられむ事を祈つてやまない次第であります。

中村鷹治郎

古人を偲ぶ——開場式に御叮嚀な案内を受けて、早速出かけました處、結構と云ひ設備と云ひ申し分のない新裝に先づ驚きました。私も十一二歳のころまでは、よく文學へ遊びに出かけて、人形を遣つた事もあり、人形淨瑠璃と云へば特になつかしい感じがいたします、そのころ、番付にまで私の本名が出て親類内で問題になつたなど、いふ話もあります、すが、人形淨瑠璃を松竹の手に移した時も、内井さんに「名物だすさかい、是非引きとつてお世話をおしやす」と云つたのも私で文學とは深い因縁があります、だから、此度の文學座新築落成にも、人一倍今昔の感を深くいたします。

それにつけても、法善寺さん（先代法太夫）二見さん（攝津大掾）達は眼府で定めし嬉んで居られるでせう。

實川延若

世界唯一の、わが國寶文樂座の新築と共に人形淨瑠璃を願はくば永久に保存したいものと存じます。

竹本文字太夫

文樂の根城が出来まして誠に結構です。

又マチネも出来まして新らしい人が見物に来て下さるを何より難有く思ひますしかし演題に付て私のおもはくは新作は一寸むつかしく懸れたる丸本より古い物を新らしくしてなるべくは日本歴史物を出して淨曲の範圍を廣くしたいと存じ升又景事物を出し物によつては洋樂と合奏してもよいと存じ升何分古典藝術故古イ中へ新らしく又新らしい中に古い物とを存じます。

豊竹駒太夫

文樂座も爰に再建され私等も更生の意氣で出演して居りますが文樂の再建は斯道の爲悦ばしい事にぞんじます殊に此度府教護聯盟の幹旋で中女學生方に通俗的教育として文樂座を見物いたされる事は誠に此上もない結構の次第です今回マチネとして先代萩御殿出演を依頼されたを幸に初めの方によく分る様節よりも文章に重きをおき文句を明瞭に懸命に語

つた次第です何分人形淨瑠璃に餘り趣味のない少女方なので其感じはどうだらうと案じて居りました所案外靜かに其藝を熱心に聴き政岡の誠忠には涙を流し中には顔をも得上げなかつた方もあつた様です兎角現代の若い人達は人形淨瑠璃を一笑に附す方も多くある様ですが此度の催しにてその古典藝術の味がよく御了解を得た事は斯道の爲誠に悦ばしい事です之は日曜毎に催される由ですがどうか今後名作を選定して永久に繼續せられん事を希望する次第です。

鶴澤友次郎

文樂座が新築になりました事は我等一同歡びに堪ない次第でござい升三百年の歴史あるチヨン番に廟上下時代の淨曲此洋式の劇場洋服姿の御観客と何の不釣合もなく調和して御見聞下さる事は我々斯界の祖先及び故名人方の力に因ものと感謝致しますと同時に近年は西洋諸名士が續々御來場になり當地にても理解ある好劇家及び大學生中學生諸氏が院本御持參にて御研究、過日も某學校々長引率の許に女學生數百名御見學されたるが様に若き人々の間にも淨曲に對するなつかしみや理解をもつて頂く事は大いに力強き事に存じます此後私共一層研究を重ね皆様の期待にそむかざ

る様又永久に斯界の繁榮に懸命にとめたいと存じます。

吉田榮三

たう／＼と舞ふや三番のふりのよき

日度度き御代の色にかややく

新春を迎へて木香の芳しき古典藝術淨曲の殿堂文樂座の復興も三番叟の鈴の音色に連れて樂しき暮は切り落されました私等として待ちに待つた我家が新らしく建つて後世まで安氣に彌増す發展の新路を開拓が出来る事から祝福する次第であります。

豊澤猿糸

文樂座が新築されました初日以来連日賣切の好況を呈して來月迄續演すると言ふは近年稀な事で我等末輩者迄實に難有事と感謝して居り升どうぞいつ迄も斯くあらん事を切望して居り升が入場して第一番に感じの佳いのは案内者が美少女で愛嬌も能く親切であるのと草履又は靴の方々は其儘入場出来る事で飲食等も全然場内ではなく食堂及び休憩室で給仕が茶を入れて萬遍なく運んで乾いた咽を潤澤にするのが一般の聴衆に非常に好感を與へて居る様です。

次にお客様が從來の如き御老人が僅少で若い方々が大變殖へた事で是迄とは正反對の有

様全く大衆的に成つた事を心から悦んで居り
ます最近開始せられたマチネーの如き實に悦
ばしい現象で青年の男女學生達に古典藝術の
眞髓を普及せらるゝ當事者の方々と松竹會社
々長始め御一同の御努力を厚く謝したいと思
ふて居ります。

此際我等演技者も充分研究して夫に報はね
ばなりません。

次に狂言の建方も古名作を上演せらるゝ事
を非常に演技者一同悦んで居ります。

終りに於て一言申上ますが其殿堂たる文樂
座が、モダン式の頗る美觀を呈し贅を盡した
る事が御客様を變轉せしめた一の原因とも見
られ我々出演者が何と御禮申して良きやら判
りません自然肩身も廣い譯で此上は内外協力
一致してどうか成功さして頂き度思ひ居りま
す。

右は只感想のみにて、希望としては澤山申
上度事も抱負もありますが、稿を改めて申上
ます拙文御免。

野澤勝市

文樂座についての感想は皆さんが云ひつゝ
して居られませうから、私はマチネーについ
て……此度中等學校の學生さん達のために第
一回を一月十九日に開催致されました。私は

幸ひにも三番叟の三味線に撰まれ出演致しま
した。これから成長せられる若い方々にどう
映じましたかしれませんが、先生はじめ、美
しい學生さん方の緊張ぶりを見まして、心か
ら嬉しく思ひました。今後共に狂言の選定、
演出に努力致し、永く繼續致したいと思ひま
す。又閉會のせつ、先生が學生さん達へ「今
日はわざ／＼あなたがたの爲に、特にマチネ
ー開催。出演致された事故、今日は此氣分を
忘れず。より道をせずと歸りなされ、親御様
へお咄しするようと教訓致された事は、我々
出演者一同より深く感謝致します。」

鶴澤叶

今度新築になりました文樂座は從來の型を
破つて新しい試みをせられたもので觀衆のた
めにも我々演者の方からも洵に好都合に出來
て居ります此點は一同喜んで居る所でござり
ます世間の人氣も大變よろしい様に閉いて居
ります只一つこれは別問題でござりますが開
演時間が短いため私らはじめ後進輩一同實地
の修業に就て少なからず不便を感じて居りま
す此點に就て何卒經營者諸氏によるしき方法
を御一考煩したいと存じます平爾ながら右愚
見申述べます。

竹本津太夫

世界でたつた一つの郷土藝術と推賞されて
ゐます文樂座の再興が此度四ツ橋陣に新裝さ
れて、しかもモダン劇場として古典藝術の街
頭進出が敢行されましたことはまたない喜び
で御座るゝ。松竹白井社長が二十數年來の
犠牲的貢獻によつて爰に美々しく竣成した文
樂座はその位置といひ、設備といひ、萬端に
行届き、固有藝術の殿堂として實に完璧のも
のであります。私は如何にして皆様に聴きよ
いやうにと初日以来床に上る毎に研究をして
ゐます。つまり觀客席では些かもそれと氣付
かぬこととありますが、床で自分が語つてお
る聲が自分の耳にどうも小さくきこえてこれ
では皆様にはと思つてゐますが皆様の方では
非常に満足してゐられますので差當つてどう
とはありませんが此頃では坐る位置を少し下
がつて語つてゐます。總てが緊縮短縮といつ
て當文樂座でも時間短縮が勵行された結果、
今まで獨特の通し狂言が出來なくなり、隨て
「はゞ」がなくなり、これから文樂を持續け
てゆく若手新進の修業が充分出來ないのを憾
みに思つてゐます。その中には時間を早める
とか何とか考慮して大い新進修業の途を講じ
たいと思つてゐます。これからは新築文樂座
の床でこの古典藝術を益々世界的に發揚する
心組であり、偏に皆様の御後援を希む次第で

二月の劇壇

◆中座 二月一日初日 毎日午後一時開幕

の東西合同大歌舞伎は一番目「假名手本忠臣藏」大序より七段目まで、二番目歌舞伎十八番「助六由縁江戸櫻」吉原の場（河東節御連中）大喜利（文屋と喜撰）一幕でその配役は大星由良之助、早野勘平（鷹治郎）鹽谷判官高貞、女房おかる後ニ遊女おかる、三浦屋揚卷（福助）足利直義、大星力彌、三浦屋白玉（扇雀）通人里曉（吉三郎）矢間重太郎、茶屋女房おまつ、桐の局（成笑）竹林喜多八、若者梅藏（成三郎）村松三太夫、三浦屋胡蝶所化彌勘坊（雀）大鷲文吾、種ヶ島六、三浦屋八重衣、櫻の局（扇）茶道珍才、佐藤與茂七、三浦屋浮橋、竹の局（鷹之助）茶屋廻り竹松（章景）沙田又之丞、三浦屋唯袖、所化大目坊（眼童）片山源太、奴蛇内、萩の局（竹藏）小寺十内、苺の者松吉、所化信念坊（市界）早見藤左衛門、男達半鐘勘八（右左次）吉田忠左衛門、百姓與一兵衛、男達追手風才八（齋五郎）拳九太夫、狩人めつぶし彌八、侍利金太（九團次）鷺坂伴内、朝顔

千衛（箱登羅）母おかや（菟女）肝入源六（市藏）桃の井若狭之助、石堂右馬之丞、弁定九郎、千崎彌五郎、白酒屋新兵衛實ハ曾我十郎、喜撰法師（勘彌）福山かつき富吉（三升）茶姿お梶（しうか）子守おやす、茶屋廻り龜松（龜三郎）遠の林助右衛門、松の局（彌好）加古川本藏、矢島五郎右衛門、男達釣鐘權兵衛（錦四郎）中村半助、若い者喜之松（六七）磯川十郎右衛門、三浦屋愛染、所化念珠坊（右衛門）三村治郎、所化觀音坊（鬘斗藏）近松勘六、所化金剛坊（彌三郎）菅野半之丞梅の局（高麗五郎）矢間新六、男達半窪猛六（新藏）三浦屋梅香、所化遍照坊（梅太郎）外良賢藤吉（純藏）原郷右衛門、狸角兵衛、くわんづら門兵衛（國右衛門）鹽谷妻顏世御前一文字屋お才、母清紅（源之助）藥師寺治郎左衛門、鬘意休實ハ伊賀平内左衛門（彦三郎）高武藏守師直、不破數右衛門、寺岡平右衛門、花川戸助六實ハ曾我五郎、文屋康秀（幸四郎）

◆浪花座 二月一日初日 毎日午後三時開幕
の花形大歌舞伎は一番目、近松門左衛門作「國性爺合戦」二幕、歌舞伎十八番の内「矢の根」大陸慶連中、新作「鬼神の舞」一幕、淨瑠璃

「釣女」常勢津連中、中幕「時雨炬燵」紙屋内の場、二番目「櫻をうづむ雪」一幕その配役は左の如し。

和藤内三官後ニ延平國性爺、太郎冠者、和泉屋娘お春（我童）曾我十郎祐成、醜女（長三郎）大名、でつち三五郎（霞仙）道後彌三郎（信近）政治郎）美女（ひとし）侍女、宮方の娘衣織、紀の國屋小春（成太郎）曾我五郎時致（三外）甘輝妻錦祥女、女房おさん、倉番利喜藏（中村魁）馬士畑右衛門、湯淺右衛門次郎時武、粉屋孫右衛門、林子平（稿三郎）侍女、林貞十郎（駒之助）侍女（我久之助）侍女（魁童）侍女（我久之三郎）姉嬢お末（小鷹）甘輝臣揚大鐵（延郎）道後從者藤五、八百藏）和藤内母清、道後左衛門入道淨阿、和泉屋重兵衛（長太夫）子息直太郎、義直）甘輝臣木武鎮、いづみや手代金兵衛（奥山）左衛門郎黨、江戸屋太兵衛（美鷹）侍女（村右衛門）捕手改五郎次（松壽）侍女（苜厲）甘輝臣金營武、郷黨加地十郎（鷹正）郷老一官、海老名源三、一舊五左衛門（大吉）伍常軍甘輝大森彦七盛長、紙屋治兵衛（延若）

【附】角座、京都南座、神戸松竹劇場は第五十七頁。文樂座は第三十三頁（参照）

氣篤君子著

岡本綺堂氏序文
額田福氏文
伊東深水氏装幀

戲曲集
鎌倉御所

定價金貳圓

送料十八錢

發賣以來好評嘖嘖！

切に好劇家諸賢の御一讀を乞ふ！

目次
鎌倉御所。左門とお七。許婚。
女影ヶ原。宿命。仙術。
戀の黃八丈。

勅任官の奥様で、令名高き著者の精筆は、史劇『鎌倉御所』外六編として世に出た、其の内『左門とお七』は既に松竹座に於て、壽美藏、松蔦に依て上演し、好評を博した事がある、現代劇、世話劇、舞踏劇、喜劇に、女性としての特種の觀察を表現せしめた本著は、劇文壇に趣味を持つ大方諸氏の必讀を待つのである。

歌舞伎出版部

東京市橋本町歌舞伎座内

振替東京一八一〇番

電話東京三七九番

編輯後記

松本泰三

道頓堀は中座が「助六」浪花座は「矢の根」文樂が「勸進帳」、二月の劇壇は歌舞伎十八番ものが大流行で、道頓堀はまさに三十六番の繁昌に、見ぬさきから満腹になつて仕舞ふ。その上中座には「忠臣蔵」を五年振りに上場その前も五年目に上演してゐる。十年一ト昔と云ふが當世はスピードの時代だから五年に緊縮か。……「忠臣蔵」各段の考證を高谷、森、山上、白岡の諸氏に擔當していただいた。この試みは成功で評判がよい。

人形と芝居の「國性爺」が文樂と浪花座で競演される。どちらもみものである。「國性爺」はよほど競争すべきの狂言らしい。大阪初演も江戸初演も三座が競演してゐる。文樂では十七ヶ月を打越したといふから餘程みがいのある狂言らしい。本號に、淨瑠璃本と芝居本とを對照して掲載した。讀者諸彦には參考になる事だらうと信ずる。

久しぶりである東京の濱村米藏氏から玉稿がいたゞけた。何時お願ひしても執筆をことほられるので、こんな度もかと思はんでもなかつたが、早速いたゞけて

こんな嬉しい事はない。また邦枝完二氏からも「助六」の原稿がいたゞけた。楠田敏郎氏は一昨年の京類見世號に御執筆を願つて以來久しぶりである原稿を頂戴した。

高谷氏の紹介で初めて御執筆を願つた「國性爺」の變遷一の仲野武男氏は東大出身、目下同志社大學國文科の教授で、卒業論文は近松ものゝ研究であつた由。こん後の御執筆もお願ひすると共に讀者諸彦にも御披露申しておく。

本號から「ブレイガイド欄」を設ける事にした。こゝには一般演劇に關する記事、殊に演藝時事、俳優個人の近況、一步進んでは小劇場、研究劇團の照會等、ニュースパリエーに富む記事を、ウィットにギヤアゲ化して報告する。こんな書き方をすると自分にも晦澁になつて來た。要は軽い文章で面白く明るい記事にする約束である。

松竹本社文藝部の食滿南北氏は一月より西成區南海通二丁目二番地長樂園に移轉された。その通知の葉書文がふるつてゐるから次にかゝげる。

……極樂園だとなほいゝのですが、恐らくこれが私の手から御通知する最後だらうと思ひます。此次のわたましは遺族からお報らせする事になりませう。イヤおめでたい事です。

昭和五年二月一日發行

月刊『道頓堀』第四十一年

誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪府北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵五厘)

昭和五年一月三十日印刷

昭和五年二月一日發行

大阪府南區久松門町八番地

發行所 松竹土地建物興業株式會社

編輯者 島 江 鐵 也

發行所 大阪府東區福新町二丁目

印刷者 松 本 米 藏

大阪府東區福新町二丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪府南區久松門町八番地

發行所 松竹土地建物興業株式會社

編輯部 道頓堀編輯部

電話 二四〇番

電話 六六六五番

一南

温泉料理

御宴會には

百疊敷大廣間

御芝居の

お歸りには

皆様お揃ひにて情趣

深いおつな温泉料理

文樂座

南一食堂

洋食部

和食部

大宴會場

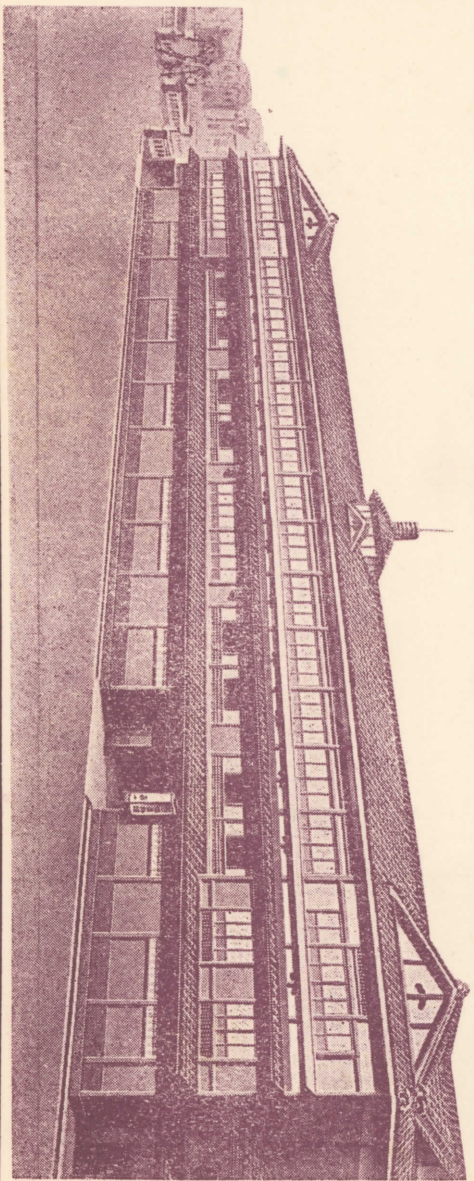
御婚禮

御披露宴

四ツ橋

山南温泉料理

電話南(七)五二〇
番一一



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年一月三十日印刷
昭和五年二月一日發行

道頓堀第五年二月號
第四十一輯

金參拾錢
(郵錢五厘)

若く明るい顔になる

トト白粉

東京平尾賛平商店

